

全430枚書下ろし

奇妙なフープー鳥

後編

たなか 踏基

(原典翻訳 高原伸輔)

400字詰原稿用紙 全430枚 書き下ろし

平成十八年三月十五日後編脱稿

多胡の碑や霊の真柱春がすみ・踏基

催眠治療の部屋

永井剛一郎の明治生まれの父永井剛は、定年後最終的に長野県内を転々とした後、教員生活の最初の赴任地、群馬県藤岡市に舞戻って居を構えていた。長年喘息とパーキンソン病で苦しんだ末、八十歳で亡くなった時には、多くの元藤岡女学校の姥桜同窓生が大挙して、葬儀場の偕同苑に押し寄せ、新潟研究所在職の喪主、息子永井剛一郎を慌てさせた。

父永井剛は当時としては、東京育ちでお洒落好みの女学校の教師だった。なにしろ、東京の学習院大学の仏文学のY教授宅で書生時代に身に付けた、仏国のモダンな感覚と日本の古さを同時に兼備していたからだ。

学習院大学のY教授は、仏留学中に料理を極め、帰国後に仏料理辞書を日本で始めて編纂した。皇室にも出入りし、当時の宮家に仏文学と仏料理を教えた。また仏料理に関する一級のグルメ人として、当時のシェフやソムリエ達にも知られる存在だったから、後に軽井沢の住人となっても町民から文化人として大歓迎された。

Y教授の影響を受けた父永井剛は、当時から男では珍しくオルガンを弾きこなし、観世流の謡曲と神道・国学に傾倒し、藤岡女学校の若い

理科の教師となった。然も、地方に流行り始めた九人制バレー部コーチとときは、教師永井剛が、女生徒達にもてないわけがなかった。が周囲の眼は、態々蔵前高等工業専門学校の卒業資格を捨て、何も都落ちまでしてど田舎、藤岡の女学校教師にならなくともいう同級生の偏見もあつた。永井剛としては、隣町に存在する奈良時代の遺跡、吉井町の多胡碑や辛科神社の近くで仕事ができるだけで良かったのである。

この遺跡と、神社の存在を永井剛が知つたのは、蔵前高等工業専門学校在学中のことのようだ。この地が、日本への渡来人、特にイスラエル十支族の末裔、始めて日本に中東アジア渡来のユダヤ人が住んだ場所であり、古代神道発祥の地であるらしいと知つたからのようである。

歴史に寄れば、紀元前八世紀、イスラエル王国は、北王国イスラエルと南王国ユダに分かれていたという。北王国イスラエルには、イスラエルの十二支族中、十支族が属していた。紀元前七二二年に、北王国はアッシリア帝国に捕囚され、この帝国滅亡後も、その内十支族はイスラエルの地に戻らず、シルクロードの各地に離散したという。

中国や朝鮮から多くの渡来人が、日本に流れ込んで来たが、この中にそうしたイスラエル十支族の末裔が混ざっていたという説である。如何にもこの遺跡のある群馬県吉井町の地域が、邪馬台国にいた大和民族の棲家とは異なる、魅

力的な魔界残照の地のように思えたからだ、後日孫の剛志に語つたことがある。

永井剛は、孫の剛志を可愛がった。

誰でも自分の息子よりも、孫が可愛いと云うが、幼年期の剛志が妹の慶恵とともに、長岡から二人で、藤岡市の祖父の家に遊びに来ると畑仕事を放つて相手をしてくれた。

祖父の永井剛は二人を良く、藤岡の七輿古墳や吉井町の辛科神社に散歩に連れ出している。幼い剛志は、何故祖父がそこに自分等を連れて行くのかわからなかったが、二人そこに手を繋いで佇んでいると不思議な靈気で心が満たされてくるのを感じた。

「剛志は俺の気性を受継いだかもしれない」祖父永井剛は、自分の連れ合いに晩年嬉しそうに良く言つていた。というのも、宇都宮の没落士藩出の、曾祖父永井剛造からの氣質を、孫の剛志にみていたのかも知れない。

曾祖父永井剛造との触れ合いが、その後の祖父永井剛の人生を決定付け。最初の赴任地、晩年の定住先共に、藤岡市を選ばせた最大の理由だったのかもしれない。

曾祖父永井剛造は、処刑されたり、没落したり、また挫折したりする者の方が、権力を行使して屈服させる側の者よりも、本当は真の心情を吐露する力を潜ませているのだと、常日頃語っていたからである。またこつも言っていた。仕事に就いたら、心の生計を立てるために働け、技術者は人を裁いてはならない、時代を映す鏡であれ・と。曾祖父から祖父、孫へと伝播した、心の裡の精神的な力、人の心を透視するよきな靈能力といつても良い力があつたからだ。曾祖父永井剛造の精神的支柱となつていた

ものそれは、江戸時代安永から天保の時代を駆け抜けた国学者で神道学者の、平田篤胤(一七七六〜一八四三)の思想にあった。

本居宣長に師事し、国学神道の基礎を築いて国学者、生涯に膨大な著作を残したが、その守備範囲は誠に広く、天文学にも通じ独自の曆を作り、いち早く地動説を認める等、博識多彩ぶりは江戸時代において群を抜いている。鎖国下であったにも拘らず、外来の思想や宗教を貪欲に摂取した。蘭学者とも親しく意見交換し、耶蘇経(キリスト経)、インド佛教、言語、曆運、人間生理を学んだ。中でも心靈研究は篤胤の中心的な課題であった。生まれ変わりを経験した少年の詳細な記録を書いたりしている。

元々永井家一族は、神道の家系である。

群馬県・栃木県を股にかけて、由緒正しい神社の宮司を務めた先祖が何人か居る。永井剛一郎の父永井剛は、旧宇都宮藩の没落士族の末裔であったが、江戸時代の平田篤胤の熱烈な信奉者でもあったという。明治生まれのこの父永井剛には、大正を通り超して昭和の時代の後遺症が重く心に押し掛かっている。七生報告や八紘一宇の精神は、元々平田篤胤の思想を軍部が巧みに取り入れたといわれているが、敗戦と共にこの思想はガラガラと画墮に帰したからである。この挫折感には正に筆舌に尽くし難かった。

この国学の教えを、永井剛は祖父の永井剛造から得ている、永井剛志から見ると、永井剛造は曾々祖父といつことになる。余談であるが、栃木県佐野市に歴史の古い私学で明治四十一年四月創立、葛生高等学校がある。その創立者は永井泰量である。父永井剛は、群馬県の藤岡市の女学校に奉職する。隣町後述の吉井町に

辛科神社と多胡碑があった。これは永井剛一郎の父、永井剛の祖父、天皇制神道論で理論武装した、宇都宮藩の典型的なナショナリスト、曾祖父永井剛造の影響だったに違いない。

国学者平田篤胤は、多神教に墮落した当時の日本神道を憂い、一神教時代の旧神道、所謂天皇制神道論を復活せんとした人である。明治初年の神物分離や廃仏棄釈運動にまで繋がった、過激思想の革命家である。

「わたしは、おてんとさまも見ずに死ぬ」といつて座敷牢で非業の狂い死にした、島崎藤村の父、島崎正樹も平田篤胤の死生観に猛烈に傾倒した信奉者であったと、島崎藤村の研究者で知られる、著名なジャーナリストの梅本浩志氏が、その著書の中で述べている。

「島崎藤村とパリ・コミュニケーション」(社会評論社)によれば、最初篤胤は、同じ国学者の本居宣長の著作に触れ、その門を叩くがやがて、師のフープを超えて耶蘇教(キリスト教)の思想を包括的に取り込み「霊能真柱」を三十七歳で著したと伝えられる。新たな思想体系を成遂げている点で、永井剛一郎の曾祖父永井剛造も篤胤に傾倒したようである。当時、明治維新を導く思想家の一人として、庶民の間でも高く評価した人が多いと聞く。

「霊能真柱」で次のように述べている。

さて、その霊の行方の安定を知りまくするのは、まづ天地泉の三つの成初め、またその有象を、委細に考へ察て、その天地泉たらしめて幸い賜つふ、神の功德を熟知り、また皇大御国は、万の国の、本つ御柱たる御国にして万の物万の事の、万の国に卓越たる元因……

△こうして靈魂によって先ず天、地、泉ができた。それが神の徳によって造られたことはよく考えてみればわかることである。またそうした神が創造したわが国は、あらゆる国の中で柱となる卓越した国であるととも、万物万事に卓越している国である……

皇大御国と天皇制を中心に置いてはいる

が読む程に、誰しも旧約聖書の文言に似ていると感じるであろう。そうした思想で、日本神道を換骨奪胎し、国学を明治維新の革命理論に転換させたのである。「幽世」という死後の世界観、「幽神」(壮大な宇宙観とも言える絶対神の存在、これは耶蘇教(キリスト教)というよりも、天地万物の創造主、旧約聖書のユダヤ教成立前の絶対神「ヤハウエ(エホバ)に最も近い考え方であった。古代ヘブル語書物に出現する「ヤハウエ」は、新約聖書には出てこない。何故なら日本語訳の際に「主」という一般名詞に、全て読み替えられてしまつからである。英語のアルファベットで表現すれば「Y A H W E H」となる。因みに、「わたしはある」をヘブライ語に訳すと「ヤハウエ」となる。その点で、国学者で師本居宣長を超越した、平田篤胤の唱えた神道論は、同じ一神教の旧約聖書時代のユダヤ教に酷似している思想であったと言えるのである。

キリスト教の三位一体とは、「御父(ヤハウエ)」「御子イエス」「御霊」の三者が一体であるという教えである。決して三神論ではなく、一体になった唯一神である。

「幽神(ヤハウエ)」の前には、人間はみな平等であるというユダヤ教(耶蘇教)の思想

を見事に取り入れた平田篤胤の、如何にも大衆扇動家らしい強烈なアジテーションは、江戸幕府の土農工商の封建社会を脅かす思想だったに違いない。こうした意味で、平田篤胤という思想家は、当時の江戸幕府にとっては、潰しておかねばならない、デモニーシユな反体制派の指導者だったと言える。

こうした篤胤思想を祖父永田剛造は、孫の永井剛に伝えたのである。一般的に思想的な世界観や意識の世界観、平たく言うなら、心や霊能的能力のDNAは、祖父から孫へと隔世遺伝するものらしい。永井剛一郎の長男剛志は、永井剛からみたら孫に当たる。祖父の永井剛の心や霊能力が永井剛一郎を飛び越して長男の剛志の潜在下にあつたとしても、いや、もっと遡れば曾祖父永井剛造の霊能力と言つても、決して不思議ではなく、言い過ぎでもないのである。

四菱商事傘下の四菱荒川商事との合併に抵するようになり、「滝永プロ」のベンチャ会社旗揚げの宣戦布告が、夫永井剛一郎の戦いの始まりなら、その時期、妻の永井真琴の身にも新たな別の戦いが生まれていた。

それは、長男剛志の中学時代から兆候を見せていた引き籠もりが昂じて、高校進学すると妹と母親に向けられた言葉の暴力を含む、家庭内暴力が始まったからである。剛志は生れた当初から、変つた幼時語を喋る子であった。

言語の発達は、身近にいる母親を介して始まるとされるが、剛志の第一声は「マア」や「ママ」でもなく、「アバ、アバ」の連呼だった。

次に「マコウ」「フープ」だった。やがて「フープ」とちゃんと言えようになり、飼つ

ていたインコを指差し「フープ、フープ」を連呼した。言葉を覚え始める幼児語であると、左程真琴も気にしていなかったが、ある日、父親を指し「フープ、フープ」と、母親を指して「マコウ、マコウ」と叫んだ。

真琴には、それは剛志が寝床でふと耳にした「夫婦なのに」と言う言語や名前「真琴」が訛つた言葉だと思つてきた。何故なら長岡のあの頃、若い妻の真琴はこの言葉を長男剛志の前で平気で使つていたからである。「私達は夫婦なのに!」「留守番ばかりの真琴なのね」と愚痴つたり、夫婦間で言い争つたりして、口喧嘩が絶えなかつたからである。その光景を剛志は目撃した。

幼稚園、小学校入学までの剛志は、真琴も他人に自慢したいような手の掛からない、頭の賢い良い子であった。でも幼時期から、気に入らないことがあると、食器をひっくり返したり、母親に投げ付けたり、持ち前の利かん気を発揮し、乱暴な恣意行動が始まるのである。

中学生になると、決まって父親「フープ」不在の時に恣意行動が始まるのである。食事も執らず、自室に閉じこもることもしばしばである。その頃、幼時期の父親の愛称「フープ」と母親の「マコウ」は永井家ですっかり定着し、小学校、中学生の頃まで続いていた。

真琴は、すっかり疲れきっていた。思い余つて、電話で東京の実家の母に相談して、何度も神頼みをやつた。子供の時から馴染みの、浅草の三社権現社のご祈祷を受け、末社の被官稲荷神社にも詣でたりした。三社様のお札ご朱印を戴いて、自宅の神棚に納めて祈つたが、ご利益は薄かった。

夫永井剛一郎は、殆ど家庭を顧みる余裕す

ら無く創立会社の社長として、殆ど家に居ない状態が続くのである。真琴は一人で、毎日高校生剛志と喧嘩腰で対峙しなければならぬ。自分の息子と一緒に、真琴は毎日自分の心が次第に荒んで尖がっていくのが怖かった。「おまえなんか、母親の資格もない!」

高校生剛志の罵りの声が頻発した。いつそのこと息子に高校を休学でもさせて、一緒に転地療養でもしなければ直らないかもしれない。・とも深刻に考えたりした。

ひよつとして精神障害かもしれない。・と、長岡保健所や精神科の医師の門を叩いたり、新潟市のケアセンターのカウンセラーにも相談してみたが、具体的な解決策は得られず、状況は少しも好転しなかつたのである。三八豪雪の頃、長岡で誕生した長男は、幼時期には、ひよつとして天才児か?の挙動を示す奇妙な子供であった。始め盛んに「アバ、アバ」を繰り返したが、父親を「フープ」母親を「マコウ」と呼ぶのもそうだったが、先ず言語系にその兆候が現われた。最初、剛志は逆に言語中枢が未発達で、日本語を覚えるのが遅いと、母親の真琴をとて心配させた。日本語はそうでも、外国語、英語でもドイツ語でも、TVから流れる言語に敏感に反応する性癖があつた。

しかし、幼い時から、毎年雪の時期になると冬眠を繰り返す熊のようで、小学校に入学すると、冬季は特に幻覚に怯え、断続的に欠席することが多かった。長じて中学生になると欠席日数は、年間通算三十〜五十日にもなった。思えばそれが不登校の始まりであった。

勉強嫌いであつたにも関わらず、長男剛志の学校の成績はそこそこで、名門の地元高校にも入

学できた。妻の真琴は、元々父親に似て剛志は頭の良い良い子と思つて安心し切っていた。

自室で愛鳥の「おおお」に餌をやる所も、父親に似て、生来優しい心根の少年だったはずだ。母親の愛情を注いでやれば、必ず立ち直つてくれる。時々高校をサボるのは、自室で好きなゲームやパソコンに熱中し過ぎるための、一種の自己逃避の甘えと楽観視していた節があった。

真琴自身始めの内は、危険な兆候は既に、中学入學と同時に始まっていたのに、自分の長男を引き籠もりだと意識したこともなかった。母親との何気ない会話で、突然キレて喚き始める。「むかつく、ぶつとばす、ぶつこころす」

口から吐いて連発する言葉である。

その口汚い罵りの台詞は、少年が反抗期に見せるひとつの証拠であると錯覚していた。

家庭内暴力で暴れ、後に心神硬直をひき起して昏倒する息子に真琴はてこずつて、高校生の時、長男剛志の引き籠もり治療で、新潟市のある精神科の医師の門を叩いたことがあった。

当時、医療機関の病院やクリニック(診療所)で、家族のサポートを兼ねて、引き籠もり児童の相談に乗ってくれる精神科の医師は非常に稀だった。問題は、本人と身近な母親の両方に精神治療が必要であったからだ。こうした医師や医療機関が、審査支払機関に診療報酬を請求する際、本人の「鬱病」「神経症」のカルテ作成はともかく、家族の母親のカルテ欄に「子供の悩み」では保険は通らなかつたからである。

この精神科の医師は、治療に催眠療法(ヒプノセラピー)を執っていた。

少なからぬ数の人間に、前世の記憶らしき

ものを発現させる人々が現世に居ると言う。

真琴も実際に、長男剛志の催眠治療現場に立ち会つて、その兆候を感じざるを得なかつたのである。剛志はベッドに横たわり、殆ど催眠状態であつた。最初の医師の言葉は「あなたは、家から出られない状態の原因が過去のどこにあるのか思い出します」であつた。

催眠によつて誘発される強制状態の中で、中学生時代や小学生時代の様々な思い出が息子の脳裏の片隅から曳き出されていた。母親の真琴としても、忘れていても思い出さない父親の記憶や、鳥のインコとの係わりの話が、息子の口からぶつとぶつと憑いてきた。

当然、真琴の認識していた幼児語「アバ・アバ」「マコウ」や「フープ」という言葉

に混じつて、別の言葉を剛志は何度も口走つた。真琴が今迄全く覚えの無い、「イナリ」「ヤフェダ」「ナラ」「アッコ」「キネレテ」等の西アジア、中東アジア由来の言語と思われる奇妙奇天烈なる言葉、まるで意味不明な言語も飛び出してきたのである。

それは、息子の催眠状態が更に深くなつたとき、つまり心理学用語で変性意識状態(トランス状態)に陥つた時のことであつた。

医師の言葉が「あなたは、これから生れるずっと前の状態、原始の時代の状態にまで戻ります」の後だつた。息子の生れる前の時代に遡り、医師の催眠強制により偶然に誘発された、奇妙な幻覚が息子剛志の身に起つた。つまり、催眠によつて、剛志の前世の人格が、療法室のベッドに誘発されたように見えたのである。

たどたどしい日本語の「ヒア ファ ミヨ ツィヨ マナネヤ カケナ タウヨ」数え方

や掛声の「エンヤラヤ」であつた。その内「カベ」「ヤケド」「ニオイ」「ハルク」「マガル」と変化して「マフラ」「ミコダシユ」は序の口、突然「ヤハウエー」と連呼して大きく叫んだのは、真琴は椅子から転げんばかりにして驚愕した。まるで剛志の口から憑いて出た言葉は、狐憑きの巫女や恐山の霊能者の口から語られるような言葉であつたからである。

後日、診断結果を聞きに訪れた精神科の医師の説明は、次のようなものであつた。

「先日は驚かれたと思いますが、催眠によつて誘発されたり、引き出された記憶は、本当に本人の前世の人格というわけではありません。本人の願望や夢、幼時期に特に聞きして僅かな記憶の断片にすぎません。ですからアラブ諸国を彷徨つたり、ユダヤの王様に接見したり、あるいはキリストの処刑を目撃する時代にまで剛志君の魂が遡つたとは、私達は当然の如く解釈しておりませんが、唯興味深かつたのは、息子さんの潜在下には強い西アジア、中東アジア志向が隠れているということです。・・・ご両親が何方かが外国に駐在したり、特殊な語学、例えばセム族系の言語、英語やドイツ語圏でなく、例えばヘブライ語に堪能な方があられるということはありませんか?」

「さー検討もつきませんが、・・・」
「私の乏しい知識で申しますと、・・・セム族、別にセムという人種がいたわけではありません。ご承知の如く、人類の始祖アダムとイブの子孫にノアがいるわけです。あの『ノアの箱舟』のノアです。ノアの三人の息子、セム、ハム、ヤパテは、セムが黄色人、

ハムが黒人、ヤパテが白人の始祖ですが・元々、セムとは言語学者がセム族系文化圏で話される言語を指して作った用語で、人種概念ではないらしいのですが・そういった類の本を読ませたとか、話を聞いたという覚がありますか？、失礼ですが永井家の宗派はクリスチャンですか？」

「いいえ・むしろ父方の先祖に宮司が居た位ですから、ルーツは神道に近くキリスト教とは縁が薄かったと思います。でもそういえば、小さい時に幼稚園で、アダムとイブの話やノアの箱舟の話聞いたか、あるいは私が本を与えたことがあったかもしれないので、そうした記憶が潜在下に有るのかもかもしれません」

「そうですね・引き籠もりの原因は、家庭環境にあるというカウンセラーや臨床心理学者もおります。初めて当院に来られたとき、失礼ですが、お母様のお顔が能面のようにでした。もし宜しかったら、一緒でも別々でもかまいませんので、お母様も催眠療法を受けられてはいかがでしょう？」

事実あの頃、家庭内暴力に手を焼いた真琴自身、(剛志は高校中退して浮浪者が犯罪者に成るのでは)と思い詰めていたから、心身症の治療は、母親の方に有効であったかもしれない。

その後、催眠療法による臨床心理分析が、剛志の引き籠もりの治療に役立ったかどうかは不明であった。少なくとも、真琴の精神衛生面の気休め程度には役立ったことは確かである。

ここで永井一家にとっても、長男剛志にとっては特に、兄のような存在で、忘れられない信州安曇野出身の隻腕登山家、梅沢

紀夫の事に少し触れておかねばならない。

梅沢紀夫は、始め製造現場で後に田口泰雄の親密な知友となり、いや山の趣味で類は友を呼ぶの喩えがあるが・夫永井剛一朗とも仕事を通じた接点を結ぶ一人の臨時社員に過ぎなかったのである。普段の梅沢紀夫は、隻腕を全く相手に意識させず、白い手袋を嵌めた義手を自由自在に動かした。

最初、川崎の以前の工場で上司や同僚との粗利がかわずに、創業時の長岡オリジナル工業のオンボロ工場に、労働基準監督署現八ローワークの求人案内により臨時社員として入った、俊敏で瘦身で浅黒い男が梅沢紀夫である。

梅沢紀夫は、登山の腕と知識を時折買われて、山岳雑誌「山と渓谷」誌が開催するピギナー向けの「ヤマケイ槍・穂高登山教室」の臨時引率スタッフに狩り出されるといって、臨時社員としても変った経歴の持主であった。

「登山教室」と名が付くとおり、ガイドに連れられて登る単なるツアー登山と異なっていた。「登山教室」は、全部で毎年五十コースが企画された。各コース目が配れる十人内外の定員で、スタッフからより安全に楽しく山歩きができるように助言を与えながら実行された。然も、例えばどんな初心者であっても、全員が無理なく懇切丁寧に登山できるように配慮されていた。また夜も山小屋の協力を得て、一時間程度の座学が設けられ、装備に関する知識等行動中に参加者に伝えることが出来なかつた部分の指導が行なわれた。

実はこの男梅沢紀夫が、永井剛一朗の引き籠もりの長男、剛志と出逢ったのは、この「登山教室」の場であった。妻の真琴は、夫

永井剛一朗の山好きの趣味と一緒に付き合ってくれた男というよりも、むしろ息子剛志の引き籠もりと家庭内暴力の惨状で喘いでいた時に、真琴の窮状を救ってくれた恩人として、梅沢紀夫に感謝することを忘れなかった。

息子剛志と登山家の梅沢紀夫の出会いには、全く偶然のことだった。全く人生の縁はどこで繋がるのか解らない。お互い予測も出来なかつた運命の女神の微笑む悪戯が、突然お互いの人生を変えることがあるからである。

それは、ヤマケイ主催の「登山教室」、KHJ全国引き籠もり親の会の共催であった。その日は、空模様余り安定しない、その年の夏のなかで一番恵まれた天気となり、北アルプスの大展望を一行で楽しむことができた日である。本当に気持ちの良い朝から始まっていた。

全国引き籠もりKHJ親の会のKHJとは、長期の引き籠もりに伴い発症する可能性のある、強迫性神経障害(K)、被害妄想(H)、人格障害(J)の頭文字から由来しており、その活動の拠点が現在埼玉にある。今は全国に支部が広がってきている。それだけ、悩める家族が増えたという証拠に違いない。

真琴は、引き籠もりKHJ親の会の、山好きの女友達に勧められて、運動療法の一環で息子剛志を連れて初めて参加してみたのである。

八十年代の高度成長期「積み木崩し」という実話に基づく、人気TVドラマが放映された。内容は中学一年生の少女がリンチを受け、また家庭内のすれ違いにより非行に走るという話であったが、日本の当時の歪みの一側面をそのまま写し取ったような家庭崩壊を描く辛口のドラマであった。

九十年代は、昔日本の家庭に存在していた父親の権威の失墜が問題視され、新聞の話題となった。会社の中で出世競争に敗れた企業戦士の帰る家庭は既に崩壊、家庭内でも自信を無くした父親は、やがて物分りの良い優しい男に生まれ変わっていた。

二十一世紀は、一体どんな家庭の姿を描くのであろうか？新たに「フリーター」「ひきこもり」や「ニート」と呼ばれる社会参加しない青少年を巡る大きな問題が、精神科医や心理療法師の口から語られるようになって久しい。

親の生き方が、若者に通用しない前代未聞の社会現象と指摘するのは易しい。親達は、特に父親は自信を無くしつつも、経済成長の担い手・原動力であり続けた。そうした父親の「見失った何か」が逆に要因となつて、不登校・引き籠もり、未就業、フリーター、パラサイトシングル、摂食障害、薬物乱用といった社会病理現象が、青少年の間に蔓延し始めている。

原因は、物質的な豊かさ故の病理と喝破する心理学者もいる。しかし、出口が見えぬまま現実問題として、家庭に抱え込んだ親達にとつては問題はより深刻である。行き詰り、混迷を深める時代の狭間に、困惑・混乱、自信喪失状態に喘ぎながら、何とか活路を見出したいとモがき苦しむ家族が少なくない。

でも果して、「ひきこもり」や「ニート」は、そんなに日本の未来に悲観するべき現象であるのか？殊更にマスコミやジャーリズムが「ひきこもり」は大変だ大変だと、騒ぎ立てることに疑問を呈する人も少なくない。彼等は彼等で、新しい生き方を模索した結果なのではあるまいか？不登校であつても、職に

付かなくとも、今の世に抵抗し、何時の時代にもあつた、反逆する多様で多感な青春の生き方の一つという意見の人達もいる。

厚生労働省は、平成十五年(二〇〇三年)七月保健所や精神保健福祉センター等の地域の相談機関向けに「ひきこもり対応ガイドライン最終版」を発表している。全部で百四十頁にもなる膨大な資料である。

このガイドラインも、些か遅きに失した感は否めない。然も相談機関の全てに配布されたわけではない。保健士が同書を見るには、厚生省のホームページからダウンロードし、プリントアウトして資料を揃えるしかない。

フープー鳥の賛美歌(五)

真琴は、その朝衝撃的なTV報道をみた。

TV画面は、東京地検特捜部の捜索で、川崎オリジン社の北山富士夫代表取締役以下、常務取締役石塚幹夫、相談役の長崎幸三の役員三人が贈収賄容疑で逮捕され、本社及び自宅が一斉家宅捜索を受けているという報ずるものであつた。思わず亡夫永井剛一郎の部下田口泰雄の動静が大変気になつて、詳しく載っている新聞記事を探して読んだが、田口泰雄の名は何処にも見出せなかつた。念のため自宅へ電話をして、妻に確認せずには居られなかつた。しかし電話には誰も出なかつた。仲人をした関係で妻同伴で、東京の阿佐ヶ谷の自宅に何度も田口泰雄が挨拶にきたことがあつたからである。

三日後、記者会見の席上、新しい執行役員顔の中に、抜本的な業務刷新を図りたいと深々と陳謝して頭を垂れる、新役員の顔がTVで放映された。逮捕は会社の幹部級三人の役員のみで、

田口泰雄は容疑に連座していなかつた。真琴は内心穏やかで無かつたが心の旅を続けた。

(頁51中段04行目より続く)

メシャブは四日目の夜語つた。

「もし、パド・シエバがソロモンを次の王にしたら、彼はエルサレムをティレヤニアに負けないようにするだろう。フープーのような勤勉な建設技術者は喜んで迎えられるでしょう」

「貴方はどうなるの？」

ケリスは、話をメシャブの郷里モアブに向けて催促するように聞いた。そこはマコールと同様な暮らしなのかと。彼は死海の東に横たわる美しい高地の谷間を説明した。彼は故郷の娘ルースがモアブ人を離れて、ヘブライ人の妻となつた面白い話をケリスに聞かせた。

* 脚注

パド・シエバダビデ王の妃でソロモンの母

「我々は何時もヘブライ人と戦つたし、今後も何時でも戦う。こうしてルースはダビデの偉大な祖母となつた」

「知らなかつたわ。」

「だからダビデ王のルーツはモアブ人なのだ。と同時に我々の最も残酷な敵だ」

「ダビデ王が？。残酷？」

奴隷が王をけなすのに怒りが込み上げた。

「聞いた事がないのか？初めてモアブ人を征服した時、戦場で全ての捕虜を彼の前に跪かせて、我々全てに番号を付けた。一、二、三、と」

「それからどうなったの？」

「それから、ダビデは我々の中に兵を差向け、一と二の番号の捕虜を殺した」

「すると貴方は三番だったの？」

「いいや、私は一番だった、兵が私を殺そうとした時、ダビデ王がそれを止めて言った『それはメシヤブ、モアブ人のリーダーだ!』と・・・彼は私だと分かると『そ奴を殺すな!彼は勇敢だ。私の將軍にする』そして私に聞いた『お前はヤハウエを受け入れるか、そして自由になるか?』『私はバールの神共に生きて且死ぬ』彼の顔は怒りで黒くなり、私は彼が私を殺すと覚悟したが、彼は齒軋りして叫んだ『関係ない!よーし勇敢さに免じて、そ奴を自由にしろ』そこで私は自由の身になり、敗残の兵を集めてヘブライの將軍の天幕を襲って、アムラムの兄弟を殺した」

「あの日、將軍は自分の手で貴方を殺したいといったわ。どうして彼はしなかつたのかしら?」
「ダビデ王が一度私を助命したからだ。死の代りにアムラムは私を奴隷の身分に落した」
ケリスは溜息を付いて。別の話題にかえた。
「ダビダが北方の新水道システムの視察に此方にくるかもしれないと、総督が言ったけれど・・・王がフープを南に連れて行くチャンスがくるかしら?教えて」

「多分そつなる」
モアブ人はこのせつちちな女を鎮める為に、考えた後に言った言葉がこれだった。
「首枷を付けてみるエルサレムは懂れるものではない」

「そんな冗談はやめて!」
「貴女は既に重荷を背負っている・・・私があの日首に付けていた枷よりもはるかに重いものを」
五日と六日も彼等は再び会った。中の巡回が廻って来る時間まで話込んだ。この大きなモアブ人は、再度危険を犯す渴きを取り除いてやるうと思つた。最後の晩に彼は言った。

「ケリス貴女の夫がエサレムに行つたが、此処に止まるつが、彼は偉大な男だと言つたことを分かつていないのではないのか?」

「誰もフープを偉大な男と考えていないわ」
「私は偉大な男だと思つ。トンネルが上手く繋がりそうもない時、彼は責任を全て自分で被つた。彼が主人で私が奴隷だとしても・・・」

「夫は正直だわ。その名が例えフープと言われていようが・・・優しいわ。皆が彼を好きだわ。私もそう・・・しかしこの三年間私は王が彼をエルサレムに呼ぶような人物でないに分かつたの・・・だから私は恐れているの。」
ケリスは、決して嘲りの笑いでなく、笑みを浮べ自分を納得させながら付け加えた。

「貴女の神、ヤハウエはここから遠くないとこれですという警句を思い出しませんか?つまり彼の顔を見るな、彼の高みを見るな、ヤハウエは人が見るようには見ない。何故なら人は外見を見る。しかしヤハウエは心を見る」と
ケリスは一応メシヤブの反論を受け入れたが、決して納得したわけではない。この奴隷がヤハウエに触れたので、彼女の関心が逸らされたに過ぎない。彼女は逆にメシヤブに尋ねた。
「メシヤブ、どうして今ヤハウエを受け入れて自由の身にならないの?」

「私はモアブ人のバールの神を裏切らない」
この男の信仰の繰り返しは、ケリスの心に奴隷收容所の悲惨さを思い起させ、彼女に深い影響を及ぼした。彼女はかすれた声で聞いた。
「貴方は、あの收容所に耐えられるの?・・・何年になるの?」
「七年」

ケリスは自分の神を否定せず、あの様な屈辱と汚辱に耐え忍んだ男を認め、頭を下げた。

しかし、次の夕刻、日が沈む頃は彼女の頭は、フープのことで一杯になった。彼は六日連続の酒酔いで、ようやく帰ってきた。アッコから歩いて帰ったが、だらしなく、埃にまみれ、でもここに笑つていた。歩いた理由は、フェニキアの官吏が好意を持ち、アッコを離れるに当り、購入した鉄工具を全部くれたばかりでなく、更に追加してくれたから、自分が驢馬に乗るよりも追加分の鉄工具を乗せるのが当然と考えていたからである。国境では自分の短剣を取り戻すのは忘れた。そこで警備兵と最後のビールを干し、シドン(古代フェニキアの開港都市)の歌を唄つた。そこで彼はアッコの総督から美しいキプロスの剣を買つた。槍の穂先二本もだ。

彼は寛いで幸せだった。驢馬を門の中に押し込み、乗せた荷物を総督の広場に下ろして、挨拶をし、妻の待つ家にと辿り着いた。身体を洗い、頭を整えると彼はメシヤブを訪ね、二人して豎穴に降り、フープは切羽の先端で反対側の夜間作業員の音を驚くほどはつきり聞いた。髭面に満面の笑みを浮かべて、モアブ人を振返つた。

「正確に掘り進んでいる!」
二人は井戸にも降り、トンネルに入ったが、フープは一見して留守中にメシヤブが大きく修正したことが分かつた。彼は先端まで這つていき、他方のトンネルのハンマーの音を聞き、自分が随分とコースを外していたことを了解し、メシヤブの手直しが自分の決定的なミスを防止してくれたのが分かつた。モアブ人を抱擁し、「トンネルを広げる時、でこぼこを均して分らないようにできるな」
と言つて感謝した。

「君の鑿が最後の岩を突き破つたときこそ、君は自由の民となる」
彼は井戸から急いで這い登り、家に帰るとケ

リスに言った。

「二年前に粘土版に書き込んだ事を、堅い岩を貫いて実現した・エルサレム君のものだ・君のお蔭でトンネルが掘れた!」

妻に幾度もキスをして囁き、寝室に連れて行くこととして大事な用件を思い出した。隣家のメシャブの注意を引くために、壁を叩いた。

「新しい工具を直ぐにでも皆に渡さなければ、そのためにアッコに行つたのだから・」

フープーが寝る前には、奴隷達が尖つた新工具で、最後に隔てている岩を掘るのを確認した。

エタニンの月末、三年目の暑い夏の終り、雨が降り始め地面の耕しと種蒔きができる時、数日以内に二つのシームが合体することが確実にになったが、互いに接近しつつあるトンネルの位置が未だはつきりしなかった。多分一方が他方より少し高いか又は少し横にずれているからであろう。少なくとも二つの開口は合致することに疑いは無かった。それからでも修正は容易にできる。興奮がつのり、総督さえも古いさんだるを履き小さなトンネルに潜つてこの仕事に驚異をいだいた。夫々ほぼ百四十フィートの堅い岩を大変原始的な道具に頼り掘り進んでいる。そして二フィートの誤差範囲で貫通させようとしている。

最終的な日、フープーは興奮を隠そうと努め、そして貫通の時に対面する人となるのを断つた。彼は良い仕事をした普通の奴隷を選び、大槌を持たせて這い込ませた。彼は井戸の穴に残り甘い水を見詰めた。この水は今後も二千年に渡り静かに湧き出し、女達が水瓶を持ってやってくる。

フープーの仕事は未来のマコールの生存を可能にした。彼は地中深く土に仕えたから、土を支配する神に祈った。

「優しいバールの神よ、貴方は私の友人メシャ

ブと対面させて下さいました。他人の目から姿を隠し、貴方は我々を一緒にしてくれました。勝利は貴方のものです。」

「フープー!」

トンネルの中の人々が叫び始めた。

喚声が洞窟をこだまし、水の面に振動した。声が乱れ、人がトンネルから飛び出した。彼等の眼は一樣に涙で溢れた。

「あなたも入らなければ!」

奴隷達が怒鳴つた。自分等のマスター、メシャブをトンネルに押し込んだ。膝で這いながら、仕事の成否を決めた難関の切羽を抜け、メシャブがフープーのために修正した膨らみを通り、待望の場所に行つた。そこにはランプが岩を通して輝いていた。反対側の人達はフープーを待ち受けていた。一人の奴隷が言つのを聞いた。

「彼が手を通したら、叫べ!」

フープーが小さな貫通口に到達するとモアブ人メシャブが見えた。

「貴方は私の兄弟だ!この瞬間、貴方は自由だ!」

「私は貴方とこのトンネルを完成する!」

このモアブ人は約束した。彼等が地の暗黒の中で会つたこの瞬間に、痩せて憔悴しきつた黒髭の男がこの町に入ろうと坂を辛そつに登つていた。この男の名は、ゴーシャムだ。助命を求めていると言つた。彼はリラ(古代ギリシャの竖琴)を携えていた。

* * *

廃丘

ベレ・バーエル博士はシカゴに短時日いて、死の燭台についての講義をした。その時は、砂漠から焼け付くような風が吹き付ける「カムシン」の

枯れ果てる頃で、殆ど発掘の仕事は不可能であった。この時期は、アラビア語の五十の数字から由来した語、「カムシン」の季節と呼ばれている。この季節は昔から元気を奪つ。カムシンの間、モロッコの人のみが掘り続けた。彼等は溝の底を喜んで、蔭になつてゐるし、指で屑を摘める。

この酷い天候にキュネリンは、本部の建物の後の裏口に座り、愉快な小さいフープー鳥が歩き回り砂の穴をつつくのを見ていた。彼はベレの快活な声を思い出した。彼女は過つて言つたことがある。

「フープー鳥は、考古学者の世界的なシンボルに相応しい。我々も熱心に歩き回り土の中に鼻を突つ込む!」

ベレの事は左程思つて居た訳ではなかったが、早く帰つてきて欲しかった。机で、時々スカートを穿いたアスタルタの像を吹いた。そして彼はこの粘土の像と、生身の彼女をシカゴに連れ帰ろうとしていると思つた。実際、彼は彼女が将来自分の住家になるかもしれないシカゴを訪れるチャンスを楽しんだのである。

カムシンが長引き採掘を難しくしている間、彼は続きの報告を終えた。しかし、ここでベレの愛らしい姿が目の前にちらちらした。彼が陶器について書いた時も、彼女が破片を籠一杯に入れた荒い槽を行き来するのが目に浮んだ。彼はしばしば考古学者の報告の前文で表記される文章を懐かしく思い出した。A私は特にパメラ・モクリツジ女史(今のピータ・ハンブレイ夫人)に感謝する。そして報告者を暫く読んでいくと、このピータ・ハンブレイ夫人は、調査隊の美術家であつたことがわかる。見苦しくないこの娘は、二年間の聖地での発掘作業の間に結婚してしまつたのだから、キュリネンは彼の報告書の序文に、こう書けたのなら味わい深いのにと思つた。A我々

一同はこの素晴らしい陶器学者ベレ・バーエル女史(今のジョン・キュリネン夫人)に感謝する。彼は(この発掘で何が起こったかを推測させよう)とくすりと笑った。

彼が原稿をエリアブとタバリに渡した時、トラブルに巻き込まれた。というのも、彼の分担の12層のマコールの遺跡で、何処にもある同時代に発生した事件に強く影響されし過ぎていると懸念したのである。エリアブは忠告した。

「君の推測は余りに飛躍し過ぎている」

「彼の言いたいのは、無口な方がスマートだということだ」タバリが遮って続ける。

「メギドやガゼルで起ったことは忘れる事だ」エリアブが忠告する。

「自分の目を信じなければ」

「我々は真空の中で仕事しているわけではない。メギドやガゼルの人達は、我々の仲間と同じ問題に直面してとは考えられないか？」キュリネンは弁護したが、タバリはその問題から逃げた。

「私達と一緒に一寸した旅行に行こう、ジョン」三人がジープに乗込むとこのアラブ人は言った。「今は二千CE(Common Era)の年だ。我々は四つの遺跡を発掘しに来た。皆、一九六四年の大変動で破壊した。」

「さあ、目を使おう。そして、どんな種類の報告を書くか決めよう」エリアブが言った。

彼等はアッコの輝かしい郊外まで行った。タバリは友人の家にジープを着けて、キュネリンやエリアブに近代的な家を見せ、その調度品を列挙した。

「電気の時時代だ、電気冷蔵庫、電気ストーブ、空調、電線が全ての部屋に張り巡らされている。

外国製品が容易に手に入る。英国からの肘掛け、ドイツからのラジオ、椅子は何処からが良いかい、オットー？」

「イタリイ」エリアブが分析を始める。

「もし、こうした本の断片を見付ければ、この家族はドイツ、フランス、英国、へブライそれに何か不明の商品で高い文化に達していたことを延べることができよう」

「ハンガリー人だ」オットーが説明した。

「他の家を調べる。医学的に熟練した眼鏡で、このワイン瓶はフランスに関係あるとされる。そこで、これが65層の標準としよう」

「しかも、これはとても高い標準だ」キュリネンが愛想よく持ち主に言った。

「私達はハンガリーを出てから働いてきた」彼等は遠くない村に行った。そこでタバリは一軒の家にいらせてくれるよう頼みこんだ。最近移民したての未だへブライ語も話せないオリアント系の移民が承諾した。

「この調度品をみてくれ。電気はない、実際一九二〇年以降を示すものは何もない。文化的達成を示すものもない。料理の遣り方、生活様式がまるで違う。」

彼は持ち主に数本の煙草を差し出して礼をした。「我等二千CE(Common Era)考古学者の本当の衝撃は、次の家を発掘したときだろう」

彼はマコールの西のアラブの村に行った。そこで未舗装の路に立っていた男に呼び掛け、男の家を訪ねたいと頼んだ。この鶏の群れの中に立っていた村人は承諾した。

「完全に異なった造りだ。電気も無ければ暖炉も無い。素焼きの鍋は二千年前に使用されてい

たような代物だ。本も無ければ、アラブ風の絵も無い。衣装は何世紀も古い。注目して欲しいのは麦を砕く臼だ。これは木製だ、しかしだ。麦を砕くために突き出ている小さな物は何だろつか？」

キュリネンは手を突き、跪いて古代の粉碎機の上の部分から突き出ている小さな物を調べた。

「これは私の思っている物かい？」

「それは金属ではない。」タバリが言った。

「これは火打ち石だ。この時代に何処からこの石を手にいれているのだらう？」

「マコールの人達が一万年前に手に入れた場所からだ」タバリが答えた。そしてアラビア語で、「この臼の所有者に尋ねた。」

「その通りだ。ワジの底の小塊からだ」

三人の科学者がジープに戻り、タバリが言った。「さて、あのアラブの小屋を発掘して、どの年代を付けるかは置き、次の四番目に行こう」

彼は坂道の上まで運転し、その側面を歩いて洞窟の入口に着いた。そこで案内を請うと、暗闇の中から不機嫌な声がした。洞窟内で声の主、羊達と住む老人に彼等は会った。エリアブが囁いた。

「この洞窟は少なくとも三千年はこうした状況だった。二十世紀と分かる唯一の品は、老人のシャツに付いているプラスチックのボタンだ」

「違つよ。ここにオランダのビール瓶がある」キュリネンは、羊の横たわっている場所を調べて言った。

「これを掘り出したとして、ごらん下さい。貴方はこれを不適切な挿入物として決め付けるでしょう」

タバリは老人に三ポンドやり言った。

「これでビールでも買ってくれ」

ブが言った。

「ジョン、現代のイスラエルの数マイル以内に、我々は一九六四年の家、一九二〇年の、一三〇〇年の、それに何時の時代に遡れるか分からない洞窟を発見する。何れもこの近くにあつて、これら四つとも我々の文明を形成してきた。ダビデ王の時代のマコールも同じように、変化に富んでいたと考えられないだろうか?」

「君の推測が正しいのかよくわからない」
キユリネンは注意深く言葉を継いだ。

「今日では、過去から伝えられたであろう多くの地層が見付かっている。結局、ダビデ王はせいぜい四つか五つの地層の家しか見ることができなかつたのではないだろうか?」

「そつだとしよう。しかし、君が書いている均一性は多分存在しない」

「問題はそつだ・アッコでは、新しい家が……」
キユリネンは認めた。路に立つたまま、彼はこの旅をまとめようとした。タバリが遮つた。

「最初の日に、君はアッコを西において方向を確認したね。何時もそつしているのかい?」
このアイルランド人は、考えた後に答えた。

「イスラエルでは、そつだ」
「どつして?」

「どつしてか分からない」
キユリネンは暫くして躊躇いがちに答えてから、ガラリアの方向を指差した。

「子供の時、私はイエスについて多くの事を聞いた。しかし、聖地を生々しく感じたのは十字軍のことを聞いてからだ。何週間も、私はリチャード獅子王が、エーカーに行った船に乗っていると思つた」

「面白い!君は聖地を救うために自分が上陸したと想像したんだ、だから君は何時も西か

ら東に行動するのだ」タバリが言った。

「私にとつてのイスラエルはそつなつてゐる」

「大変奇妙だ・私にはイスラエルは北から南に横たわつてゐるように見える。私はアブラハムで、北から彷徨つてきて始めてこの素晴らしい土地を見た。又はソロモン王時代のイスラエル人の場合、ここに住まいを定めて南のエルサレムを見ていることになる」

エリアブは興奮を抑えながら、控え目に付け足した。

「私は最初にイスラエルを北から見た。アブラハムがそつであつたように、その素晴らしい丘が私を南に誘つた。今迄、君が別の角度からイスラエルをみているとは思つてゐなかつた」

「一九四八年の戦争の時、私はヨルダンから来たアラブ人会つた。彼は、彼の隊がパレスチナを侵略した時にどんなに感激したかを語ってくれた。砂漠から出てきてこの驚くような豊かさ、緑・を見ただの。彼等の隊は唯西に進んだ、そしてその土地は彼等の物になつた」
タバリがそつ言つとキユネリンが尋ねた。

「君はこのことをどう考える?」
「私が?」

タバリは驚いた。彼はこのことを今迄考えたことが無かつた。注意深く彼は続けた。

「私にとつて、イスラエルは何時もここにある。ここにたつてゐる私と共に。西にない、東もない。丁度、私の先祖が思い起こせる昔からだ。私は今日訪れた四つの中の場所であつても、今と同じように十分幸せだろつ」

「洞窟でもかい?」
キユネリンが聞いた。

「羊はいらないね」

そして、三人の科学者はこのように、夫々発

掘している土地について違つた考えを抱いたままでマコールに戻つた。

* 脚注

エーカー・リチャード獅子王が第三回十字軍遠征、紀元一一九一年に占領したイスラエルの港

* *

ゴージャムは丘の歌人であつた。

義理の兄弟の羊を高地の谷で飼ひ、そこで人を殺して彼の家族と妻を残して逃げた。彼は、田舎者のような羊皮の粗末な服を着ていた。彼は商売のためでもなく、着替えもなく、道具もなく、無一文でマコールに着いた。彼は七弦の豎琴のリラを携えていた。それは古めかしい青銅で縁取られた樅の木できており、羊の腸を擦つた糸が張られていた。その糸は壊れていない胴部の上で弛んでいた。彼は殺した兄弟からの避難所を探してここにやつてきた。彼はアッコで身を隠したいと望んでいた。しかし、疲れ果て、追跡者が迫りつつあつた。追手は驢馬で、彼は徒歩で逃げねばならなかつた。

彼は門番に跪き、喘ぎながら言つた。
「避難所は?」

門番達は寺院のある場所を指し、総督に報告のために走つた。総督は丁度羊飼ひが大通りを駆け抜けるのを見るために現われた。彼が右に消えると、三人の驢馬に乗つた埃にまみれた男達がやつて来て入場を求めた。

「もつ一人の男を捜しているなら……男は寺院に入った」

男達は急ぐ気配も失せてうんざりだつた。

固くなって驢馬を降り、蔭に驢馬を追いやると総督に付いて行つた。この寺院の建物は意図的に

小さく建てられたおり、エルサレムの僧侶と悪戯に優位を競わないようにしていた。それは赤い自然のままの石から造られており、素朴で柱も無く、どっしりとした階段も無かった。二つの戸は、オリブの木で出来ており、少し離して二つの釘が打ち込んであり、総督が開くと石の蝶番いが軋んだ。内部は暗闇である。窓も無ければ常夜灯もない。僅かに油ランプが積上げた床を順に照らして、それが一段高い処まで続いている。

そこには玄武岩の祭壇が立っていた。巧みに雄牛の彫刻が施され、雄牛の角が付いている。これは伝統的に、祭壇に捧げられた生贄を表しているのだ。しかし、マコールでは長い間、生贄の動物は捧げられていない。その役割はエルサレムに移管されている。この祭壇の特徴は、隅にある四つの角である。幾世紀にも渡り、この角は変形し名のみ残った。今のマコールでは、それが牛の角を表示したものであるとは殆ど知られていない。岩が丸くなった角になってしまったからである。

しかし、常に特別な意義を有していた。そして、追われている殺人者、ゴシヤムは、羊の服は乱れ、豎琴のリラは側に捨てられたまま、一番上の段に跪くと、この角に二つにしがみ付いていた。

「彼は聖域にいる」

総督は祭壇を指して言った。

「待とう」

「この兄弟達は言った。」

「我々は彼を養う義務がある。祭壇の側に居る限りは……」

「待とう」

「この兄弟達は繰り返し返した。」

「……では駄目だ」

「外にでよう」

総督は警告し命令した。

「五十キュービット以内は駄目だ。ダビデ王が法を定めた。私ではない」

三人の兄弟達は分かたつたと言い、兄弟を殺した男には何も言わずに寺院を離れた。総督はこの逃亡者にどんな罪を犯したのかと尋ねた。

豎琴のリラを持つ男は注意して答えた。

「黒声、怒号……それでつまらないことに。」

「それで人を殺したのか？」

跪いていた男は、祭壇から片方の手を離し、首の傷を指した。まだ治癒していない長い青黒いみみず腫れである。

「このために、人を殺した」

男は繰り返し返した。

「どうする積りだ？」

総督は追手の三人の見張りを示して尋ねた。

彼等は要求通り五十キュービット立退き、町に人に水を求めていた。

「彼等はいまかっとなっている……今私が捕まったら殺される。三日も経てば、馬鹿馬鹿しくなって家に帰る」

「どうして、そんなことが言える？」

「彼等は兄弟が私に切りかかってのを目撃している。私が避難所を見付けたのでむしろ、ほっとしていると思う。彼等に口実を与えよう。」

総督はこの疲労困憊している、この男の現実的な見方に驚いていたが、疑いを残しながらも寺院の四人に護衛を付けた。彼等の任務として逃亡者が、角の一本でも握っていたら生命を守れと命じた。これは砂漠のヘブライ人が定住地に移動した時に適用した習慣で、その時代には血の宿怨が部族を席巻し、幾世紀も続き、牧人や夫として必要

な多くの人々が命を失う結果をもたらしていた。モーゼ自身、逃げ込む町を造り、そこに誤って人を殺した者が逃げ込めば、その町の門を潜るだけで命が助かり、それ以上この件について、何も手出しが出来ない事を考えていたのである。それ以後、色んな町に避難所ができ、ゴシヤムが今やっているように、祭壇の角を握った者の命は助かったのである。

「彼に食事をやれ」

総督が護衛に命じて、この逃亡者の話をしようとした時、町の北の城壁から喚声が起こり、興奮した人達が総督に庭めがけて走り始めた。

「何事だ？」

総督が叫んだ。使いの者が走りながら帰ってきて叫んだ。

「トンネルが貫通した！」

総督は急いで主竪穴に行った。その底で奴隷達が叫んでいた。興奮した手が彼を招き、急な階段を降り自分の眼で貫通点を見るよう促した。しかし、彼はその報告だけで満足した。暫くして、モアブ人のメシヤブが大喜びで登ってきた。総督は対等な立場でメシヤブに挨拶した。

「フープが、これが貫通した時に、お前を自由民にすると私に言っていた」

「私は……」

「モアブに帰るか？」

「トンネルの完成を手伝うとフープに約束しました」

「それは彼が喜ぶ。どうして上手く二つの端を合わせたのだい？」

メシヤブは人差し指を使い、肘を広げて離し、ゆっくりと指先を互いに合わせた。言葉を使わなくとも、その仕草は劇的だった。総督は盲目の試みを感じる事ができた。

「この辺りでは、互いに他方からの音が聞えるようになつた。そして僅かであったが、フープ側のトンネルが外れていた。しかし登る角度は

正確だった。私の方は少し高かった。」

メシャブは指先を合わせた。しかし、ぴったりではない。彼の方のトンネルを少し上に、フープー側のトンネルを北に曲げて・・二つのトンネルの僅か四分の一の面が合った。この誤差の少なさは奇跡が起ったことを感じさせた。

「幸運だったな」

総督はこのドラマを味いながら言った。

「フープーが幸運を招いた」

総督は、この言葉はお世辞ではないと分かった。

「次はどうなる？」

この計画が失敗するように見えた時は、町が借りている奴隷達に何の興味もなかったが、成功が目前となった今、これがエルサレムの関心を自分に集められると分かったので尋ねたのだ。(これから以後は我々のトンネルであるべきだ)

「残りの仕事は易しい」

モオブ人がそう言うて説明する前に、フープーが後門から汚れたまま、が楽しそうにやってきた。メシャブは総督を置いたまま、フープーに駆け寄り、兄弟のように抱き合った。その後、総督はフープーの家に呼ばれた。

「ケリスおいで、勝利者に挨拶だ！」

ケリスは、夫のアッコ土産、ギリシヤの船が運んだきらきらする青い服を着て現われた。ペリダントは、織ったガラスの網であった。彼女は二人の男達の喜びが分かり、夫に暖かくキスをした。夫は彼女を促した。

「兄弟メシャブにもキスを・・彼は今日から自由民だ」

丁寧に彼女は元奴隷にもキスをした。メシャブは顔の震えを抑えるために、自らの唇を噛まねばならなかった。いや多分、涙を抑えたのかも。彼はこの二人の良き友人の手を握りしめた。

「貴方達は本当に私の家族だ」

フープーに総督が言つて、メシャブも誘った。

「明日から彼に給与を払おう・・割礼を受けて我々の仲間にならないかね？」

総督は言いながら右手で寺院の方向を示した。更に取巻いて見詰めている人達を指した。その動きは微妙な招待を意味していた。彼の手の中に、マコールのヘブライ人口を左右する力があつたからで・・女と結婚するために割礼を受けたキプロスの男達、長年の奴隷から確固とした地位を確保したヒツタイト達、バビロニアの避難民達、帝国崩壊の時に当地の家族と共に居残った賢明なエジプト人、肌の黒いアフリカ人、赤毛の*エドム人、これらは皆正規のヘブライ人で、モアブ人が加わつて悪い訳がない。

この言葉に感激して、メシャブは総督に手を取りキスをした。

「私はヤハウエの偉大さが分かった。しかし、私はバールの神の僕だ」

「双方に仕えてもよい」

総督は外国の貴族の妻達が、今迄の神の信仰を許されているのみならず、奨励されている例を彼に示した。

*脚注

エドム：死海とアカバ湾の間、古代パレスティナに接する地域

「エルサレムには、エジプトやベリシテの神々の原始的な寺院がある。お前も同じようにここでやればよい・・バールの神はお前のためにあそこに居る。」

「私はモアブ人のバール神に帰依している」
メシャブは頭を下げて地面を見て、固執した。そこで、総督はこれ以上彼の信仰を争わなかつた。

ケリスが尊敬の眼で見守る中を、自由民の祝いを述べて総督は去つた。途中で立止り、殺人者が逃げないように寺院を警戒している三人の厳しい顔を再度見た。あの男が避難所にした寺院に、守衛を配備しておく必要はないのではと考えたからである。というのもも聖なる掟は百年もの間破られていないのだ。この兄弟達が先例を破つてまで走ることは無いはずだ。血の仇の要求する数日間の待機の後、殺人者の予告通り、彼等は驢馬に乗つて帰つていったので総督は満足した。

その後、逃亡者が寺院に居る事が皆の関心を呼んだ。この町に殺人者が避難所を求めて来訪したのは、一世代振りだったから、子供たちは母親に願つて食べ物彼の許に運んだ。無論寺院を取り仕切る*レビ達は彼に水を与え、土の壺で用便の世話をした。町の人達は彼を食べさせる責任があつたので子供達が贈物を持って出入りしたのである。この囚人が食べ終わると、子供達は豎琴のリラを調律するのを聞き、壁にもたれて山岳地帯の古い歌を彼が唄うのを聞いた。それは、彼が谷まで羊を追いつつ作曲した新しい歌であった。

私はヤハウエに新しい歌を唄う 山の唄だ、
何処から私の罪のあがないは来る
何処から私の救いは来る、又私の食べ物

子供達は、彼の細い身体から大きな声が出るのに驚いた。両親同伴で聞きに来た。年寄り達は子供達の気付かないことに注目した。どんなに歌が高揚しても、彼は必ず祭壇の角を握つたままの姿勢をとり、待ち受けている者が突然不注意に乗じて飛び込んでこないようにしていたのである。この注意を払っているのは実に賢明だった。時々兄弟が剣を抜き、突然ドアを開けゴーシヤムの居場

所を確かめにきたからである。

三日目にフープの家がこの殺人者に食事を出す番になり、夫はトンネルで多忙中なので、妻のケリスが食べ物を集めて瓶に詰めて持参した。彼女は初めてこの丘の甘い歌声を聞いた。男は日陰に座り、砂で汚れた羊の皮をまとい、もつれた髪がほっそりとした容貌を隠していた。男はリラを調律して子供達に爪弾いていた。彼女の入って来るのも気付かず ゆっくり唄っていた。彼女は食料を携え、彼を解き放つ良い知らせを持ったまま戸口に立止っていた。

ヤハウエエは我が上に永久に 彼の宮は天空

天の通り道 彼は朝の悦び

そして、登る月の慰め 彼を私は歌で崇拜し

七本の弦の叫びで

彼は私の救い 我が心の歌

*脚注

レビ: 礼拝所や寺院で僧侶を助ける下僕

彼は最後の言葉を終え、弦を指鳴らし、周りに集まった子供達に微笑んだ。その時、彼は戸口にケリスが佇んでいるのを見て、見詰め合ってから、指で弦を一本弾くと、そのまま弾き続けた。ケリスは寺院を横切り食事を持ってきた。

「彼等は帰っていききましたよ」

「あの三人が?」

「彼等は去っていききましたよ」

再度彼女は近づきながら、彼に伝えると男は陽気な歌を弾いた。

真琴は、心の旅を続けて良かったと思った。

陰湿な贈収賄事件のTV報道の中に、男達の金と権力を巡る欲望と、現世に渦巻く醜い罪を見た。官僚OBの企業天下り、欲と権力が安易に癒着する渦中に身を置かず、新事業のトンネルを掘削した夫永井剛一朗が誇らしかった。創業社長追い落としの権謀術数の罠に嵌ったが故に、免れた亡夫永井剛一朗や友の滝田政男、そして人心一新して、新役員となって会社を背負う見知らぬ男達の将来にも思いを馳せた。

真琴は、フープやメシヤブのトンネルが、三年の歳月を費やしてやっと貫通したくだりを読み流した。と同時に夫の研究の苦労も知らず、その完成を祝ってやれなかつた自分の度量の狭さが悔やまれた。心の旅に新たに登場した吟遊詩人の豎琴の歌と響きが、真琴の寂寥感を救い久方振りの慰安をもたらした。ふと何故か、毎年新年に神棚に奉納される、義父藤岡の家で見た古い三方の四隅に角があつたことを思い出し、逃亡者ゴーシャムが、罪から逃れんと掴んだ祭壇の四隅の角との不思議な類似性に、日本の神道とこの本に現われるヤハウエの神への因縁めく共通の啓示を感じた。それにつけても、途中挿入の「廃丘」の文章が、真琴を古代遺跡発掘の冥府魔道の世界に、迷い込ませ抜け出せないようにした。

隻腕の登山家

川崎オリジン社のトップ役員三人の逮捕劇は、間も無く官側逮捕者についてもTVで報道された。国のK省庁や神奈川出先の自治体にまで発展し、過去繰り返された官僚天下りと贈収賄事件の構図が、またもや暴かれた。それは、この

義侠の登山家、梅沢紀夫の一本の内部告発の話が口火となっていた。この経緯を知る者は、神奈川公安委員会の高橋信夫以外誰もいなかった。あの時、二回目の電話逆探知の指令で現場に飛んだ、職務質問のパトカーの温厚な警察官ですら、そうした事実は全く知らなかつたであろう。内部通報者の秘密は、こうして完全に守られたのである。会社関係者、元臨時工仲間は無論のこと、当の永井剛一朗、まして妻の真琴も全く知る由となかつたのである。逮捕された役員三人の周辺の人間は、社内誰かの内部告発であろうと見当がついたが、誰が垂れ込んだのか不明だった。まさか工場の臨時工上がりの男の、動機は創業者永井剛一朗社長を尊敬し、恩義を受けた上司田口泰雄への忠誠心にあつたとは、当人は気付かなかつたであろう。もし気付いたとしても、既に本人は退社後で行方知れず、手の打ちようが無かつたに違いない。

梅沢紀夫は、別な意味で永井家の家族にとつても親交厚い人物だった。この男も、北越信金の滝田政男、部下の田口泰雄と共に、真琴の数少ない忘れられない存在となっている。永井父子のインド・ハタヨーガの指導者として、何よりも息子剛志の精神的な立ち直りをもたらし、妻真琴を安堵させた人物であるからである。

不特定多数の人前に自分の顔を晒すのをあんなに嫌っていたのに、ヨーガで甦った長男剛志の変貌振りには我が子ながら別人のようであった。夫の永井剛一朗は兎も角、剛志が健康志向の昨今のブームに乗り、ロコミの紹介で、ピラックスヨーガ(Pilates)のインストラクターとして、各地のスポーツ倶楽部やエステサロン等を掛け持ちで、自信を得て一人前に

働けるようになったのは、この男梅沢紀夫の指導の賜物であった。ピランクス(Pilanes)とは、ラテン語でバランス(Balance)をとる意で、インド・ハタヨーガの流れを汲んでいる。

最近では、息子剛志の活動範囲が海外にまで広がりに、ヨーガの専門家として、西アジア、中東アジアを中心にして、無論フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアにまで招かれて観光旅行兼ねて、仲間と出掛けるようになり、珍しい土産を阿佐ヶ谷自宅にもたらしたからである。

登山家の梅沢紀夫は、人の夢と現実を区別するものは、頭でも心でもない、それは己の鍛えられた肉体であるという心情の持ち主であった。一見取っ付きの悪い孤独な風貌で、芯の強い山男然としていたが、外見とは異なる明るい性格で、駄洒落を飛ばしては、周囲を笑わせるような一面もあった。やがて永井剛一朗の引き籠もりの長男剛志は、憧れに近い尊敬の念でこの男を慕うようになるのである。

梅沢紀夫の常套句は、「目高の学校」を抜いた「目高の逆境」であった。

小さい自分を目高に喩え、置かれた逆境を嘆く自嘲的な呟きであったはずであり、決して他人を笑わすために、最初から用意された言葉ではなかったはずであった。いわば、自問自答する独り言のようなものであった。

なのにこの台詞は、仲間が仕事や山登りで大きな困難に陥って、出口の見えないどうにも救いのない場面に遭遇した時にこそ、梅沢紀夫の自虐的な「目高の逆境」の駄洒落が、文字道理「ピンチ」を跳ね返す心の糧となり、急場を何度も救ったのである。

梅沢紀夫が、生まれたのは松本から少し離

れた、信州有明山の麓、北安曇郡池田町であった。近くの穂高町(今の安曇野市)に穂高神社というこの地で有名な神社がある。でも肝心の里宮には参拝したことは一度もない。いや本当の所は登山の際、奥穂高岳山頂の奥宮に何度も参拝したことはあるのだが、・、・、ヨーガを指導した剛志の永井家と異なり、梅沢家も共に神道であったというわけではない。

育った場所は、現在の安曇野市(旧南安曇郡穂高町)である。長野県では、殆どの中学校で集団登山が実施されており、昔は中房温泉に宿泊し、燕岳に登る学校が多かった。毎年夏山最盛期を避けて計画されるので、七月中旬〜下旬に実施される。山小屋での一泊二日の登山が大部分であるからである。梅沢紀夫の出身中学では、何と安曇野に存在という地の利を活かして北アルプスで一番高く、標高日本第三位の奥穂高集団登山を毎年実施していた。

当時二泊三日の山行で、奥穂高岳に登る中学校は、大変珍しく日本広しといえども信州安曇地区の二校しかなかったのではあるまいか。中学生の体力を考慮して、一日目、上高地から横尾経由で涸沢ヒュッテで一泊、二日目にザイテングラードを登り奥穂高岳山頂を往復して涸沢小屋でもう一泊、三日目に安曇野まで下山するという行程である。

長野県の中学校では、白馬岳に挑む学校もある。アイゼンを付けて白馬大雪渓を登るといふ。他に北アルプスの唐松岳、爺ヶ岳、常念岳、西穂岳、燕岳、南アルプスの八ヶ岳、仙丈ヶ岳、中央アルプスの西駒ヶ岳、御嶽山と貴重な山登り体験をしている。他県山好きの青少年にとつて、真似出来ない羨ましい信州の環境である。

中学時代の奥穂登山の経験が、後の梅沢紀夫の登山暦で重要な位置を占めているのである。松本の工業高校を卒業後、直ぐ川崎の電気部品工場に勤めた。不幸にも、その会社には山岳同好会すら無かった。根っからの山好きで、山行ぎで仕事を休むので一年で工場を首になり、長岡くんだりに流れ込んだ。

そんな有様であったから、以後の梅沢紀夫の仕事は定まらず、汚い四畳半の下宿で寝泊りし、金になる仕事は飲み屋の皿洗いから、ビルの硝子磨きまで何でもやった。床屋に行く金にも事欠く状態になると、伸びた不精髭の面相でまるで、山谷のドヤ街住人のような風貌となった。高校時代から山岳部で、プライドは何時でも高く、自称お膝元の北アルプスの山々は、高低を問わず全て踏破し、獣道にも精通すると豪語する位の山男であった。

性格は義侠心に強い型破りの一匹狼で、特定の企業で雇う者としてなく、その日暮らしの臨時工員とアルバイトを繰り返していた。貰った給料は、山仲間との酒代で消費するというよりは、全て登山用具に消費してしまうような、破天荒な生活振りでも何時も貧乏であった。男臭さで噎せ返るような薄汚い髭男達が、何時も梅沢紀夫の汚い長岡の下宿に屯していた。

梅沢紀夫の不思議な魅力に曳かれて、何となくやってくるのである。何処の誰とも判らぬ男であっても、話してみれば山がどれだけ好きか判るからというのが、下宿の主、梅沢紀夫の台詞で持論であった。

汚いながら、壁にカラビナやハーケンが掛かり、畳に散乱するキャップランプ、寝袋や登山靴に混じって、きちんと手入れされ

た、炊事用のコップやラジューズが並べて置いてあるのが、梅沢紀夫の部屋だった。

梅沢紀夫が、長岡オリジナル工業に臨時工として入社した頃は、会社創業の頃だった。

創業社長として、永井剛一朗が社長職で一番張り切っていた初期の頃である。態々社長が面接したので相互に顔を覚えていた。社長の目に、男の精悍な目付きは印象に残った。

山男も上背の無い、社長の温和な目付きを覚えていた。しかし、数年後、下請けや臨時工の飲み会の席上、社長の任期は残り一年と、何でも独創的な発明をしたが、役員から高い評価を受けられず、独自に仲間と会社を起した創業者であると、今でも親会社との反りが悪いらしく、後任社長も既に決まっている噂を聞いた。社長の潮目が変わっていることを、仲間が聞きつけて何度も酒の肴にしたが、その噂話にも無関心で、工場勤めに欲も無く、給与が山行費用の足しに少しでもなればと思いい危険な仕事も厭わなかった頃である。

梅沢紀夫の本格的登山暦は、十六歳の時、高校山岳部新人教育の尾根歩きから始まっている。工業高校の山岳部といえども、やがては、本場北アルプスの岩場に憧れる若者達である。

その登山技術は、並の一般人とは異なる力量を部員全員が皆見せていた。工業高校への入学は、単に卒業後の就職が有利になる技術が得られるからに過ぎなかった。

茅野(白樺湖)霧ヶ峰(和田峠)美ヶ原(王ヶ頭)入山辺(筑摩(高校))五月の連休に毎年行なわれる新人教育登山であった。

霧ヶ峰・美ヶ原は、なだらかな高原状で、八ヶ岳連峰北部から続く、北アルプスを望

める尾根上にある。尾根といっても、大部分の標高は二千メートル近くあるから、決して侮れない尾根歩きコースである。

部員全員が茅野駅に集合。テントを背負って三日間を共に過ごす。何といっても、驚ヶ峰や三峰山、王ヶ頭から白く輝く憧れの北アルプスを遠望する大パノラマが堪能できて、新人達は一様に感嘆の声を上げた。山小屋は、霧ヶ峰・美ヶ原の周辺にしかなく、中間地点でテントを張って、全員でピクニックするより他はない。毎年上級生にとつては足慣らしの一つの行事として実施された。この新人歓迎登山で、脱落する新入部員は例年一人もいなかった。

第一日目、茅野の南白樺湖のバス停から霧ヶ峰(車山)に向う。五月の連休中はよくガス

る。七時間の行程で和田峠でテントを張る。第二日目、和田峠を出発。三峰山を経て峠、茶臼山、塩くれ場、王ヶ頭に至る。石切り場桜清水付近にテントを張る。行程八時間

第三日目、テントを畳んで石切り場出発。下る一方なので遅い出発。入り山辺から薄川沿いを歩き、筑摩の森の高校まで行程五時間。新人歓迎登山が終わると、夏休みには松本電鉄の終点、島々から徳本峠越えて上高地に入った。自高の山岳部のベースキャンプを、徳沢園に設営に出かけるためである。

例年この地この時期、地元信州中南信地域の高校や東京の大学の山岳部が、大小の天幕を徳沢園に設営するのが慣わしである。この設営地は、家族連れの上高地小梨平のキャンプ場とは一味趣を異にしていた。山を熱愛して止まない若者の息吹が其処此処の天幕の間に横溢し、賑

やかだが競い合つ独特の雰囲気満ちていた。毎年、山岳部員は、天幕を担いで四泊五日行程の槍ヶ岳・穂高縦走が慣わしであった。

即ち徳沢園(槍ヶ岳)中岳(南岳)大キレット(北穂高)奥穂高(ジャンダルム)天狗のコール(岳沢)上高地の縦走コースである。このコースは、高校生レベルでは相当にハードである。しかし、梅沢紀夫の山に漲る力は、この強行日程を苦も無くこなしたのである。

徳沢園を出発し、直ぐに木の吊橋、横尾橋辺りから、クライマー憧れの奥穂高の前衛として聳える屏風岩が眺められた。「俺の当面目標はあれだ!」と心密かにときめかせていた。先ず松本で有名になる。そしてやがては、大きな野心の焔が心のトンネルに燦り始めた。

山岳部員の誰もが何時かは、あの岩稜をと密かに心に期して歩くという。この基地から北アルプスの様々な岳や峰に挑戦できた。高校クラスによつては、平易な西穂高岳に集団登山することもあるので、そのガイド役を山岳部員は時に買って出ることもあった。

梅沢紀夫は、在学中から山岳雑誌「岳人」「アルプ」、串田孫一の書籍を読んで、岩登りの魅力に取り付かれていた。そんな高校山岳部の縦走登山に間もなく飽いていた。俊敏で瘦躯な自分の体形は、単調で退屈な縦走・尾根歩きよりも、自分は岩稜が似合っているのだと仲間宣言し、退部して松本大名町にあった一般登山家集団の「青峰岳人会」に入会した。信州にはもちろん、日本山岳会所属の様々な山岳会があり、山岳遭難に駆りだされたり、初心者から中級登山者へと、段階的な岩登りや冬山を教育訓練してくれる団体もあった。

人生の思索の旅を山に求める本格的な岳人なら垂涎の的、世界の屋根ネパールヒマラヤ山脈、松本には、登山技術の交流を目的に、既にヒマラヤ友好会が結成されていた。その意味から、梅沢紀夫が、あの時高校山岳部を退部したのは、懸命だったのかもしれない。

梅沢紀夫は、高校卒業して直ぐに谷川岳の一の倉沢や、北アルプス穂高岳の屏風岩の難しい岩稜に挑めたわけではない。そんな無謀な真似は、幾ら山好きといっても、幾ら体力に自信があるからといって、先輩に就いて岩登りの訓練無しでは到底無理であることは充分自覚していた。それ程力量に自惚れていたわけでもない。逸る自分の気持ちを抑え、岩登りの目標、フリークライマーの訓練を段階的に踏もうと決心した。善光寺裏の大峰山の物見の岩、富士山の見える川口湖先の三つ峠の屏風岩、明神岳下部の十五〜二十五の岩場、妙義山ロックガーデン、谷川岳の幽の沢、谷川岳の一の倉沢の尾根の堅炭岩、槍ヶ岳の東鎌尾根、谷川岳の一の倉沢衝立岩、剣岳の八ツ峰等特に奥穂屏風岩は、穂高岳にある高さ六百m、幅千五百mの略垂直に立ちはだかる一枚岩である。岩登りをする者は、誰もがこの岸壁の登攀を夢見るといふから不思議である。こうした魅力に取り憑かれた者は、やがて岩登り中毒者となるのが常であった。梅沢紀夫は、段階的に岩登り技術をマスターすると、松本の「岳人会」でも名前が知られる存在になっていた。時々、北アルプスの岩場で、立ち往生する都会のクライマーの遭難救助に駆りだされることも珍しくなかった。そんな時は必ず、梅沢紀夫の名前が新聞雑誌に載った。

長岡時代の永井剛一郎や滝田政男等二人は、実際に知り合う前から、梅沢紀夫の姿を想像し感嘆の思いで記事を読んだ。その梅沢紀夫が、まさか自分達の関係する工場に臨時工で現われてこようとは思ってもいなかった。後に工場での存在を知り、社長の永井剛一郎は驚愕した。あの面接時のあの精悍な目付きの男だと、手元誌面を見ながら実感した。この男と出会えて永井剛一郎も幸せだったのではあるまいか。一度、長岡オリジナル工業時代に、永井剛一郎も、彼の紹介で連載企画「登る社長」という欄に、秋の西穂高岳や槍ヶ岳に滝田政男と遊んだ写真が掲載されたことがあったからだ。この男の山登りのタイプは、どちらかと言えばトレッキングやワンダーフォーゲル派の、永井剛一郎や滝田政男と異なり、絶えずヨーガで訓練された強靱な肉体を活かした、過酷な正等純粹岳人を自認し、然もソロククライマーとして自他共に認められる登山実績を誇っていた。山岳雑誌「山と溪谷」他各誌に、梅沢紀夫の国内外の単独登攀の投稿手記が、時々掲載されることがあった。また投稿を生甲斐としていたような男であった。トレッキング派の二人は、卓越した誌上で出会うソロククライマーの手記に惹かれて、梅沢紀夫の登攀技術を愛読した。槍ヶ岳に初心者に登るには、中房温泉から入山、合戦小屋を経て燕岳に至り、燕山荘泊、翌朝発ちで大天井岳、西岳、東鎌尾根、殺生ヒュッテ泊、翌朝発ちで槍ヶ岳に至り、槍ヶ岳から横尾、徳沢から上高地に下る、通称三泊四日表銀座縦走コースが普通である。当然逆の道を辿り上高地から槍ヶ岳、槍ヶ岳だけの登頂を目指し、泊は「横尾山荘」

「槍ヶ岳」二泊三日の楽なコースがあった。妻の真琴と息子剛志が参加したヤマケイ主催「登山教室」、KHJ全国引き籠もり親の会の共催の登山は、その年の八月後半、この逆のコースで実施されたのである。行事の趣旨は引き籠もりの家庭の親子で一緒に山歩きをしようという呼掛けに、参加した親子は五組、思い思いに夫々別の宿を取った。永井真琴と息子剛志は、余裕を持って長岡から列車で松本に着き、松本電鉄に乗り換えて島々に出て、バスで上高地に入り、河童橋の傍にある白樺荘に宿を取った。明日の集合場所は、目の前の河童橋であった。翌朝大候にも恵まれ、河童橋に集合したのは、スタッフを入れて総勢十二名の初心者パーティとなった。今日選んだコースは、初心者でも登山気分を充分満喫できる、気持ちの良い「槍ヶ岳(三二八〇m)登山三日間」コースで、主催側の「山と溪谷」社の女性が、目印に「ヤマケイ登山教室」の旗を掲げて、河童橋の畔に待っていた。最終日登山終了時に、永井親子が泊まった白樺荘の一室で登山教室が予定されていた。この日、集合場所にふらりと現われた、インストラクター兼ガイドが梅沢紀夫だった。初心者に自分の登山暦をひけらかすこともなく、簡単な自己紹介と槍ヶ岳登山の説明があった。「今回挑戦する槍ヶ岳は北アルプスの象徴です。ヨーロッパアルプスのマッター・ホルンにも似て美しい山です。地理上は北アルプスの全ての尾根は、槍ヶ岳につながっています。ですから県内のごこの山からもこの槍ヶ岳が望めます。略南北の稜線と、東西に尾根をもつ人気のある山で、四方からアプローチ可能

です。今日登るコースは、少し行程は長いですが一番楽なコースですからご安心下さい。今回の体験が皆さんの山への憧れの原点となることをお祈りします。参考までに、北尾根や南稜の熟練者・経験者用コース、一般向けは西鎌尾根、西南からの飛驒沢、東の通称表銀座コースがあります」

KHJ全国引き籠もり親の会の集団登山は、こうして開始された。当然主催者側から、今日の参加メンバーの「ひきこもり」という特殊な素性がガイド役の梅沢紀夫に知らされていたが、そんなことに全く頓着したり配慮する様子もなく、何時ものやり方で最初から婦女子皆一様に親切に対応した。

もしこの時、この「登山教室」に少しでも岩稜・岩壁登攀の心得がある者が参加していたら、名前を聞いて感激して握手を求めて、海外のソコ登攀の体験談を途中歩きながらも、せがんだであろうか？でもこの時既に、松本の「青峰岳人会」が特別に編成した、インド山系登山隊の一員として選ばれた際、二人の最終アタック登攀のヒバーク中に左手首に強度の凍傷を負って、手首切断の止む無きに至っていたから、義手の手の握手は嫌がったかもしれないが・。梅沢紀夫は、気温マイナス三十五、高度計示度六千メートル状況下、二人オーバーハングした一枚岩の上でヒバークした。雪庇が頭上に張り出し、二人の背後に死神が一枚岩の上に立っていた。濡れた手袋を、ザックの予備の手袋と交換するべきだったのだ。むしる凍傷で手首を一つ失っただけで、命失わずに済み儲けものだったと思つ。登攀記録は、「山と溪谷」「岳人」「岩と雪」の各誌に掲載されたので、この当時

の雑誌を探せば見付かるかもしれない。

インドは、登山家の梅沢紀夫にとつて、思ひ出深い海外登攀技術の挑戦の場であり、ヨーガ習得の道場でもあった。それは同時に、ヒマラヤの八千メートル峰への最初の手掛りであり、一步手前の予備段階となるはずであった。五、六千メートル級の山々が連なつて幾つも並び、例えばインド・コラホイ(五六八〇メートル)、インド・ヒマラヤン峰(六三三五メートル)、インド・ラサン(六二二〇メートル)、インド・クン(七〇七七メートル)等、他にも高所トレッキング愛好者にとつて魅力的な、未踏無名峰があつたからである。登山家の梅沢紀夫は、インド滞在中、現地

第一日目 足慣らし (4 hr 30 min)

上高地→横尾山荘→槍沢ロッジ

第二日目 槍ヶ岳に挑戦 (5 hr 30 min)

槍沢ロッジ→槍ヶ岳→横尾山荘

第三日目 帰途上高地で慰労会 (3 hr)

横尾山荘→徳沢園→上高地

第一日目

事前に簡単な昼食用握り飯を全員に配布。

上高地出発(8:30)梓川沿いに平坦な道を歩き始める。明神館から徳沢園(10:00)を経て、横尾までゆるやかな登り、横尾山荘前(11:30)で涸沢・穂高岳方面の道と分かれて、大休止(12:00)昼食後槍沢方面へ進む。水量

は少ないが、梓川より清浄な水が美しい。

槍見河原にでる。北西に槍ヶ岳が見える。初心者に登り勾配きつく一の俣小屋跡(13:00)で大休止後(13:20)、二つの橋を渡り二の俣へ階段状の道を登り槍沢ロッジ(一八二〇メートル、14:00)全員が無事ロッジ着、初心者互いの健闘を称え合つ、第一目所用時間5 hr 30 min(正味4 hr 30 min) ロッジで夕食時に全員に注意をする。

「明日はいよいよ槍ヶ岳の頂上に立ちます。」

二点ほど事前に注意をします。夏の雷と、最後の鎖場や梯子での登り方です。今日の行程では必要なことですが、大事なことですから聞いて下さい。高い山では雷は何処に落ちるか予測できません。平地の避雷の常識が通用しません。雷は地を這うように来ることがあります。一番安全な場所は洞窟か、避雷設備のある山小屋です。稜線や尾根での落雷で、死者がでたこともあります。明日は遅くも、午後二時まで横尾山荘に着くように早め七時に立出します。万が一の時は、横尾に下山せず、岩の避難小屋に待機するかもしれませんが。それから、鎖場での登り方を現場にきたら私が実演します。三点支持という登り方です。梯子や鎖場をけつして舐めてはいけません、以上です。絵葉書でも書いたら明日のアタックに備え早めに就寝して下さい。」

第二日目

事前に昼食用サンドイッチを全員に配布。

槍沢ロッジ出発(07:30)、現在避難小屋に利用の旧槍沢小屋跡着(08:00)。槍沢を登り大曲道標(二〇〇〇メートル、08:30)、槍沢雪渓でハシヤグ、天狗原分岐(09:20)経て苦しい登り。

お花畑に喚声、マヤマキンボウゲ、ミヤマキンバイ、ハクサンイチゲの花々(10:00)、ハイマツ帯槍見(二五〇^分、10:30)で大休止、殺生分岐経て槍ヶ岳山荘(11:10)腹ごしら後身軽になって山頂へ(11:30)、途中ガス中の岩場、鎖場と鉄梯子で三点支持実演。山頂で晴れ視界良好!!頂上祠前で記念撮影(12:00)、大休止後帰途に着く。下山に手こずる槍ヶ岳山荘、槍沢ロッジ、横尾山荘(14:00)

第一目 所用時間6 hr 30 min(正味5 hr 30 min)

第三日目

昏前に上高地に到着予定、全員気分爽快!

横尾山荘(08:00)発、上高地(11:30)着、

第三目 所用時間3 hr 30 min(正味3 hr 00 min)

KHJ全国引き籠もり親の会の八月の集団登山は、こうして一人の怪我もなく、全員無事に槍ヶ岳から下山した。昼食を食べながら、上高地で慰労会兼勉強会が開催されていた。

場所は河童橋の袂にある白樺荘の一室であった。それは、登山講座を兼ねた雑談とも本の宣伝ともつかぬ会であった。始めに、笑いの内に全員の槍ヶ岳初体験登山の各自感想発表があった後、女性社員の司会で進化した。話しの中で、ガイド役、梅沢紀夫の登攀歴が詳しく皆に紹介され、次いで、本人記名の記事掲載の雑誌、「山と溪谷」が回覧された。世話になった眼前ガイド、梅沢紀夫に対する挨拶やお礼の言葉が皆から集中した。彼の登山暦の素晴らしさを、皆素人ながらに尊敬の眼差しで聞き惚れた。「トレッキングの正しい歩き方」と題した「山と溪谷」社員の座学であった。「北アルプス開山今昔」と題して、上高地の

歴史が梅沢紀夫の口から、ウエズトン卿や山案内人上条嘉門治を中心にして語られた。

そうした一人の巧みな講演も初めてで面白かったが、皆が一番感動したのは、余興として実演してみせた梅沢紀夫のデモにあった。それは、上半身裸で実演されたヨーガであった。義手を外したため、上腕の中段から左手首までの腕が無いのが皆にはつきりと分かった。でも、上腕の無いのを全く本人は苦にしていように見えた。ヨーガで鍛えれば、肉体の不備を補ってかくも人間は柔らかく、強靱な筋肉質に生まれ変わるのかと、見ま違つその美しい裸のアーサナ(ポーズ)、梅沢紀夫の姿勢にあった。

剛志が初対面の隻腕登山家、梅沢紀夫に惹かれた理由が二つあった。惹かれたというより殆ど心酔したと言つて良かった。それは隻腕にも拘らず岩壁登攀をやつてのけ、靈氣を宿す強靱な筋肉とタフな精神力であった。外見から、梅沢紀夫は瘦躯な身体付きに見えた。にもかかわらず、裸身の一体何処に不思議な力が秘められているかと思つほどであった。

高校中退して、今直ぐ梅沢紀夫を師匠と崇めて、ヨーガの弟子入りしたい心境になったというから、妻の真琴は全く不思議でならなかった。中でも大陽礼拝のアーサナ(ポーズ)は、自分の裡にある不思議な力が甦り、魅入られるように感じたと。剛志自身、帰宅してからも、感想を自分に伝えてくれたからであった。

夫の永井剛一朗に、その槍ヶ岳登山の報告を兼ねて、剛志がヨーガを習いたがっていると話すと、少し怪訝な顔をしていた。

「その男なら、今も工場に時々姿を見せる、田口泰雄配下にいる臨時工員の男だ。」

逆に念を押すかのように聞き返された。

「お前等のガイドは、本当に梅沢紀夫という男だったのか?..もしそうならその男は、単独登攀で知られた登山家のはずだ。」

夫は直ぐ、その男なら信頼できると賛意を示し、部下の田口泰雄に梅沢紀夫の連絡先を聞き正すべく電話してくれた。このガイドに現われた隻腕の男、卓越した登攀技術を持つ登山家の梅沢紀夫と、田口泰雄との繋がりが何処にあるのかすら、皆自分からない妻の真琴であった。

驚いたことに夫も一緒に是非逢いたいのだと。場合によっては、自分もヨーガを習いたいと言いつたので、その気紛れな夫の性癖に真琴は殆ど開いた口が塞がらなかった。

フープ鳥の賛美歌・六

妻の真琴は心の旅を続けている内に、長岡時代の記憶に嵌っている自分を意識したが、ある夜不思議な夢を見た。北アルプスの山々を、仲間と何回も登つた夫が、登山姿で、奥秩父山塊を彷徨っているのである。南東の飯盛山、雲取山、南は三窪高原や大菩薩連峰、東は奥多摩、北は両神山付近、この広い連峰がパノラマとなって見えた。

(頁64上段後から03行目より続く)

今はブルの月だ。麦は刈り取られて曳き割り麦商人に売られ、葡萄はワイン買取商人に運ばれる。フープとメシャブは殆どの時間を地中ですごした。小さなトンネルを高さ十×幅六フィートの大きさに仕上げるように奴隷達を励ました。最初の貫通点は高さ一×幅一フィートの何でもない穴であった。この貫通場所での計画者

達は、当初のフルサイズの断面に拡大するよう作業を進めさせた。拡大したときに堅穴から井戸までの傾斜が平均化されるように理論的な計算をした。その計算は正確だったので、最初の10×6の断面が夫々の方向に拡大され、完成時のトンネルが滑らかなになるよう、計画通りの傾斜となるようにした。最後には貫通場所の痕跡すら残らず、フープが暫くの間自分の位置を見失った個所も判らなくなった。この二人の友人のみが、マコールのトンネルの驚くべき正確さを理解できた。

第三年目の終り、二人が働いている間も、妻のケリスはこの迷い人のゴージャムの歌を聞く機会が多かった。それは、放牧の国の哀調を帯びた歌や情熱的なヤハウエの勝利の物語だった。彼は祭壇の角の側にいる必要がなくなったので、寺院の向かいに店を構えている者に雇われた。そこでは、羊毛を仕入れてアッコに輸出していた。ゴージャムは若者の間でも有名になり、若者のために、寺院の前の冬の太陽の下で唄った。隣は酒屋でオリーブ油も売っていた。そこには、染物現場の黄色く汚れた労働者達で何時も溢れ、見知らぬ生活をゴージャムが歌うのを聞いた楽しんだ。

ヤハウエは蛇が噛み付く時、助けられる、
そつだ苦しみの時の盾だ。彼は藪に囚われた
羊を救う、そつだ、苦痛で苦しむ雄牛を。

ヤハウエこそ、砂漠の我が食べ物、
我がワイン、我が肉、

そつだ、あの孤独な場所の支え
独り夜の喜び。彼は我が歌、感謝の叫び

日の出の時の歓喜

ゴージャム自身は、この古い歌を千年以上も前にカナン人が始めた歌ったということを知る由と

て無かった。その時代、パールに求めていた属性を、今のヤハウエに求めている。ゴージャムによって修正されたこの歌は、天体の運動を支配し、確実に季節の循環と、人への恵をもたらす神そのものを賛美する純粋な賛歌であった。

ゴージャムが酒店の外で歌っていると、よくケリスがワインやオリーブ油を買いにきた。以前は奴隷の娘にさせていた仕事である。彼女はこの逃亡者の歌声を楽しむようになっていた。

彼の名ゴージャムには、「我々の中の見慣れた者」という意味があった。殺された男の兄弟が、マコールの人達に話したところでは、この殺人の経緯は本人が語ったほど簡単ではなかった。彼は一人の血縁者もなく、村にやってきて、娘を口説いて妻にした。それから娘の親の羊を盗んだのである。彼の首の周りの傷は、殺された兄弟から奪還しようとして彼を撃った傷である。殺人の事は、理由無く暗闇で兄弟を待伏せたものである。

「どうしてゴージャムは最初の土地を捨てたのか？」
マコールの人達は聞いたが、兄弟の答えは
「彼の過去は何もしらない」であった。
「自分はレビの一族だ」

ある少年が言ったが、兄弟は肩をすくめた。
「そつかもしれない」

最初、ケリスは真実だろうか疑った。

しかし、マコールの人達が彼を受入始めると、彼女は、彼の遙かな祖先を忘れていて、その歌に耳を傾けた。彼が酒店の外で子供達に歌って聞かせている歌声を聴いていると、その歌の中に信心深い感謝の叫びがあった。この珍しい男は、祭壇の角を掴まえているのではなく、彼女の裾を掴まえているかのように思えて聞き惚れたのである。

棘が裸に刺さる。そつだ、岩が踵を破る
しかし、ヤハウエは高みから我が歩みを見ておられる。彼は我が歩みを導き、私は冷たい水に辿り着く、人は我を夜も追つ、
そつだ、驢馬と駱駝に乗って追ってくる

そこで、私は恐れれた。
しかし、ヤハウエは暗闇で死につつある私を見て、愛情と共に、私を聖壇に導き給うた

これは、今迄の全ての神々の頂点にたたれるヤハウエの神、との個人的な関りの歌であった。

この言葉は特別にケリスの心に響いた。というのも幼いときに自分の父が教えてくれた、理想の教義の広がりであったからである。ゴージャムの歌は、ヤハウエは天の天を支配するのみでなく、踵に棘の刺さった男を憐れんでくれる余裕もある。この二つのことが重要だ。ケリスはパールの神の必要性を感じたことはないが、彼女はヤハウエの神は、隣人がパールの神に求めているような個人的な相談事に預からないと思っていたからだ。

ゴージャムは、ヤハウエは彼女が切望している神だと言っている。彼の手近な歌でそれが理解できる。この心の狂気こそが、マコールにおいてヘブライの宗教に欠けているものだ。そしてこのヤハウエの思召しが、頼り無い見知らぬ男を通じてもたらされたことに、彼女をして動転するほどに突き動かしていた。

ケリスの酒店通いの頻度が増えて、染槽からぶらりと立寄る者の目から見ても、彼女が台所で必要以上のオリーブ油を購入しているのが明らか程であった。店頭で長居をして、七弦の竖琴の男を見詰めた。マコールの人達は彼女がこの新参者に恋をしたのでは推測し始め、モアブ人のメシャブは間もなくその噂を聞いた。

彼は真つ直ぐに現場に行き、堅い岩を掘って
いるトンネルでフープーを見付けた。折しも、
アビフの月、アッコに送るビール醸造用の麦の
刈入れ期であった。

「フープー、君の妻が崖に向う羊のようになっ
ているよ」

「何事なんだ？」

「彼女がゴーシャムに恋をした」

「あのリヲを弾く男に？」

メシャブは、気の毒そうに、そこに腰を下ろ
している小柄で太った技術者の友を見た。

「マコールで知らないのは君くらいなもの。」

フープーは息をのみ、唇を嘗めた。

現場の音が、会話の邪魔をした。モアブ人は
豎穴の底まで連れて行き、涼しい陰で言った。

「君がアッコで鉄を買っているとき、私はケリ
スを知る機会があった。彼女は私の殺された妻
のようによく女だが、不確実な事に熱心だ」

「君が言いたいことは分かる。ケリスは何時
もエルサレムに行きたいと夢見ている。そこで
暮らせば幸せだと思っている。今私は凄惨な情
報を得ている。誰にも言わないよ。ケリスにさ
え言っていない。過大な期待を抱かせたくない」

心配しているのはメシャブだと言わなければ
かりで、喜びを押し隠すように声を落して続けた。

「ダビデ王がこのトンネルを視察にくる。王は
エルサレムでトンネルのことを聞いたようだ」

「この小柄な技術者が辺りを見渡して打明けた。
」

「勿論、王と一緒にエルサレムに来ないかと私
に言ってくれるだろう。」

「それに全ての望みを掛けているのかい？」

モアブ人は可哀想にと頭を振って尋ねた。

「そうだよ！ そうなればケリスは満足する。
エルサレムだぜ。つまり」

「彼女には今が問題だ。酒店での。今が」
「大袈裟だと思う」

メシャブは、彼を現実引き戻さねばと思い、
ぶつきらばうに言い放った。

「三年前、アムラム将軍がやって来た時。」「
」

「おい、おい！ アムラム将軍の悪口は言つな
結局君が自由になれたのも彼の御蔭だ」

メシャブはもつと言おうと思つたが、説明し難
いので止めた。フープーは将軍と妻のいちゃつき
の事を知っていた。城壁が完成した後、この小柄
な技術者は、次の新しい仕事をやりたいと決めて
いたから、その承認が得られるなら、どんな枷が
かせられようと、全く気にも止めなかった。もし

ケリスが、その将軍と気を合わせるだけで承認が
取れるなら、それが必要だつたとしたなら、フー
プーはそのまま放つていたのだ。メシャブは友達
を見詰め、(あの時、フープーは喜んで将軍に言っ
た午後の山登りに行ったのかと訝つた。

驚いた事に、察してフープーは疑問に応えた。

「アムラム将軍が私を馬鹿にしたのを気が付
いていないでも思つたかい？」

「こつちに行け
フープー、あつちに行けフープー」私が意味
もない仕事に出掛けている間、妻が将軍に身を
任せていたとも思つたかい？ ケリスはご存知
の通り、大変貞淑な女とは思わなかい？」

メシャブの会話で気を悪くして、横を向いた
が、直ぐに気を取り直すとメシャブの腕を握り、
苦々しく言い放つた。

「アムラムがマコールに着いた時、彼は私の欲
しいものを一つだけ持っていた。私が手に入れ
たこのトンネルだ。私も彼の欲しいものを一つ
持っていた。しかし、将軍は彼女を獲得するま
では至らなかつた。その年は、誰が賢く誰が愚
かな男だつたかな？」

メシャブはこれ以上何も言わなかつた。

その日、ケリスが三度目に酒店を出る時であ
る。自分でも思つてもみない大胆さで、ゴーシャ
ムが座っている前に彼女は立止り、初めて大通
りで彼に話し掛けた。

「何処でこつちした歌を覚えたの？」
「少しは私の自作です」

「他は？」

「私の国にある民の古い歌です」

「貴方の国の民とは？」

「ラビ族で、遊牧民です」

「損傷について貴方が言つた話、嘘でしょう、
ちがつ？」

「ちゃんと私には傷があります」

この時、この歌人と彼女はなにより一人きりに
なつて、冷たい鉢の水で傷を洗つてやりたかつた。
メシャブが、この見知らぬ男とケリスが恋に落ち
ていると推測したのは何としても間違つていた。

彼女はリヲ弾きに目が眩んだのではない。全ての
人の宗教的な憧れの詩を表現する男というものに
虜になつたに過ぎない。彼の詩が、あたかも彼女
のために作られたかのように感じたのである。

「こつちの傷ができたのが聞いていいかしら？」
「いいですよ」

「私の家で歌つてくれませんか？。夫が問
も無く帰ってきますから」

「いいですよ」

彼女は歌人の手を取つて大通りを案内しよう
として止した。彼はさり気無く彼女に付いてき
た。豎穴に着くと奴隷に言った。

「ヤバルが一緒に来れないか聞いてくださいな」
「彼は今下においてメシャブと話している」

「奴隷が答えた。そこで彼女は穴の縁に行き、
深い穴に呼び掛けた。彼女の声が切り立つた壁

に柔らかく反響した。

「フープー！フープー！フープー！」

彼女は人前で初めてこの名を使ったのである。

その後数週間経って、ゴーシヤムはこの技術者の家にいた。大抵フープーが居る時で、時々まケリスだけで聞き惚れる時もあったが……。

ゴーシヤムは激しいが優雅な男であった。

略歴は不明確だが、ヤハウエに関する信念は明白であった。丘の上で、彼は何等かの神との個人的な深い経験をもち、それがどんな人間との問題にも優先した。彼はすっかり妻と彼が殺した男のことを忘れていた。両親や兄弟との件同様に、この事は長く尾をひく事柄ではなかったから。

彼の信仰の歌は、こうした全てを包含し、有る意味で説明していたのである。フープーやメシヤブさえも、この見知らぬ男の歌を樂しむようになつた。彼が豎琴のリラを携え、ヤハウエの現実の詩を歌うのを長い夜の間に、腰掛けて聞いた。

彼は私が夜に探す子羊の泣声の中に居られるロー、彼は荒々しい雄牛の地踏みの中に居られる

ゴーシヤムが何週間か歌った後、トンネルが完成した。フープーの家にいる者は皆、彼そのままに喜んで受入れていた。あらゆるものから逃げ出し、ヤハウエの威信に追従した。

フープーの家で聞く彼の歌は、聞く者の受取り方によって様々であった。モアブ人は、ヤハウエに関する部分は、ペリシテ人がデイゴンを賛美して歌っているとか、バビロニア人は*タムーズを歌っているように聞いていた。パールはこの場合は部外者であった。

彼はヤハウエをヘブライの神として尊敬していた……それ以上でもそれ以下でもない、それだけ

なのだ。他方、フープーにとってはややこしい、彼の本名のヤパールでさえ、ヤハウエがパールより優位に立つという事実を表している。だから、ゴーシヤムの詩の内容を受入れたくなつた。しかし、現実の技術者として、この見知らぬ男が大切に崇めているものよりもパールの神の方が遥かに現実的だったことを認めざるを得ない。

「彼に岩を貫くトンネルを掘らして下さい」

フープーはメシヤブに囁いた。

「彼は簡単にはパールの神を捨てやしない」

ケリスはもつと複雑な反応を示した。一部は詩からで、残りの大部分は彼女に裡に成熟しつつある個人的な体験からだつた。詩に関しては、彼女は詩の中に禁欲的でもあり叙情的でもあるヤハウエの意義を聞くことに意義を見出し感謝していた。彼女自身については、ゴーシヤムが来る以前より、彼女はもつと純粋で精神的な経験を手探りし続けてきた。これから先の幾世紀ものイスラエルの人々がそうであるように……といつのも彼女の人生における失望や矛盾が男や女達が、何か中心の力を必要としているといつことを示していたからである。

* 脚注

タムーズ・バビロニアの春、または収穫の神、この神の地下から地上への帰還が春の土の再生を象徴する

もし二つの性格の異なる神に分散しては、誰もこの力を有効に作用できないと、彼女は殆ど思い込んでいた。ヤハウエもパールも言う両方は有り得ない。劣つた全ての神格を一つに統合し、その統合した神格を受入れる時が来ていると彼女の理性が告げている。個人的にはとうの昔に、彼女はパールの神を捨てていた。そして今や同じよ

うにしない人々を非難しようとしている。こうした考え方を彼女自身で培ってきたのである。こうした考えは、本来エルサレムへの憧れとは本来別次元であるが、多分に根幹であるようにも思える。そこでは、城壁とか、オリブ油の絞り機とか、染槽とかの感覚できる事物にのみしか関係しない。だからこそ、この町がパールのような実用的な神に固執している訳が理解できる。

しかし、彼女はエルサレムの思想が事物よりも重要だと信じていた……神と人との関係、正義、崇拜の性格……更に彼女はエルサレムでは自分と同じように考える人々が多いと確信していた。

そこに、ゴーシヤムが殺人の責め以外の経歴もなくふらりとやってきた。薄明かりの白壁の部屋の中、町の狭い路地にこだました単純な言葉で、ケリスが夢見てきた全ては真実であると述べた。限りない力を持つ唯一の神がいて、人間の心に喜びをもたらし、国々に安全をもたらす。

この偶然の七弦のリラに出会うまでに彼女は六年以上も費やした。その音楽は彼女の心に響き、正にこのメロディは共鳴する空洞を用意していたかのようであつた。彼女がこの浮浪者と語つた長い日に、彼に自分を触らせることは決してさせなかつた。いや彼が去るときにそうして欲しいと望んだこともなかつた。彼は彼女に山からの便りをもたらし、人々は使者を抱擁しない。唯この使者に聞き入るだけだ。これは、彼女が、最初に寺院に食事を運んでくれた時に理解していた。ケリスは高い世界を、完全な詩を渴望している。マコールで彼女は惨めだ。この町のヤハウエの儀式とパール崇拜の芳しくない*シンクレティズムに縛られている。彼は彼女を尊敬し、彼女のために歌うのを喜んだ。彼女は彼の詩を理解したからだ。

彼自身の生活といえ、羊毛商人に後の小さな汚れた小屋に住んでいた。彼は働かなかつたので、最低線の生活レベルだった。ただの食べ物があれば貰ったりして何処でも食べたし、酒店で盗んだものを飲んだ。奴隷の少女達の中に、彼を喜んでもてなす者がいたので、彼は城壁を登る専門家になった。僅かの銀があれば、門の守衛に通過させてもらえた。守衛達は、殺された兄弟達がいきなりやって来て、聖壇の角まで辿りつかないうちに殺されるぞと警告した。事実、マコールでは何処にいても、寺院に通ずる最短距離の道を調べていた。もう一度避難所に逃げ込むかもしれない日に備えていたのである。

* 脚注

シンクレティズム…起源の異なる複数の宗教的要素が習合して信仰されていること。神道と仏教、ヒンズー教と仏教等の習合 諸教混在。

ジブの月、掘削の四年目・薊が谷に、黄色いチユールリツプが沼地の周囲に咲き、鴻の鳥が北に去り、蜂喰い鳥が赤い芥子の上を飛ぶのが見られる時・フープーとメシャブは山の別の場所の採石場に行き、六個の長い石を運び、巨大な寺院の建築用の柱の如く十八フィートに切り、端を材木のように四角にした。彼等は多数の奴隷を使い、この六個の巨大なモノリスを井戸まで運んだ。この石を運んでいる間、別の奴隷達を指揮してトンネルから肩を綺麗に運びだし、最後に井戸の開口部から外に出した。水道システムは最終部分を残して今や完成した。その最終部分をフープーは今や着手するところである。泉そのものを岩の下深く隠し、どの侵略者も見付けられないし、見付けたくしても掘り出せない。

木製の足部の下に敷かれた若木の上を動く様に

のつて、岩が井戸に着いてから、フープーは奴隷に井戸の上を北から南に走る三つの対の穴を掘らせた。この穴が真つ直ぐに深く掘られてから、この大きな石のうち二本を下ろして立てさせ、井戸を覆う格子を作った。これが完成すると、水道の壁から大きな岩が投げ込まれ、次いで小さな岩が小石が土が埋められ全体を覆った。それから更に三つの穴が東西に掘られ、それが終わると残りの三つの長い石がその場所に下ろされ、第二の格子を作り、最初の格子と交差するようにさせた。そして、これをまた地上の表面に達するまで覆った。

「さて、古い水道の壁を壊せ！」

フープーが支持すると、奴隷達は喜んで粉々に打ち砕いた。石は町の内部の新家屋の建築資材として運ばれた。雛菊が町の背後に丘を覆い輝く日に、フープーとメシャブは観察地点に登り、敵が攻撃してきた場合に、井戸のありかを示すものが残っていないかを観察した。

「水道の壁の跡があまりにも明白だ！」

「雑草が生えれば心配ない・しかし、他に

秘密がわかるものがある。分かるかい？」

フープーの心配そだったので、メシャブが答えると同時に聞き返した。フープーは町を調べ、旗に気付いた。

「今日、あの旗を降ろそう！」

「旗のことではない。城壁の漆喰の線だ。何か別の建築物がくっついていたりした事を明らかに示している。」

「その通りだ！」

フープーは同意した。それは、水道壁で大陽光を保護したためにできた、明瞭な黒い岩側の陽に晒されて白い部分であった。二人は、この明白な線を消し去るには、どうすれば良いかを考えた。解決策を考えたのはメシャブであった。

「後門を守るような小さい塔を建てたら。」

「それは旨い考えだ！」

フープーは同意し、メシャブにその仕事の為に暫く此処に残ってくれと頼んだ。

「駄目だ、私は故郷に帰らなければならぬ」

「かっつての奴隷は返答した。」

メシャブが離れると決心したと、ケリスが聞き、彼女は泣いた。ゴーシャムの見ている前でも彼にキスをして嘆願した。

「もう少し私達と一緒にいて！」

そして、フープーとゴーシャム二人に言った。

「私の人生の暗い時期に、この人は兄弟よりも偉大だったわ！」

そこで、メシャブは決心を翻し、後門の塔を建てることにしたのである。

仕事が進行中のある朝、フープーは総督の庭からニユースを持って帰った。それは妻が三年間も期待していたものであった。遂にダビデ王がシユネムから北にやって来て、水道システムを視察する、これをダビデのトンネルとして奉納する。ケリスは報告を聞いて、自分の部屋に籠って祈った。(ヤハウエー！貴方こそが王をこの城壁に連れて来て下さった。貴方こそが我等を貴方の都市エルサレムに連れて行って下さるに違いない)

ジブの月末、乗馬の一団が門に現われ、総督にダビデ王がダマスカス道路から近付いていると告げたので、喇叭が吹かれ、寺院の僧侶達は子羊の角を喧しく鳴り響かせた。マコールの市民は皆、城壁に並び、或いは屋根に登って東の方角を見た。侵略が迫ったようだった。暫くして、驢馬に乗った人達が見えて来た。それから少数の馬に乗った人達、最後に奴隷の担いだ籠、これこそダビデ王がその籠の中に居られると皆が想像し知っていたが、丁重に扱われていた。

行列は大きな門に着き、驢馬に乗った者が喇叭を吹いた。城壁から返事があり、王の籠は中に担ぎ込まれて、総督の家の前に注意深く置かれた。そこで喇叭が幾度も鳴らされた。カーテンが開くと、ダビデ王でなく、イスラエルで一番美しい若い女性が姿を現した。

「アビシヤだ！」

マコールの女達が囁いた。彼女が歩を進め総督に挨拶した時皆は驚いて見詰めていた。

彼女こそダビデ王治世の晩年の傑女であった。

老王が衰えつつある晩年に、共に暮らせる優しい子供を国中に探した折りに、シユネムの森で見付けた農家の娘であった。『寒い夜に王と同衾する少女』顧問官は彼女を探す時にこう説明した。この仕事に最適の娘を見付けた。娘は王に愛情を持って仕え、王の最後の時に耐えていく上で、非のおきどころ無い資質を有していた。今から間もなく、ダビデ王が死ぬと、息子達は領土を争うより、この輝かしい妾を争うであろう、そしてアドニヤが義兄弟ソロモン王の怒りからこの妾故に殺されることとなるのだが、この娘は、そういうイスラエルで一番好かれる女だったのである。

さて、彼女は籠に戻り、七十歳近い弱い老人に手を差し伸べた。白い髪で少し震える手をしている。アビシヤが部下の前に子供ののように連れて来た時、ケリスは囁いた。

「あの人がダビデ王かしら？」

その時、この老人は群集の尊敬の歓声の声を聞いた。老人は背を伸ばしたように見えた。

「ダビデ！ダビデ！」

大陽の光が老人の髪を照らすと、未だに若き時代の名残を止める赤い髪が見えた。老人はアビシヤを傍らにして、ゆっくりと頭を巡らし、人々の歓呼に応えた。もはや疑いもなく、この群集の中に

いるのはダビデ王であった。落ち窪んだ眼窩に光る瞳が、歓声の上がる度に輝き、その肩は齡の重みを感じさせない。王の身体の動きには王者の優雅さがある。そして四十本の喇叭が鳴り、太鼓が響いた。偉大な王、ゴリアテの征伐、領土の拡大、帝国の建設者、イスラエルの歌い手、知恵者、裁判官、寛大な人、ヘブライのダビデ、まさに世界に無比の王であった。

ケリスは、あたかもその老人を王以上の者であるかの如く見詰めていた。明らかに外見を気にして髪が刈られ、衣装が注意深く整えられ、踝に黄金の角のあるサンダルを履いていた。黄金やエメラルドを刺繍した衣装、白髪を覆う錦織の帽子。王が群集の中を高貴な優雅さで歩くので、サウルの娘ミカエル、ウリアの妻、バド・シエバ達との心の戦いを誰も窺い知ることも出来なかった。

サウルの息子ヨナタンと王との厚い友情は、今や心に沁みる語り草となり、王が若い男の激しい衝動を鎮めたとする印象を与えた。

王は突然姿勢を崩し、その手をアビシヤに預けた。最後の喇叭が壁に反響した。太鼓はもう鳴らなかつた。アビシヤが、王を静かに導くまにされた。王は何も聞かず、何も見なかつた。自分でつくりあげた世界の上の存在となつた。

「王は、王国をソロモンに譲ろうとしている」

一人の若いファニキュア人が囁いた。

「王はもはや覇を争つ気はない」

ケリスの場合、こんな老いた王を見るのは激痛の極みであった。王が通らねばならない小道に跪き、王の手を握って叫んだ。

「王は、アークを救った折には、エルサレム

で我等のために通りを踊られたのに・・・」

王はケリスを見て、一瞬炎が目に戻ったが、微笑んで言った。

「それは随分昔のことだ」

ケリスは疲れた白い顔が通り過ぎるのを見上げ、この偉大な男の活力が失せたと考えそうになったが、総督の庭で、自分の考えが誤りであると悟つた。その時、ケリスは王の身体は未だに頑強で、余分の脂肪も無いのが分かつた。それに彼女の心を躍らせる言葉が待っていた。

「この町の城壁は素晴らしい・・・建設者を連れてこい！」

「ここにあります」

総督が述べて、フープを前に進ませた。

しかし、この小柄の技術者は立止り、ケリスを探すと、一緒に王の御前で頭を下げた。

「お前が水道トンネルを造つたのか？」

「私です」

「それをみてみたい！」

「お休みくださいからが・・・よろしいかと」総督は言ったが、王は直ぐにトンネルに行きたいと言つたのである。興奮したケリスは、堅穴までこの一行に加わつた。総督は、事前練習の成果を披露するかの如く、派手に演説して驚かせた。

「そこで、このトンネルの建設に尽力した我々マコールの民は、ここに、これを王に捧げたい。ダビデトンネルと命名する！」

群集は歓呼したが、ケリスは王は少しも気に止めていないのに気付いていた。フープは、この祭りに参加すべき一人の男が居ないのに気付いた。メシャブは、ダビデ王に敬意を表す気がなかつた。花を付けた特別の綱の綴が階段に張られた。しかし、ダビデ王は開口部に着いても、降りるのを断り唯深い穴を見下ろしただけであつた。

「トンネルは何処に通じているか？」

「底に降りたら分かります」

王の問いにフープは説明するのだが、王は底

を見たくないといい、更に短気そうに尋ねた。

「その方向だ？」

フープーは驚いて返事できないでいた。彼にしてみれば、トンネルを見にきたのにそれを調べないのは解せなかった。総督はフープーを肘で軽くつついた。でも答えられなかった。総督が代りに答えた。

「あちらの方角です、閣下！」

そして、王を城壁の北端の上に導き何処に井戸があるかを示した。しかし、水道壁を取り除き、以前の線を旨く隠していたから、実際総督には何処に井戸が隠されているのか分からなかった。一瞬当惑した総督は、メシヤブを呼んだが、大きなモアブ人は隠れていて役に立たなかった。ケリスは夫の肘をつついた。フープーも遂に城壁に来て、当惑したように斜面の方を指差した。そこは何の変哲もなかった。フープーは言うべきだったのだ。

「閣下！我々は巧妙に隠したので、町の人でも井戸が何処にあるのかわかりません。敵がどうして発見できませんようか？」

フープーは、吃って言った。

「あの下です」

「分かった」

ダビデ王は何も見ないで言った。苛々しながら城壁を離れると聞いた。

「あの奴隷達は？彼等は何をやっている？」

総督がフープーを見たが、彼は答えなかった。代りにケリスが口を出した。

「彼等はエルサレムに送ることができません」

「彼等はここで必要なはずだ」

王は唸るようい言った。この時、アビシヤが王は戻って休息しなければと示唆したが、王は不機嫌で同意しなかった。

「マコールにはリラを弾く歌手がいると聞いたが・・・」

総督は誰だと見回した。ケリスが答えた。

「上手に弾く歌手があります。我家に連れて参りましょうか？」

「よし、その家に行こう」

役人の誰もゴシヤムの家を知らなかったが、ケリスだけは知っていた。そこで彼女は王を寺院に連れて行き、それから酒店に、それから羊毛商人の処に連れていった。ようやく居場所を見付けると、その後の小さな部屋で、ゴシヤムがワインの瓶の傍らで寝ていた。その場所は暗く羊の皮の腐った匂いがした。そこで総督は王を遠ざけようとした。ダビデ王は部屋に入ると言い張って、アビシヤを傍らに、ケリスを反対側にして立ち、眠っている男を見下ろした。

何時もの心の旅を終え、栞を頁に挿むと、真琴は、昨夜の不思議な夢の話で、大分の娘の慶恵に電話した。娘もやはり、父の剛一郎が秩父山系を彷徨っている夢をみたと言った。然も単独登山で道に迷って同じ処を堂々巡りして、助けを求めて遭難しているというのである。不思議な事に、長男剛志も同様の夢を見たのである。妻真琴と娘慶恵、息子剛志が同じ夜に、父親永井剛一郎の夢をみたのである。唯息子の夢は、父親は秩父山系を彷徨った末に、深い森の中で足を組んで瞑想して居たと言ったものであった。真琴は、あの時の葬儀の後の息子の予知夢「フープーは、ひよっとすると死の淵から舞戻ってくるかもしれないぜ、マコウ！」はこれだと自覚した。真琴は、自分の心の旅がもう直ぐ終わると予感していた。

田口泰雄の役割

永井剛一郎の腹心の部下、田口泰雄にとつて。創業期の長岡オリジナル工業に、長岡労働基準監督署紹介で臨時工として書類を提出し姿を現した男、社長の永井剛一郎の面接評価の高かった男、得体の知れぬ梅沢紀夫は、最初不快感を与える男以外の何者でもなかったのである。

それが、数年を経ずして、田口泰雄が工場全体を与る立場、現場の課長から副工場に就任した時、信頼の置ける知友に成長したのだから、人の縁は全く判らないものである。おまけに梅沢紀夫本人は以前として、正社員になることを拒否して、気儘な臨時社員であることを望んだのである。

面接時、勿論希望者から提出された履歴書を頼りの、口頭の質問も一通りなされたのだが、永井社長の面接の遣り方は少し変っていた。

時計を見ずに、各自に「三分」を数えてもらい、実際の三分と比較する簡単な性格テストであった。「三分」と言ったときに、実際は三分十五秒だとすると、その人は一見のんびりした人間と判断しがちであるが、実は逆で結果的には時間に追われてきた人間、つまり性格的に「せっかち」で、つまり現場でも事故を起し易い人間だといっているのである。

何故「一分」でなく「三分」かと言えば、「一分」だと心の中で、本人が数える誤差が出にくく判断できない。無論「五分」でも良いのだが、経験上「三分」位で有る程度の性格の判断が付くのだという。逆に、百八十秒以内と答えた人の性格は、何時でもゆとりが持てる

安定した性格で、物事に動じず事故を起し難い「ゆつたり」した人間だといつのである。

実際にこの分類法は、聞けば某医大の統計による三十年後の追跡生存率でも、「ゆつたり」組みが、「せっかち」組みの約二十〜三十%長生きで、冠動脈疾患や脳梗塞の発症頻度も罹病率も低いと言つデータがあるという。この奇妙な面接性格判断で、梅沢紀夫は丁度百七十秒、二分五十秒と答えたらしいのである。

おまけに、目付きが良い、上手く育てれば年齢が少し気になるが、現場のリーダーになれると、今時信念のある珍しい男だと言つのである。モラルも高く、プライドがあるとと言つコメント付きだった。でもこの段階で、流石に梅沢紀夫が無類の山狂いだとよめなかつたようである。この高い面接評価は、永井社長の個人的見解で、どうみても同じ信州で育つた者の身置が働いたと、福島県出身の田口泰雄は思つたのだ。

育成を任せられ、工場の現場を与る田口泰雄にとつて、この男は変にプライドがあるだけに扱い難い男だった。兎に角、仕事に対してアルバイト感覚、一時的な腰掛気分が強く、その癖取が分からないとキチント説明して欲しいと食下がる、更に他の臨時工社員のように機会あれば、上司に取り入つて正社員に成りたいという秀逸気も意欲も見せなかつたからである。何故そつたのかは、やがて得体の知れぬこの男が、素晴らしい登攀歴を有する登山家であると、社長の永井剛一朗から聞かされてよつやく了解できたのである。

つまり、彼にとつては、山が心の裡に赤々と炎を燃やす唯一絶対の対象であり、工場の仕事は山の道具を購入したり、山に籠るたの費用入手の一つの手段だったに過ぎなかつたのである。

だからこそ、何時までも臨時工を希望し、薦められても正社員に昇進するのを頑なに拒んできたのだとやっと理解できた。

その理由は、己の我儘で会社にこれ以上の迷惑は掛けられないという、彼一流の忠誠心もそこに感じられて、課長の田口泰雄は、やつと梅沢紀夫に好感もてるようになったのである。さりとして、立場、見込みある臨時工にリーダーとして責任ある仕事を任せられず、他の臨時工や下請け企業の工員に示しが付かず、最初のうちこそあつた山行の無断欠勤こそないが、この男の処遇に大変苦慮していた。

ひとつ疑問だったのは、何故最初に就職した川崎から、登山家にとつて環境の悪い長岡市に流れてきたかであつた。むしろ山なれば、郷里信州に戻るか、東京の方が彼にとつて都合が良いと素人なりに思えたからである。その理由も、間もなく判明した。

梅沢紀夫が、何時になく深刻な顔をして田口泰雄の家に姿を現したからである。長岡では他に相談できる人もいないので前置きし、如何にもすまなそうな照れた顔をしてきた。本人の言い分によれば、面接してくれた社長の創業時の苦労話を聞いたのと、その尊敬する社長の一部の部下が、自分であるらしいと見当をつけて、どうやら彼なりに熟慮の上で、家にまで相談にきたらしかつた。

「女が妊娠したので、墮胎する費用を借用したいのです。ついでには今後貴方の手足になります。と言つても従来通り臨時工としての協力となりますが・・・」

と単刀直入に切り出された時は、流石に驚いた顔の田口泰雄であつた。が多分この男の

裏にそんな事情があるのだからと、川崎から長岡に流れて来たのも、惚れた女絡みであると、田口泰雄は読んでいたから、内心は左程驚かず、逆に機会を利用して説得した。

「この際、その女性と結婚をして、どうだこれを期に本格的な山登りから遠ざかつてはどうだ？そつすれば臨時社員でなく、当社の正社員として働ける。好きなことをいっばいしたからもういいだろう」

田口泰雄は、やつぱり山男は女にもてるのだと羨む気持ちを感じながら、彼に永井社長の期待の声を伝え、駄目もとで危険な登山家の道を断念するよう説得した。もし聞いたら、墮胎費用を出してもやろうとさえ思つた。

その女性は、本人言つには自分を繋ぎとめる為に女の浅知恵で何時もの避妊もせず、妊娠するように仕向けたに違いないと彼が言つたので、田口泰雄は、男と女の間でそんな話は通用しない、山男なら山男らしく責任を取つて、そんな言い訳をするなと諭すように説教した。

「胎ろさずに、産んだらどうだ！」

最後は、登山家としてどうしても生きたいのなら、今後も臨時工のままでも良いと妥協した。産院の費用なら出してやるから、心配するなと諭し女と籍だけは入れるとも言つた。でも、良く話を聞けば、その恋人の長岡出身の女性とは、川崎に梅沢紀夫が始めて就職時に一目惚れし、以後その会社を首になつてからも、何度か横浜の山下公園、横浜港の大棧橋や、中区のシルク会館地下の喫茶店で、デートを重ねたと白状した。梅沢紀夫も、その女性がまんざらでもなく好きだつたと解つて田口泰雄は安堵した。

その事を、当時社長の永井剛一朗に報告すると、笑ってその意見に賛同するとともに、今後とも梅沢紀夫の面倒をみてくれと依頼されたのである。その結果が、社長の「ひきこもり」の息子剛志の面倒まで見る結果になるうとは、流石に予想も出来もしなかつたのである。

女の産産を期に一時的に、山登りを自重していたが相変わらず己の生き方を貫き、その後、以前通り登山家としても活躍する梅沢紀夫がある面羨ましかつた。山登りの趣味の無い田口泰雄にとつて、梅沢紀夫を高く買う社長の姿は、解らぬでもないが、えこ贔屓の過大評価ではと、常々疑問の点が無くも無かつたからである。山に行く都合上何時までも彼は気ままな臨時工の立場を欲したまま、創業期の長岡オリジナル工業から、川崎オリジンに社名が変わつてからも、田口泰雄に恩義を感じ、梅沢紀夫は仲間と行動を共にし、ついて来たのである。口約束通り、田口課長の数々の無理を梅沢紀夫は、時々黙って聞いてくれたから、二人の関係は益々親密になつた。

こんな事があつたからでもある。

それは、昭和四十六年に長岡瓦斯化学工業が三菱荒川興産と対等合併して、社名を東都ガス化学興産と社名変更があつた以後のことであつた。丁度その頃、長岡オリジナル工業の創業社長永井剛一朗の身辺にも、社内派閥抗争と、三菱商事の上層部から退任圧力が及んで来た頃である。そして、田口泰雄をも脅かす人事が発令されたのである。それは、昭和四十九年に本社から北山富士夫が、社名変更なつた川崎オリジンに

出向してきたからである。北山富士夫はその後も、親会社の威光を笠に、昭和五十年には、上司として工場長兼営業担当取締役、その二年後には、とんとん拍子に出世し、何と創業社長の永井剛一朗を追い落とし、見事二代目代表取締役社長の職席へと上り詰めたのである。空席の自分の上の工場長ポストに、遅れてきた常務取締役石塚幹夫工場長が座つたからである。

なにしろ北山富士夫の営業の遣り方は、「開発のスリッド」と「顧客の獲得」第一優先であつた。顧客のニーズにいち早く対応することが、至上命令となり、開発製品に多少問題があろうがなかるうが、上市してから手直しすれば良い、もしクレームが発生したとしても、顧客に謝り金銭で解決しろと、製品の欠陥は後で修正して納入すれば良い。だから取れる注文は何でもとる。現場の製造技術が追いつかない程の、極端な営業優先至上主義であつた。現場を与る副工場田口泰雄はたまつたものではない。

この殺人的な激務に良く耐え、下請けや臨時工を指揮して一番協力してくれたのが、何と登山家の梅沢紀夫だつたのである。この時の梅沢紀夫のリーダーシップは、それは見事なもので、好きな山登りを一切禁止し、老練な熟練工を叱咤激励し、時には常套句の「目高の学校」ならぬ「目高の逆境」のギャクを連発しながら、奔走し困難を乗り越つたのである。臨時工も下請けも、皆彼の指示に従つたから不思議であつた。この時ほど、田口泰雄は、永井剛一朗の人を見る目、登山家の梅沢紀夫を高く評価した、その先見性に感服させられたことはなかつたのである。なにしろ生産コストは注文とつてから、

下請け企業、パートや臨時工の尻を叩いて何としても辻褄を合わせれば良いと、実験室で一度顧客の要求性能に合格の結果が出れば、新製品の技術開発は終了だと、再現性も量産テストもへつたくれも無い。

まして、北山富士夫は、社長就任後もTOPセールスマン気取りであつた。それこそ工場の安全性もコストも無視したまま、営業担当重役兼務で奔走し注文を取つたのである。

田口泰雄は、この時程現場サラリーマンの悲哀を嫌というほど味わされたことは無かつた。役員と現場の板挟みになつて、結果的に何時も、社長兼営業担当重役の言いなりになつた。苦言は余程のことではなくては、呈さない状態となつて、次第に目になつていく自分がとても惨めだつた。石塚幹夫工場長はと言えば、北山社長が連れてきたお飾りで、現場を知らず頼りにならなかつた。工場では、小さな発火事故や小爆発事故が頻発するようになっていた。

そして事故は起るべくして起つた。

平成九年三月十五日、爆発事故が川崎オリジン社の川崎工場で、下請け作業員死亡一名、臨時工重傷者二名、二名とも膝から下を切断という大事故が発生したのである。事故は、社内に緘口令が敷かれ、当間の間社外秘扱いされた。遺族には見舞金で処理された。下請け企業と臨時工を束ねる立場の現場A係長に責めが集中した。現場管理が十分でなかつた、今後こんな不始末を起す下請け企業は、出入り禁止にしろと。北山社長は激怒し、作業者のミスが事故の主原因だとA係長を叱責した。程なく川崎労基署から立ち入り調査があつた。下請

け企業の社長が青くなって飛んできて、「会社にご迷惑をお掛けしました。今後このような事故は二度と起しません」と、A係長と田口泰雄副工場長執成して、北山社長に誓約書を入れ謝罪が行なわれた。やがて「遺族の方々に申し訳ない」と詫び状を残しA係長は自殺した。

現場労務者の間に、怒りが充満しモラルが著しく低下した。見かねて、田口泰雄は、社長の北山富士夫社長に進言していた。社内改革の一端として、若手管理職を中心にしたISO認証取得であった。言いだしつぺの田口泰雄は、副工場職と品質管理責任者を兼務した。思惑としては、北山社長をISO最高責任者としたのだが、社長は首を縦に振らず印判も押さなかった。

ところが梅沢紀夫は皆が知らぬ内に、ある時点を境にして、田口泰雄の懸命の慰留にも耳も貸さずに自己都合で突然退社した。面談した田口泰雄は、何事か強い決意を秘めた、あの時の梅沢紀夫の表情を思い出すのである。そう、今にして思えば田口泰雄に思い当たる節があった。しかし、実質的に引退していた創業社長永井剛一朗の耳には、それを入れずに黙っていた。

その後、梅沢紀夫から元上司だった田口泰雄にだけ、臨時工の仲間達に宜しくとそれとなく伝言して、電話で連絡先を伝えてきた。

その後の彼の仕事は、山岳救助や講師口の各県の自治体のアルバイト、登山用具を売る企業や店のスポンサー、雑誌の企画協力やカルチャーセンタ等、山を生活の糧としているので安心してくれと言つ伝言だった。

田口泰雄は、なおも工場の管理運営軌道修

正を社長に進言していたが、聞き入れてもらえなかった。その件以後、社長より全ての委嘱業務を外れ無任所になれと申し渡された。平成十年七月末、まだ夏の盛りであった。

定年の二年前、田口泰雄は、早期退職を真剣に考えるようになり、元直属上司の創業社長の永井剛一朗の自宅にも相談に行った。顛末を話すと、やはり自重しろと言われた。定年まで頑張つてと家族の励ましもあったが、依願退職届けを会社に提出し、実質的に川崎オリジン社と縁切り宣言をしたのである。

ところが、はじめを付けたはずの自宅に電話があった。神奈川県警捜査一課の警部補と名乗る人からであった。平成九年三月十五日の、工場事故について事情聴取をしたいと言ふことだった。後日わかつたのは、事情聴取を受けたのは当時の五人の工場関係者、即ち北山富士夫社長、石塚幹夫工場長、田口泰雄副工場長、以下現場課長二名であった。

最初は事故を知った経緯等についてであったが、在職中から製品の危険性について知つていながら、適切な対応をしなかつたといふのが、今回の爆発事故を誘発したとして、当時の工場の製造に拘る五人が「業務上過失致死傷」の容疑で、九月〜十月に前後十数回の任意の取調べを受けたのである。

田口泰雄の場合、ISO認証の決済印が、裏目となり製造責任者と見做されたようであるが、二年前に会社を辞任した経緯と、現場臨時工からの意見聴取等により当局は、田口泰雄の不起訴を決定したのである。

ところが事件は、これだけで終わらなかつ

た。単に川崎の一工場サイドの「業務上過失致死傷事件」から、田口泰雄も予想だにしない、むろん創業社長の永井剛一朗とて同じであったが、意外な方向に進んだのである。それはTV報道もされ、天下り官僚が絡んだ「官界癒着の贈収賄事件」で三人の逮捕者を生み、神奈川県警から豪腕で知られる東京地検特捜部扱いの様相を呈したからであった。

一般的に女性の場合、結婚したとしても、余り好きでない男性との結婚の場合は、昔のデイトの場所に余り行きたがらないという。逆に男性の場合は、失恋すれば尚更、結婚してから昔のデイトスポットに、思い出を強く残し、時々行きたがる性癖があるという。

登山家で元川崎オリジン社の臨時工だった、梅沢紀夫の場合も同様だった。神奈川県公安委員会の高橋弁護士と、内部告発の三回目の待ち合わせ場所、面談は長岡女性との思い出のデイトの場所、横浜中区山下町一番地のシルクセンター地下にある喫茶店であった。あの時梅沢紀夫は神奈川県川崎に、女性は長岡と別居状態であった。内部告発の電話の後、高橋弁護士に送り届けた封書は、別居の長岡女性に手紙を託して、態と女文字筆跡で投函させたものだったのである。因みにシルクセンター(旧シルクホテル)は、横浜開港百年記念事業として、昭和三十四年英一番館跡に開設され、内部に絹博物館、隣地は産業貿易センターである。

田口泰雄は、別段信心深い仏教徒だった訳でもないのだが、一連の事件の後自分の気持ちに決着を着けるために、真言宗智山派の川崎大師平間寺にお参りにいった。

弘法大師(お大師様)、つまり空海といえは「南無大師遍照金剛」を唱える四国巡礼

の遍路旅である。元上司の永井剛一郎が、東京阿佐ヶ谷から秩父に転居したのも、秩父霊場を巡るためと聞いていた。霊場巡り等今迄全く無縁の田口泰雄であったが、信徒会館の一回ロビーで、関東八十八カ所霊場開創十周年記念法要のポスターを見つけた。お場所は東京高輪の高野山東京別院であった。お砂踏の法要のチケット妻と二人分二枚購入した。案内チケットに以下の文言が印刷されていた。

▲関東八十八カ所霊場の御本尊掛軸とお砂を一同にお祀りして、お砂踏みを開催します。関東八十八カ所各寺院をご参拝したのと同じだけの功德があるといわれておりますので、是非この機会にご参拝下さい。vつまり、お砂踏みとは、東国全札所の遍路旅で巡礼したのと同じ御利益や功德が、東京別院一カ所で済ますことができる特別な難い法要だのだとチケットは誘っていたからである。

平成十七年十一月三日(水)文化の日、その日は例年の如く晴れの特異日であった。田口泰雄は妻と二人、高輪高野山東京別院にいった。何も知らず存せぬの罰当たり、お砂踏みなる法要の何たるかも知らず、東京別院に行くのも初めてなら、巡礼旅未経験のまま、ままよ度胸だとたかをくくって一人して家を出た。

境内お大師様の大きな像の前に、四国札所の一番札所「霊山寺」八十八番「大窪寺」までの全霊場の寺名を刻む八十八ヶの石碑があった。本堂に設けられた、お砂踏み場の風景は初めての経験だった為か少し異様な感じがした。何故ならずらりと高崎の一番札所「慈願院」から、最後妻沼の八十八番の札所「聖天山 歡喜院」まで細い通路が奥まで続いていた。目の前の札所

本尊掛軸、床に白布のお砂入り座布団、白布を敷いた台の上に線香立て、花台と蠟燭立て、そこに線香の煙が揺らぎ、蠟燭が灯り、札所毎に異なる御詠歌の文字が記され、そして人々の浄財の小銭が小山となって白布の台に乗っている。

各札所である者は座り、ある者は立位で「南無大師遍照金剛」を三回唱え合掌して拝み、お砂布団を踏みながら、一番毎に移動の動作を繰り返して進む。細い通路の中を、御詠歌のテープ音が繰り返して流されていた。終了すると出口で、

三人の僧侶から「散華」と記したお砂踏結願之証他を入れた記念の封筒一式が一人一人に渡されたのである。田口夫妻は、二人とも三年越しの「業務上過失致死傷事件」の疑惑から開放され、久し振りにすがすがしい気持ち味わっていた。記念封筒内内の本を読んだ。

お砂踏みの起源は、四国八十八カ所札所の遍路旅の簡易版として始まったようである。

四国の山野を断食修行で難行苦行の末に踏破した、弘法大師の威徳を偲ぶために、境内一カ所に霊場の仏様を点在させ、又は霊場の御本尊様と御土砂を勧請し、四国まで行かない巡礼者のために開設された新たな形式の法要と聞く。京都等の弘法大師ゆかりの古刹、真言宗の寺院で盛んに行なわれている。

八十八の数字の起こりは、まさに諸説あって定まらない。八十八使の煩惱に由来するとか、三十五仏と五十五仏の合算説、印度の根本八塔の十倍に根本の八塔を加えた数字説、米の字の分解説、男の厄年四十二、女三十三、子供十三の合算説等である。

弘仁年間(八一〇)〜八二四)、弘法大師が東

国各地を巡錫し、諸仏を造頭開眼し、早魃疫病で悩む人々を救済したことが各寺の縁起式に残されているといふ。東国にも、本四国写しの霊場が各地で開かれた。大師開教以来一九〇年。平成九年に特別霊場四カ寺が参加して平成の大師の道、関東八十八カ所巡りが広まったといふ。そして、本を読んでいる内に何故か、息子の引き籠もりで悩む、元上司永井剛一郎の頼みで、登山家梅沢紀夫を引き合わせて大分昔の事を思い出していた。巡礼の旅もまた、インドで発生したヨーガに通じる心の旅路だと思ったからである。

永井家の場合、研究開発に没頭した永井剛一郎の代まで降りると、もはやその先祖の霊能力の痕跡が更に薄まり、浅草育ちの配偶者妻の真琴との血の混じりあいの影響もあり、神道思想は消滅したようにみえていた。

長男剛志が引き籠もりの現象をみせて、妻真琴を悩ませ苦しめていた理由は、こうした先祖からの一神教神道の心や霊能の力が抵抗して、いいや、もつと遡って旧約聖書時代のユダヤの霊能者の隠れた呪に、真琴がそれと気付かなかったためだったのではあるまいか。

剛志の呪いを解いたのは、もしも梅本紀夫が教えたインド・ヨーガだったとしたら、何となく合点が行き、辻褄が合うのである。何故ならヨーガの基本は、太陽礼拝のアーサナ(ポーズ)にあるからである。ヨーガのスリーヤナマスカラ(Surya Namaskara)とは、サンスクリット語の大陽礼拝を意味する言葉である。スリーヤは大陽を、ナマスカラは崇拜、礼拝を意味する。一連の動作は、大陽そのものを崇め称えると共

に、ミクロコスモス(Jiva Aoutora 個人の魂、小宇宙)、マクロコスモス(Para Aoutora 宇宙の本体、大宇宙)レベルの合一を象徴している。ヨーガでは大陽礼拝のポーズを行じることで、裡なる大陽的な靈気を呼覚まし、その生き生きとしたエネルギー(気の力)を自身に解き放つことで、更なる高次の意識を裡に開発し、生命力を活性化させる。

インド・ハタヨーガのハタとは「大陽と月」の意で、全てを貫く力の人類の外的な象徴である。天体を拝む最初の原始宗教であり、偶像崇拜である。旧約聖書の世界では、偶像崇拜を否定しひたすら絶対神のヤハウェ崇拜を人々に教える。偶像崇拜の思想は、更に広がり、後に惑星や十一宮の徴として、他の天体も崇められた。中でも大陽はその筆頭である。旧約聖書に出てくる「バールの神」は自然の神となっていて、雨と土の肥沃と関連しており、また大陽の男神として崇拜された。

一方アシタロテは最高の月の女神である。またバールは木星(ジュピター)で、アシタロテを金星(ビーナス)とする人もいる。バールにまつわる神話によれば、イスラエルの北方何処かに実在した人であり、英雄的であったが、罪深い働きもしていた。バールは死の神のモトに殺されるが、後に生き返ったとも伝えられる。いわばこの人を偶像として崇められ神となった。

二つの神の共通点は、淫らな乱飲乱舞の酒宴をはったとして、後に何れも偽りの神として人々から否定されてしまつた点にあるのだが・・・。

イスラエル十支族の一部は、シルクロードを北ルート(草原ルート)、南ルート(夫々陸路を辿り、途中のキルギス、アフガニス

タン、パキスタン、カシミール、ミャンマー(ビルマ)、中国に、或いは海路をとつてインドに直接出てそこで定着した。一部は更に東方の国、日本にまで行ったと考えられる。何故なら古代イスラエルには、こうしたバール神信仰があり、「東方憧憬」「日出る地への憧憬」があったからである。

旧約聖書のエゼキエル書に神殿国家構想(B C 592~539)がある。祭司にして預言者のエゼキエルによる、第一十一章は「嘆きと悲しみの巻物」であるが、更に第八十一章では、あらゆる偶像礼拝、特に大陽神崇拜の恐ろしさを指摘している。逆に言えば偶像礼拝を禁じたユダヤ教・イスラム経・キリスト経でも人々の欲求に抗することができずに聖書で警告したものと思われる。

主の宮の本堂の入口の玄関と祭壇の間に二十五人ばかりの人がおり、彼等は主の宮の本堂に背を向け、顔を東にむけて向けて、東の方の太陽を拜んでいた(第八章16節)。

イスラエル十支族の末裔が、流れてインドカシミール地域に定住し、そこで彼等は部族の日常の健康法のヨーガを開発し習得した。当然偶像としての、大陽神崇拜の思想がヨーガに盛込まれた。

後年ヒマラヤ前哨戦、インドの山々の単独登山を自指した一人の登山家が、死神に魅入られたが上腕を凍傷で切断して生還した。ソロクライマーとしての挫折感、自信を失い掛けた矢先に、現地でヨーガに興味を抱いた。登山家の梅沢紀夫は窮地を脱し、救われるのである。カシミールのバルヴァーティ女神を祀る寺院で、

子羊を蛮力で屠り生血を捧げて生贄とする儀式、マントラを唱えて祈る多くの群衆を目撃した。

ヒンドウウーの神々の像は、どきつい赤や青の顔料で染められ、リングと呼ばれる男根の石像、寺院の柱の絵は日本の浮世絵以上の露骨さで性器露に男女像がまぐわい、歡喜の表情を浮かべている。その中を梅沢紀夫は失意の内に独り彷徨っていた。出遭ったのがインドヨーガであった。ヨーガ行者のゴピー・クルシユナの弟子の見事な演技であった。

その行者は洞窟に暮らしていて、然も片足が無かったのである。最初習ったのは、朝の大陽に向う礼拝とプラナーヤマ(呼吸法)だけだった。幾つかの基本アーサナ(ポーズ)を教えられたのは、一週間後の事だった。

インドヨーガでは、プラナーヤマが第一で、アーサナは第二とされており、両方をマスターすれば、自ずと人は誰でも神、創造者から平等な靈力を身に付けることができることとされていた。だから梅沢紀夫の身体から醸し出される靈感はこの行者の演技から習得したものである。

田口泰雄は、電話で創業社長永井剛一郎の何時に無く弱気の頼みを聞いた。それは手に余る自分の「ひきこもり」の長男のことだった。(ヨーガを修行をしたがっているもので、梅本紀夫に合せて欲しい)と言つものだった。

ヨーガは、インドで五千年前に発祥し、元々肉体と精神を鍛錬して、瞑想による心の開放、心身の浄化を目指しているものだといつ。

永井剛一郎のひきこもりだった長男剛志が、槍ヶ岳登山の後、田口泰雄の紹介で、インドヨーガ習得のため登山家梅沢紀夫に再会するのは、東京のあるスポーツジムのスタジオであった。

永井剛志は神妙な顔で控えていた。

出遭った梅沢紀夫が、開口一番息子永井剛志に投げた言葉は、場所が違ってはいたが父親永井剛一朗への言葉と同じだった。

「ヨーガに何故興味を持ったのですか？」

動機は至極単純で、梅沢紀夫に憧れたからである。ヨーガのアーサナ(ポーズ)に共感したのである。本能的なもので説明できない。

息子剛志は、田口泰雄の顔と、梅沢紀夫の顔を交互に見比べ考えた末に答えた。

「梅沢さんは何故山に登るのですか？」

梅沢紀夫の返事は何時も決まっていた。

「イギリスの登山家マロリーが『何故山に登るか?』と問われ『そこに山があるから』と答えたという有名な話がある。」

『答えが無い』というのが本当のところであろう。だが敢えて『身裡を吹き抜ける風を感じに行く』と答えた。

永井剛志も田口泰雄も、その答えを何となく分かる気がした。恐らく山頂にも答えがないのである。誰でも自分の裡に狂おしい心のトンネルがポツカリ開いていて、そこを山の霊気が吹き抜けると快感を感じる。高い山であれば、あるほど吹き抜ける風が異なる。別に山頂に立った時、天上の神の啓示が聞えてくる訳でもない。妙なる天上の音楽が鳴り響き、しずしずと答えが降りてくる訳でもない。梅沢紀夫の用意された言葉は正に至言だと二人は思った。

「君は今迄何か運動をやっていましたか？」

「いいえこれといって得意なスポーツはありません。唯、ヨーガをやってみたいのです。本気で・・・」

田口泰雄も口を挟もうとしたが、黙っていた。

「そうですね・・・でも結構つらいですよ」

「やれると思います」

「でもこれだけは約束して欲しい。私は君のお父さんを尊敬している。君は知らないかもしれないが・・・山登りを通じて同道したこともある。君は高校を・・・」

「おやじ、尊敬? 親父の生き方はしょぼい! 祖父ちゃんもかったるいが・・・まだ親父よりは数段かっこよかった」

「君自身はしょぼく無いのか? かつたるく無いのか?」

「・・・」

「上高地の宿で、お父さんにはヨーガのデモをみせた。槍ヶ岳に登った後に、君が見た時と同じだ。やはり飲み込みが早かった・・・」

「・・・」

「だが君の場合は違う、ひ弱に見える。先ず高校を絶対に中退しないと約束できるか?」

「約束する!」

「結構きついが、投げ出さないと約束できるか? しょぼくない修行ができるか?」

「できる!」

息子永井剛志は、必死で梅沢紀夫の目を見詰めて、そう答えるのが精一杯だった。

田口泰雄は、剛志のぶつけるような、怒り半ばで全身をぶつけるような反発、その返事の言葉を聞いて(やはり親子だ、血は争えない、何処となく似ている)と思った。

田口泰雄は、二人の会話で逆に、研究所での元上司、長岡オリジナル工業元社長の永井剛一朗に叱責された時のことを思い起していた。

最初、登山家梅沢紀夫と、息子永井剛志のそ

の後の関係は、週末土日の東京でのヨーガ師弟という関係だけだった。高校在学中の修行は、剛志が泊り掛けで長岡から上京し、日曜日に長岡に帰るといふ繰り返しの約一年間だった。

その状態が高校卒業まで続いた。卒業後は、東京にヨーガ修行のため、剛志は態々阿佐ヶ谷に下宿までした。後日、永井家の主永井剛一朗の東京研究所転勤により、一家が東京阿佐ヶ谷の住人になってからは、自宅から息子剛志は梅沢紀夫の所属するジムに通ったのである。いわば、息子剛志のヨーガ修行の利便性のために東京阿佐ヶ谷に居を構えたとも言える。

剛志が修行の合間に時折見せる、霊能的な言動や雰囲気は逆に、すっかり師匠の梅沢紀夫を虜にした。その段階になると当初の梅沢紀夫の懸念は、すっかり吹っ飛んでしまった。本人が頗る熱心だっただけでなく、日本人が正に処を得てインド人に変身したかのように見えた。

それは、基本の大陽礼拝のアーサナ(ポーズ)の時に顕著だった。東京での五年の修行で、ヨーガイストラクター、ヨーガセラピストの資格を本場のインドのアシラム(道場)で取得することを頭に描くようになった。

一見師匠の梅沢紀夫よりひ弱だった筋肉が張ってきて、肌の色さえ浅黒く、髪を生やせば、直ぐにでも梅沢紀夫がインド時代に修行した、カシミールのパールヴァーティの女神を祀る寺院、あの洞窟に暮らす片足の行者のような風貌に見えていたからである。

やがて、東京のスपोर्टジムのスタジオで、隻腕の梅沢紀夫と永井剛志の二人が上半身裸で並び、パンツの下に黒いランゴット(鞆丸を覆う小さな布着れ)をしっかり絞め、パドアーサ

ナ(連のポーズの姿勢で瞑想したり、様々なアーサナ(ポーズ)を取り始めると、人だかりができるようになった。それが、ジムでの人気デモ演技に変わっていったのは程なくのことであった。

梅沢紀夫は、自分がインドで修行した時の話を、弟子の剛志に語るようになっていた。肉体の死を克服するのは不可能である。が死を靈的にみて「肉体からの離脱」と見做している。聖者(グル)の靈力が非常に強いので、目を瞑れば死後の聖者に何時でも会えるし、話もできるという。この話は、梅沢紀夫は流石に信じられなかったが、洞窟の行者の瞑想した心の眼に確かに聖者が光の中に見えるようだったと・・・。

ヒンドウウー教の聖地、アシュラム(道場)が数多くあり、インド・ハタヨーガのメッカ、世界中から本格的な修験者(ヨギー)の集まる場所でもある、リシケシュの町を、剛志にぜひ一度訪問してみることを薦めたりしていたのである。その後の息子剛志のヨーガ修行の様子は、梅沢紀夫から妻の永井真琴へ、田口泰雄から上司の永井剛一郎の下へ、夫々別に電話で報告がなされた。何れも「直接本人の息子さんからは、お聞きになっておられないでしょうから・・・」という前置きが、二人の共通した電話での挨拶だったという。田口泰雄は、これで自分の役割は終わったと感じていた。

フープ鳥の賛美歌七

真琴は、いよいよ自分の心の旅が最終到達地に近付いたのを感じていた。息子剛志が、催眠療法の部屋で見せた奇妙な幻想、父親の永井剛一郎から遡って、祖父、曾祖父・・・

か古代の先祖が秘めていた、得体の知れぬ靈力を垣間見る瞬間が近付いたのだと、その期待に胸膨らませていた。そうでなくては、心の旅を折角始めた意味がない。この古代の歴史書を、苦勞して紐解いた努力が無駄になる。そして、夫永井剛一郎の魂が、秩父山塊のどの辺りを彷徨って、剛志の言ったように、どの森の中で瞑想していたのか？

「それは良い歌かね？」
「貴方様が喜ぶような歌です」
「ゴシヤムは弦の調子を整え、乱暴な音を奏でてから、王が好むような強い響く音を立てた。おう、我等のうち、誰がヤハウエを語れる？
誰が、彼の不思議な道を知っている？
彼は、私が夜探す子羊の中にいる、
ロー、彼は荒々しい雄牛の足踏みの中にいる

(頁75中段後から18行より続く)

「王様ですよ」

ケリスは囁き、ゴシヤムを揺すった。

ゴシヤムは見上げて、何時ものように子供達が訪ねて来たかと思つた。彼は王がリラを持つ上げ、撥子釘が弾んでいる七弦を弾こうとしているのを見た。ゴシヤムは髪を後に撫で付け、汚れた服を整えてから、立ち上がって言った。

「良いリラですよ」

「お前は上手な歌手と聞いてきた」

王は若者に楽器を渡して待った。

楽器を受取ってから、ゴシヤムは手を伸ばしてワインを一口含み、口を漱いでから通りに吐き捨てた。彼が壊れた椅子を勧めたので、アビシヤが王を座らせた。しかし、男はケリスや王の美しい従者には何の注意も払わなかった。彼は未だ梳かれない羊毛の塊の上に座り、暫く身を整えてから弦を調律した。戸外の小道を通る人々に、総督が静かにするように促したので、静かな刻が流れた。誰も声を立てないので、気を使うほどであった。ケリスが静かに言った。

「子羊と雄牛を歌って」

彼は大きく叫んだ。最初の慕う叫び声から夜の場面の単純さに、雄牛の激しい動きに変化させず歌い方は王を喜ばせた。王は一人椅子に座り、若い男の芸術的技量に聞き惚れていた。
一時間以上の歌を聞いた後で、王は自らリラを取上げると爪弾き始めたが、歌おうとはしなかった。王の眼に涙が溢れ、王は暫くリラと共に座っていた。アビシヤに促されると、王はまるで柔順な子供のように付いて行った。

「さあ、引き揚げましょう」

その夜、総督の家で歌の会が開かれた。ゴシヤムがこのような威厳ある中に招かれたのは初めてであった。次の日も、王は重ねてこの若者が王のために歌うよう求めた。ダビデ王も自らリラを取上げる用意がなされた。王がイスラエルの歌手として愛された頃作曲したヤハウエに捧げた輝ける作品を幾つか王自ら歌った。二人の賛美歌作者は長い間一緒に歌った。四日目、まだ王は四角い竪穴の入口しか見ていず、トンネルは見えないのにこの歌う会を次のように言って締め括った。

「エルサレムに帰る時は、この若者は私に付いてきて良い」

王はゴーシャムを、自分の息子の様に抱いた。ダビデ王がこの命令を下した時、ケリスは傍らにいた。その言葉は、彼女にとっても最高の力であった。王の訪問は一連のハンマーの打撃であった。それは、六年に渡る高度に抽象的な混乱の果てにやって来た。ケリスは夫の屈辱を見た。ダビデ王のような男が、夫をトンネル掘りと見下しているのを見た。彼女はまた、ゴーシャムを首都に連れて行く価値のある才能と選んだダビデ王の明快な判断を見た。それほど、ダビデ王は、エルサレムの抽象的な知恵を、マコールの実用的価値に対抗させている。そうとは知らず、王は彼女の仮の結論が正しいと証明しようとしているが如く行動したのである。アムラム将軍の出発後の暫くの間、ヤバルとメシャブが自分の関心をエルサレム以外に反らそうとしたので、彼女はそのままにさせていた。彼女は自分の結論に疑いを抱き始めていた。しかし、今やダビデ王とゴーシャムが自分の結論を補強した。彼女は再び、遙かな昔に正しいと結論付けた事の実行を躊躇しないであろう。ダビデの都市に、自分を導くであろう決定的な歩みを進める用意が出来たからである。

歌が終り、彼女は大胆にもゴーシャムと彼のあばら家に行つて入口で静かに言った。

「貴方が王とエルサレムに行く時、私も一緒にいきます」

彼はリラを羊毛の塊に投げるところであった。自分の腕のリズムが止むのも気に成らなかつた。

「私も貴女についてきて欲しい」

彼は彼女を見ずに言った。

「今夜、私はここに泊まりたい」

彼女はそう言ったが、二人は抱擁を避けてそのまま別れた。ケリスは、フープに何と話そうかと思案しながらゆっくり家に帰った。彼女は余り

役に立たなかつた豎穴の傍らに家に入って、簡単に言った。

「私はエルサレムに行く積りです。ゴーシャムと一緒に。私は残りの人生を彼と暮らします」

彼女がこの言葉を述べた時、小太りの夫は本当にフープ鳥のようだった。首をあちこちに動かし、あたかもその愚かな、愛すべき、可笑しな頭を隠す穴を探している鳥のようであった。

「行つてはならない！」

彼は嘆願し、彼女が身支度のため身の回りの品を取上げる部屋に着いて来た。幾度も熱情的な夜を過ごした部屋だった。

「行くならガラスの網を持って行きなさい」

しかし、彼女はそれを残した。何故ならそれは安っぽいフェニキアの品だからと言つて、彼を傷つけたくなかつたからだ。だが、ペルシャの銀を嵌めた琥珀の塊は持つて行った。

彼女の本来の計画を欺いた大きな豎穴の戸口で、彼女は熱情的な小柄の男にさよならを言った。彼震える声で、どうしてこんな悪いことになったのだと問うと、彼女は別れ際にこういつて去つた。

「貴方はマコールの古い神々と一緒にいて下さい、でも私はそれが嫌なのです」

妻の残した一人の子と、王の欲しくなかつたト

ンネルと、フープは相談できる唯一の友を訪ねた。灰色の薄明かりの中で、彼は後門に行つた。メシャブは見えみえの城壁の跡を隠すための塔を仕上げていた。彼は当惑して、このモアブ人にケリスに訳を話してくれるように頼んだが、塔からはなれようとはしなかつた。

「私はダビデ王が出て行くまで隠れていなければならない」

と言つて状況を説明した。

「それはどうして？」

「ダビデ王が我が民を非常に嫌っているからだ」

「だが、ダビデ王はモアブの血を引いている」

フープは混乱する頭で異議を唱えた。

メシャブはケリスを放つておけないと悟り、これからどうなるかを知つていたが、タオルを揚げ、手を洗い、ケリスと話すことに同意した。

二人が城壁を離れると、ダビデ王の蔭の一人が、モアブ人を見付け、通りを叫びながら追つてきた。最初、メシャブは城壁に戻るうとしたが、ギラリと光る槍の矛先がその道を塞いだ。そこで、予ねてから囲まれた時の為に用意していた通りに行動した。メシャブは豎穴を通り過ぎると、後門から寺院に通じる道を経て、寺院の避難所の聖壇に身を投げて、石の角を握つた。

フープが避難所に居る彼に追い付く間もなく、兵士達が入口に現われ、このモアブ人が何をしているかを見て、後に引き下がった。間もなく老いたダビデ王が、アビシヤを伴わず独りで、怒りで顔を蒼白にしながら聖壇に歩み寄つた。

「お前は、私がモアブで命を助けたあの時のメシャブか？」

「そのとおりだ、今貴方の助命を求めている」

「お前はエレバシユ、アムラムの兄弟を殺さなかつたか？」

「戦闘で、その通りだ」

「しかも、ヤハウエの寺院を壊したな？」

「包囲された時、攻撃で・・・その通りだ」

「お前には避難所はない」

「私は王が定めた避難所を主張する」

「私は断固拒否する！・・・私はお前を一度救つた。なのに、お前は私に逆らつて戦つた。警備兵！捕えろ！」

「ダビデ王は怒鳴つた。」

驚くような戦いが寺院の静寂を破つた。メシャブは生きて捕えられる意思は無かつたので、闘争

が一層激しくなった。フープは友を救うために飛込むと、王に向った叫んだ。

「彼は自由民だ、避難所を求められる」

「彼はヤハウエを否定した！」

ダビデ王は半ば狂ったように叫んだ。王にけしかけられて、警備兵がフープを殴り倒した。しかし床に倒れながらも再度叫んだ。

「ダビデ！自分の避難所を冒涇するな！」

一人に警備兵が彼の口を蹴った。昏倒し口から血が出て息が詰った。警備兵達は今やモアブ人に集中した。彼は強い力で自分を守ったので、十人がかりで彼を聖壇から引き離れた。聖壇が床に壊れて二つに割れた。ダビデ王は一層怒った。殺意と憎悪を抱いて叫んでいた。

「彼を殺せ！」

七人が槍を構えて元奴隷の前に来た。メシャブの力強い腕がその矛先を自分の胸に当てた。火打ち石の鎌がかつて妻を集めたように、彼は王の前に倒れた。そこで彼は槍で何度も突かれたので、彼の血が寺院の床に流れ、フープの横たわっている処まで来た。一人の僧侶が、恐怖のあまり歌った。

「ヤハウエは復讐された。かくヤハウエに反する者は討たれた。」

ようやく、若い娘アビシヤが王が血に汚れた寺院にいるのを見付け、手を取って寝台に連れて行った。王は自分がやった復讐心で燃えた事件を反省した。王は顔を拳で叩き、今迄の人生に傷を残した突然の激情に駆られた今の事を悔やんだ。心から聖壇にしがみ付いた自由民モアブ人の姿を思い浮かべ、避難所を求めた声が自分の心から消し去れないと分かった。あの処刑は衝動的で、醜い激情であったと・既に王は後悔の念に付き纏われていた。後悔が深まる中、王は若いリラ弾きを呼

んだ。その慰めが必要だった。使者が羊毛店の後の小さな家に行った。そこには、ゴーシャムだけでなく、ケリスも居た。彼女は、夫の家から持って来た小さな衣類の包に屈んでいた。使者がゴーシャムに王を慰めるために楽器を持って来るように告げると、この賛美歌作者は言った。

「私はケリスを連れて行く、此処に残しては行けない」

彼が王に仕えるため町を通ると、ケリスは黄色の上着を着て、琥珀のお守りをつけて後に従った。二人はダビデ王が、総督の家の片隅に縮こまっているのを見た。アビシヤが傍らにいて、王の左手を握っている。王は後悔で蒼褪めていた。亡霊に苦しめられる老人・時間も経っていない亡霊。

「私は私自身の法を破った」王は呟いた。

王はもつと告白したかったであろう。しかし、ゴーシャムは戸口の椅子に腰掛け、ケリスがその足元の床に座ると、ゴーシャムが自分の歌を幾つか歌い始めた。王が既に聞いている歌だけにした。七弦のリラを弾き、それから風のように音を出し、春の野に子羊が動く、年老いた王は心の痛みを忘れて、寝ているかのように目を閉じた。王の孤独の思いが、アビシヤの手を握り締めさせ、本当は目覚めていて、若い歌手の言葉を切望して聞き入っていることを物語っていた。

ゴーシャムが、王の知っている歌を再現した後、何故だか後になってみても、自分でもその理由が説明不能なのだが、数年前に山に居たところ作曲した歌を唄う気になった。その頃、彼は理想の王は何をするだろうかと考えながら彷徨っていた。

ヤハウエに喜べ、お前ら正義の人達よ

何となれば、賞賛で立ちあがり

ヤハウエに感謝しリラを捧げよ

十弦の*プサルテリウムで賛美を歌え
彼に新しい歌を唄え
歓喜の叫びで巧みに弾け

ヤハウエの言葉は公正である。

彼の仕事は忠実に行なわれる

しかも、彼は廉直と正義を愛する。

この詩の最後の三行は、理想の王の姿を現した序に過ぎない。彼等は、右腕で音楽を止めるよう指示した王の活力に驚いていた。王は立上り、目を閉じたまま手探りで、二、三步部屋を横切り、それから床に崩れ、膝き、肘を付き、その姿勢で数回頭を床に叩き付けたので、アビシヤが止めさせ、目を開けさせると椅子に戻らせた。

*脚注

プサルテリウム：指またはばちで鳴らす古代の弦楽器の一種

「私はヤハウエを欺いた・私の人生全てでヤハウエの非難する事をやってきた。誰の手であるのモアブ人を殺したのか、私じゃないか？」
この老人は泣いていた。王は神聖冒涇の記憶に震えて、嘆願した。

「あのモアブ人のことを話してくれ」

そこで、ケリスは未だ床に座っていたが語った。「彼は正しい人でした。暗闇の中で貴方の町を救うダビデトンネルを掘りました。私の夫が不在の時に私を守ってくれたのは、このモアブ人でした。奴隷から解放されて自由民となった時、彼は残って一緒に王のトンネルを仕上げたのです。メシャブは私の残りの人生において、涙と共に想い出の男の人です」
この飾り気の無い言葉こそ、ダビデ王が聞きた

がった言葉であった。勇敢な兵士であり良き男への賛辞。「私の右手に座れ」王は、自分の右にケリスを座らせて聞いた。その場所は、歴代王が臨終の時に座らせる位置であった。

「あのモアブ人は勇敢な戦闘員だった。私は彼を殺した。彼は自分の神の逞しい擁護者であった。それを私が殺させた。今日はどうしたる良いだるか？」

この白髪頭の老人は、自分を守る二人の女の間で前後にその身を揺すった。アビシヤに向って「楽器を取ってくれ」と言った。しかし、遙かな昔、サウル王の前で演奏した楽器を手にした時、王はゴーシヤムが弾いたような通常の弾き方をしなかった。疲れた手で乱暴に、メロディもなく、韻も踏まずに、意味も無く弦をかき鳴らした。

その音楽は、他人に聞えぬ形式となり、自分で随分昔に作り、晩年になってからもしばしば思い出す賛美歌であった。

おー、ヤハウエ、

怒って私を非難しないで下さい

憤怒して私を打ち懲らしめないで下さい。

私に許しを、私は弱い者ゆえに

私を癒して下さい、私の骨が震えています。

私は大変震えています。

しかし、貴方は、おー、ヤハウエ、

何時までお待ちしたらよいのでしょうか？

戻って下さい、おー、ヤハウエ、

私をお救い下さい

貴方の信頼に沿うこの私をお救い下さい

もし私が死んだら、貴方に歌えませぬ

墓に居る者が貴方に賛辞を贈れましようか？

私は苦しみに疲れています。

王は、その激動の人生を通じてしばしば経験した苦悶に触れながら、人間の弱さについて嘆き続けた。そしてこの部屋の四人、ヤハウエと交流するに不相応な四人・姦通と殺戮の双方を犯した白髪の王、皮肉にも老人の慰み者となり、老人の最後の寝室の友とされた美しい娘、イスラエル中で本当に良い一人の男を裏切った忠実だった妻、それに罪が解明されていない他国者・・・この夜のヤハウエを求める四人は、今犯す嘆きに叫びをあげる、未来の世代を代表する者達であった。

ダビデ王が継承したユダヤ教は、しばしば冷たい宗教で、厳格で近付き難くさえあった。しかし、ユダヤ教は、ダビデが今叫び、ゴーシヤムが丘で叫んだような人間の情熱の発露によって維持された。遠く隔たった処に、ヤハウエが居る。ここ白い部屋の現実には、人に割り当られた七十年の齢、終局を迎える一人の人間の心がある。そして、この二人に人間には、歌で表現された情熱の会話があった。

毎夜、私は寢床につかる

私は長椅子を涙で濡らす

我が目は嘆きのためにかすれ・・・

おー、悪人ども、私より去れ、

ヤハウエが

私の泣声をお聞きになっているから

このように、ダビデは詠嘆した。

この夜聞いた者は、復讐心に燃えた老王の失意を感じた。厳格な法と同じように、王の叫びはユダヤ教の一部になるであろう。

ケリスは、最早フープーとは会わなかった。

彼女はその夜、羊毛商人の小屋で過ごした。朝、王の行進が一端南のメギドの方角に行き、それからエルサレムに向った時、こつた返す中に彼女は隠れて、自分が行きたいと切望した都市へ行進した。

奪略者だったゴーシヤムの変身振りは、驚くほどであった。彼はエルサレムで王の音楽保存者となり、書記達を指導して、王によって書かれた詩を粘土板に収集した。その編纂の中には、ゴーシヤム自身の詩は一編も無かった。

時を経て、ユダヤ教の典礼書となった。それは、スコットランドの長老教会で、素朴な節で歌われ、オーストラリアの賛美歌となり、南アフリカの教会音楽となった。それは、様々な地域で様々な音律で歌われた。言葉が理解される処であれば何処でも・・・それは、神を求める人間の本心からの叫びと分かるからであった。

ゴーシヤムは歌人であり、言葉を形にできる詩人である。彼の言葉は未来永劫に残るであろう。フープーは別の変身を遂げた。

ダビデ王が、トンネルを無視してエルサレム出發した朝、落胆したこの技術者は、周辺から来た農民や、染槽の黄色に汚れたフェニキヤ人のように城壁に登った。そこで、偉大な王に別れを叫ぶ群衆と一緒に立った。フープーは、ケリスが何処に居るかを探したが無駄であった。彼女は身を隠していたのである。王も見えなかったし、アビシヤも、ゴーシヤムも見えなかった。この四人は、彼の生活から幽霊のように消え去った。この幽霊達は、風の強い夜やってきて彼を怖がらせ、夜明けと共に去って行った。

暫くは、フープーには彼等がやってきたことも、また去って行ったことも信じられなかった。総督は、あのモアブ人が殺された折に、王を罵倒したのを覚えていて、以後はこの小柄な男と話さなかつ

た。奴隷達はエルサレムに返され、重要な話は彼の耳に入らなかつた。町の人は彼の妻がゴーシャムと逃げた話を詳しく語り、物語に仕上げ、これに以前のアムラム將軍との不倫を追加した。そこで、今迄マコールに住んだ女性の中で最も矛盾した女性の一人は、単なるふしだらな女に成り下がり、時々フープーの耳にさえ酒店で男達が彼女を歌うのが入ってきた。

「何もわかちやいない」心に内で呟いた。

豎穴の側の家に、彼は一人の子供と残され、子供達は必然的にウーの家系を保持する運命にあった。

しかし、子供達は女達が登ったり降りたりして、毎年毎年町に隠された井戸から旨い水をもたらしてくれる。豎穴に何の興味も示さなかつた。フープーの生涯で、全てはこの天才技術者に負っていたのだが、マコールの防衛が試されることはなかつた。だから町の人々は、彼の輝かしい業績を理解出来なかつた。彼等は、井戸も城壁も当然のことと受け取り始めた。そして、フープーが年を取るに従い、彼等は町中のあちこちの穴に頭を突っ込み何も探せない奇妙な小柄の男としか思わなくなつた。

「フープー程ひつたりとした名前の男はいない」皆は笑つた。年を取れば取るほど、哀れを誘つように見えた。妻も、仕事も、友もいないまるぼちゃの小柄な男。ソロモンが王となり、エルサレムで建設が盛んとなり、船がアッコとティレを往復し始め、フープーは、自分が間も無くこの王のために役立つべく首都に呼ばれるだろうとの想いを抱いたが、この美しい都市で無名で、呼ばれもしなかつた。

老人となつて暫く何処か見えなくなると、自分の子供達でさえ、彼が死んだと疑い、多分そう望みもした。独りで考えた完璧な技術作品の粹、彼の掘つたトンネルの奥深くにいた。彼は、鎚と鑿と小さな木の足場を持ち込み、その足

場で数日間天井の仕事をした。下を通る若い女達が、彼に少しの食料をもつてきてくれて、彼の仕事を推測した。

「天井が落ちるの？」

「鼠が地面から穴を掘ってきたのかしら・・・」
「ダビデトンネルを掘つた張本人とも知らず、彼女等ははからかつた。フープーは、何も言わずに唯掘り続けた。足場に毛布を置き、破片が行つたり来たりして、煩い女達の頭上に落ちないようにした。とつとつその仕事を終えると、この美しいトンネルを歩いた。

それが最後の歩みとなつた。

井戸では立派な十字に交差した岩の層が、もう天井の一部と化して、どんな侵入おも許さないで天井を守っている・・・三千年の間、上古の深い洞窟は閉ざされ隠されている。泉そのものは冷たく、甘く、たつぷりと人々が欲しい量を供給している。そして清潔な立派なトンネルは、豎穴の底まで定められた傾斜で登っている。豎穴からは二つの可愛らしい、螺旋の対の階段が太陽の光に向つて伸びて行く。彼は最後となつた豎穴を登り、後門を通り墓地に向つた。そこに数年前、彼はそこにモアブ人を埋葬した。誰にも触れてもらいたくなかつた。彼は墓に跪き、互いに仕事を分担し合った良き友情の日々を想い起した。多分彼の唯一の想い出であらう。

丁度、季節は春だつた。彼はパールの神に住む山に登る気になつた。懐かしい神と一緒に居たかつたのである。しかし、険しい道だ。彼がメシャブの墓から立ち上がった時、突然、眩暈がした。彼は死が近づいたと感じ、再び座り直した。

「全能の神、ヤハウェ、・・・私を命の終りの日に受取つて下さい。」

彼は祈りながら死んだ。

賛美歌人、ゴーシャム、彼の言葉は世界の果てまでこたました。建設者、フープー、彼の偉大な四角の豎

穴は結局はがらくたで埋まり、彼のトンネルは忘れられた。詩人は、人の生活に無頓着であるが、ヤハウェの本当に顔を覗き、唯一の神に帰依した。しかしこの建設者は、以前から土に住むパールの神と、見えざる神格として受入れたヤハウェとの間に嵌つていた。何人と言えど、二つの神の間を行き来できない。もし、そうすれば己はゆっくりと蝕まれていく。

死の日の午後、フープーはこうして事実を認めた。ダビデ王やゴーシャム、愛するケリスを正しく理解したかつたが、彼には出来なかつた。彼は神々の罠に嵌つた無用な人物として死んで行つた。

しかし、一九六四年の秋、ブルの月・・・雨雲が躊躇いがちに始めてカルメル山の頂上に姿を現し、農民達が冬支度の薪を集める月・・・偉大なウーの子孫が長く忘れられていたトンネルに躓き、間もなく世界中に知られようになつた注目すべき写真と一緒に発掘された。技術者達は建設史上の傑作と絶賛した。『最初の偉大な測量上の功績』この無名のマコールの技術者が世に送つた時代を超えるメッセージに関して、科学が分かる時代になり、色々と書き記された。

或るフランスの哲学者は、マコールの水道システムが無言の天才は、賛美歌を書いた者よりもいつそう、現代人に説得力を持つて語り掛ける、この天才は仕事の中に神の精神の一部を体現したものである、即ち、何時も言葉と同様に行為を賞賛する神の精神である、彼のトンネルは実際、賛美歌、神の仕事成遂げた者の歌であると述べた。

それからある日、アメリカの考古学者、ジョン・キヨリネンがマコール廃丘の真実の賛歌を発見するであろう。そのトンネルの夫々の部分は、それまでに専門家達によつて探査されていたであろう。そして無名の建設屋の工事のやり方を解明したのである。この天才技術者が、岩を二つの小さい試

掘トンネルで貫いて、何処か真ん中で連結し、そこから拵げて誤差を修正したと判定するだろう。だが彼等もどのようにして進度を方向を確保したかは推測できなかつたであろう。というのは、年と苔が天井を浸し、其処にあった彫刻が長らく見過ごされていたからである。

ある日、キュリネンは安っぽい懐中電灯を照らしてこのトンネルを歩いたのである。考古学者のきよるきよるした目が、岩の上の何かを発見するであろう。キュリネンは梯子を用意して、その湿った天井を調べるであろう。そして助手達を呼ぶ。赤外線写真で、炭酸カルシウムの粉と駱駝の毛のブラシで、考古学者達は刻字された献呈を明らかにするであろう。それは様々な理由を付けた奨学金の理由となり、初期のヘブライ語の資料、確実な年代の基準となるに違いない。それは、過去から問題と格闘した、本当の人間の姿を呼び起こすに違いないのだ。

あの賛辞を呈したフランスの哲学者が、この刻字された献呈に題名を付けるであろう……。

『トンネル建設者の賛美歌』その題名で、この献呈はその時代を要約することになるに違いない。

△マコールのヤバールがこのダビデトンネルを造った。六本の旗を使い秘密を見付けた。白い紐を使って大地を探った。アッコからの鉄を使い岩を切った。しかし、モアブ人メシャブの助けなしには何もできなかった。ヤバールは井戸から進み迷った。メシャブは堅穴から進み正しかった。メシャブはその兄弟のダビデ王から切られ、今はいない。天からヤハウエエの神の啓示があり、土からはバールの神のご加護があった。

我等を支えた神々を誉め称えよ。v

層12 フープー鳥の賛美歌 終り

真琴は可笑しな気持ちに襲われていた。何故なら、読み終えたら紀元前のユダヤの時代に、熟年離婚と不倫があつたのだという認識だつたからである。この事実と思わず笑つてしまつた。古代の夫婦の絆の最終場面での脆さは、現代の妻から見放される中高年の悲劇を物語つていたからだ。現世の男社会の可笑しな兆候は、この古代から既にあつた。かつて妻は献身的に尽くす安らぎの場所を夫に与えてくれる、やがて帰るべき故郷だつた時代があつた。若い

豎琴弾き歌手のゴーシャムと連れ立って、ダビデ王の一行を追い、エルサレムを目指す男女。社会的にも評価されず、唯々々と地下トンネルを掘つた男、夫フープーから逃げ出したケリスの気持ちは、二十一世紀に通じる熟年女性の共通の気持ちだつたからである。

真琴には理解できた。妻ケリスの気持ちに頓着せず、水道システムの「成功のこだわり」を持つ自己実現の鬼、一生懸命トンネルを掘るフープーの姿、晩年は誰にも評価されず、期待もされず人々から忘れ去られた存在のフープーの姿、それは正しく研究所一筋で、晩年名ばかりの顧問職として生きた夫永井剛一郎の姿であつたからに他ならない。

現代と宗教的な伏線の有無の違いは有るものの、最愛の友メシャブをダビデ王に殺された、最悪の男、妻ケリス不在下で、仕事の支柱を失つた時に見る間に醜く心弱つて、脆く崩れるよう古代の洞窟の献呈の刻印として名のみ残した「く」なつて行くフープーの哀れさを……

この古代の歴史書の謎は、一体何を真琴に教えたのか？妻の存在の無い男性は早死にするのか？この心の旅で得たものは、熟年離婚のパロディや生物学的な雄の儂さだつたのか？いいや、そうではあるまい。

長い真琴の心の旅の向こうに見えたもの、そして夫永井剛一郎が迷つて抜け出られなかつたもの、それは、薄暗い闇を透かせば、仄か前方に光がぼんやりと見えるばかりと開いた、心のトンネルだつたのではあるまいか。

心のトンネル

妻の真琴は、平成七年二月に亡くなつた夫永井剛一郎の一年後の十二回忌を前にして、残された亡夫の遺品類を再度整理していた。

全ての遺品を、今後自宅に保存する積りは無かつた。遺品類は三つあつた。

愛用の国産自動巻き腕時計、モンブランの万年筆、東京研究所時代の資料や名刺のファイル、自宅書斎の棚の研究に拘る自分史や写真アルバム類、葬儀直後に何処の誰が送付したのか不明の古代の歴史書であつた。

国産の機械式自動巻き腕時計は、古い型で葬儀の後引き出しに入れつ放しだつたので、秒針の刻む音を止め暫く死んでいた。息子に見付けられ、今夫の心臓の鼓動さながら、自動巻き時計のセコンドが、息子剛志の腕で甦っている。

真琴はこの機械式の時計に愛着があつた。

薄給当時では、オメガやロレックスの機械式自動巻き腕時計を購入する身分でもないのに、夫永井剛一郎は、技術者らしく痛く拘り、高級ブランドの自動巻きを欲しがつていた。

「機械式腕時計は、持ち主が死ねば振子が巻かれなくなつて一緒に命を終える。機械式の自動巻き時計には、男のロマンを感じる。機械というより生命そのもので芸術品だ」

結婚後間もなく、夫の機械式腕時計への拘りを知った真琴が、国産品を銀座で見つけて夫にプレゼントしたものだ。絶えず夫が、その時計を嵌めてくれていた事もあるが、熊谷市の時計屋主人のコメントを記憶していた。

「ほー、珍しく巻表示付自動巻きですな！今はボタン電池を使った電子式コース時計より、古い機械式自動巻き時計やクロナグラフがシニヤの間で人気で、国内外に収集家が居る位です。ロレックスでは七十年前自動巻きが開発されましたが、国産品は遅れること二十数年、セイコー社が昭和三十年に、このモデルの業界初の巻表示付(インジケータ)を開発したので、ですからこれは国産品では特に逸品です。修理して収集家に見せたら、きっと高価に取引されるかもしれませんよ」

真琴は、時計屋主人の進めで価値を認識、分解修理を依頼したことがあったからである。モンブランの万年筆は、身に付けていたタイプンやカフスボタン類とともに、娘慶恵が自分の旦那に持って持ち去つていった。

葬儀の後、衣類等の形見分けと言つても、貰い手とて無く、燃して身辺整理を兼ねてやった積りだったので、何も知らぬ夫の過去がぞろぞろまた出てくるのが不思議であった。例えば、文学書や論文の間に挟まれていた手紙の文言や、名刺に記された面談日の痕跡の類であった。何故夫が秩父に移り住みたかったのかは、はっ

きりと分かつた。英文学者で登山家、田辺重治著の昭和四年復刻本「山と渓谷」と言う古い本が出てきたからだ。オリジナルは、大正八年出版の「日本アルプスと秩父巡礼」のようだ。父親だった永井剛の蔵書印があったから、自分で購入したものでないことだけは明らかだった。

秩父市野上自宅の手近な場所、市街地を見下ろす小高い丘に、羊が和む羊山公園があった。毎年春四月上旬には、約八百本の染井吉野や八重桜で沢山の花見客を集め、四月中旬、約三十万株の芝桜が植えられており、雄大な武甲山を背景にピンクと白に見事に塗り分けられる芝桜の丘は、観光客で大変賑う。

体力の落ちる晩年には、なだらかな緑の渓谷美、ハイキングコースとして今も愛されている荒川水系の人間川や名栗川上流、秋には十万本の彼岸花が群生する巾着田界隈、大きな栗の産地高麗川周辺を歩きたかつたに違いない。

妻真琴と歩いたこの秩父界隈、羊山公園やロープウェイのある三峰神社はもとより、北アルプスとは異なる雲取山に連なる峰々を独り彷徨つた末に誰にも知られず、死ぬのが夫の密かな望みだったのであるまいか？その趣旨が、自分史に記されていたからだ。

遺品類に真琴は再度目を通し、会社関係者の話を聞き、臆気な自分の記憶を継ぎ足して、もう一つ判明したことがある。どうやら、夫は永井家のルーツを調べたがうっていたらしい。というより職を辞してからの自分史執筆の中で、時に郷土史や風土記の様相を呈しながら、様々な史跡に親しみ、実際父永井剛の家に残された資料や本を調べては自分の考えを述べている。

特に、東京研究所時代の自分の臨死体験の記述とイスラエルへの海外出張を思い出してか、「日本・ユダヤ同祖論」の形を借りた記述が多い。この記述により埼玉県秩父地方もまた、父永井剛が住んでいた、群馬県藤岡市の遺跡と古代で互いに共鳴し、羊太夫伝説を共有した地であることが分かるのである。

この自分史は、職を辞してから記述したものは無く、窓際閑職となつた研究所在職中にも一書かかれていた節があった。でも説明は、幾分オカルトめいて、日頃の技術屋としての夫永井剛一朗の一寸醒めて理路整然とした処が無い。妻の真琴の稚拙な眼から見ても、素人推論や想像の域を一步も出ていないと思つたが、夫永井剛一朗自身も、自分探しの心の旅を続けて、秩父山塊を迷いながら彷徨していたことが、今にしてやっと理解できたのである。

永井剛一朗は、長岡オリジナル工業(株)社長室で、昭和五十四年来息子の剛志同様ヨーガを続けてきたらしい。以来窓際族となつても、東京研究所の顧問室でもヨーガを継続していた。家に居る時、妻真琴の前では一度もヨーガをやつたことが無い。一種の男の見栄や照れだったかもしれない。息子剛志よりも、綺麗なヨーガを演じられなかったからかもしれない。それは夫のヨーガは少し奇妙な動作であったからでもあり、会社で全員がやる、朝のラジオ体操の代りと思つていたようだ。

永井剛一朗の昔の研究成果が、今日の会社の隆盛事業部の基礎となつたことを想い出す者は居なかつた。研究所にその事実を知る者は殆ど残つていなかったからである。正に小

柄な永井剛一郎こそ、電子材料事業部の産みの親であり恩人であったはずなのである。

朝刊を読むのを中断すると、時計の針が八時を示していた。何時ものように狭い部屋の床にマットを敷き、トレイニングウェアのまま、ドアを内側からロックして、誰からも邪魔が入らないようにした。早朝から出勤の研究者も心得ていて、この朝の一時間は誰も余程のことが無い限り顧問室に入っていない。また電話も滅多に鳴ることもなかった。

登山家の梅沢紀夫直伝のインドヨーガである。彼はこのアーサナ(ポーズ)をカシミールの寺院で、ヨーガ行者のゴーピ・クルシユナの弟子から習ったと言って、穂高岳山行の際、滝田政男等と共に泊まった上高地の宿、白樺荘で教えてくれた。インドカシミールは、イスラエルの十支族の末裔が住む地域である。永井剛一郎は、健康維持と思つて、会社出勤中は自己流ヨーガの日課を一度も欠かしてことがなかった。

構成は大陽礼拝のアーサナ(ポーズ)七セツト、呼吸法確認のため足を組んで瞑想、再び大陽礼拝五セツト、三角のアーサナ(ポーズ)、身体を捻って駱駝、足を開いて英雄、立ち上がって三日月、立ち木、また床に寝てコブラ、猿、亀、鳩等の各アーサナ(ポーズ)・と続けて一時間、最後まで一度不器用に足を組んで瞑想に入るといふものであった。

ヨーガで一汗掻いてから、作業服に着替るのが永井剛一郎の毎日の行動であった。この部屋で続けてきたヨーガの日課も、もうじき終りになるかな?そんな予感のする昨今であった。

そんなある日、呼吸・脈拍も少なく最後の仕上げのヨーガの瞑想に入ったときの事であ

る。胸に尖痛が走り何時もと異なる世界に、自分の心が誰かに誘導されて行くのを感じた。胸が締め付けられる苦しきがあるのだが、苦しきの中に不思議な死の快楽がある。この時、永井剛一郎に心臓疾患の自覚があったのなら、直ぐ二ト口の舌下錠を舂めたであろうが、その用意も全くなかった。自分でヨーガを長年やってきたから、普段の健康状態を過信したのかも知れない。

自己視型の幽体離脱現象が起きた。

魂の体脱が起こって、自分の身体が宙に浮いた。自分の横たわる身体を廻って点検後に、舞い上がって北アルプスの上空にでる。御馴染の穂高連峰、槍ヶ岳がはつきり見える。浮遊を続けて中国に、どうやらシルクロードを逆行するように、空中飛行が続く。カシミール地方を行くから南方ルートに違いない。着地もしないのに、真つ暗いトンネルの先端に自分がある。硬い岩が回りを覆う。切羽の部分かもしれない、微かに光が前方に見える。もがいている。カンカンと岩に当るハンマーの音が聞える。穴を必死に這っていくと、突然目の前が開けて海が見えた。丘に一面野生の花が咲いていた。ルピナス、シクラメン、ポピー、チューリップ、アネモネ・何れも日本にない種類だ。花園でソロモン王に謁見する。王冠に飾られたシクラメンの文様。海は絵葉書でみた死海のようだ。港は有名なアッコである。丘から見渡せる海に昔の帆船が浮んでいる。ユダヤ教と、キリスト教、イスラム教が激突し、民族が覇を争った聖地エルサレム。旧約聖書の戦いが今も民族紛争を引き起こす場所。嘆きの壁が見える。人々が壁の隙間に願い事を書いた紙を挟んでいる。城門を潜ると絶

え間ない巡礼者の群れに囲まれる。祈りの洪水。神殿の丘、八つの門の全てが見える、ダマスカス門、ヘロデ門、ライオン門、黄金門、糞門、シオン門、ヤッホ門、新門、エルアクサ寺院、中央にエルサレム宮殿、宮殿内部に石がある。この石からあらゆる文化が西に東に発せられる。マサダ・クムランの遺跡、ユダヤがローマ軍によって滅ぼされた最後の要塞、ユダヤ人は二千年もの間国を失い以後世界各国に分散する。要塞の上に立つて見るとやはり死海が眼下に見える。死海に沈む人々。プリムの祭りで裸で羽目はずして踊る人々。ハマンの名が経文に読まれる毎に、板を叩く賑やかな音と怒号が声をかき消す。

風景が飛び飛びにあちこちする。

宮殿の西の壁の地下に昔の町が広がる。石と石が積み重なり、岩と岩がせめぎ合う。紙のキツパーを被つて中に入る。アッコの地下にビザンチン洋式の住居跡が見える。亡霊がうごめいている。

あの抜け出した石のトンネルを誰が掘つたのか?どうも自分が掘つたようだ。掘っている自分が見える。その横に何故か信金の滝田政男と部下の田口泰雄がいる。そして高い丘に立つ梅本紀夫が悠然と見下ろしている。強い光が射し込み体脱の自分は、やがて奈落の底に横たわる暗い穴の中の自分の肉体に戻った。

病院の記録に、N臨床医師の臨死体験のデータ収集の好材料として以下残されている。

患者は六十歳代の研究所顧問で、午前九時五分、会社の看護婦に付き添われ救急車で病院に運ばれた。到達時には意識が微かにあり、不安そうに胸部痛を訴えていた。

点滴をしながら、救急車中で既に二回の除

細動機を使って患者の心停止は蘇生していた。患者が証言した岩穴中の、カーンカーンと岩に響くハンマーの音は、救急救命士が除細動機で、電気ショックを与えた瞬間の音だったかもしれない。患者の証言は、酸欠状態下の、ヨীগア瞑想によって誘導された。患者の体験は、この世的でない、異質で見慣れない世界、天国の花園に咲き乱れる野生の花々、暗闇やトンネルに光を認識する「超俗型体験」に類別される。シクラメンの花伝説への連想から、患者がソロモン王謁見を想起させているのは興味深い。

診察時にチアノーゼが認められたが、心臓及び肺にはそれ以外の異常は認められなかった。午前九時二十分、二十ミリの硫酸モルヒネ投与。心電図を測ったが異常は認められなかった。その直後心電図モニター上で直線を描く心房細動を起し、次いで心停止状態を起した。直ちに全面的な心肺蘇生が開始され、電氣的除細動が施行された。間もなく心室性期外収縮(不整脈)を伴うものの、正常な洞調律を回復した。心停止後低血圧状態が続いたので、ドパミンの点滴が多目に継続された。

肉体に体脱した自分が戻る最後の証言は、分離型手術台の上に寝かせられた患者の瞳孔を検査するために、医師より照射されたハ口ゲンランプ光源にあったかもしれない。それでも、午後の三時以降までには、午前中の出来事がまるで嘘のように患者の体力が戻り、顔色もすっかり良く、心臓の拍動が全く本来の状態に復していた。

この状況は、本人の回復状況が非常に良好だったこともあり、N臨床医師の判断と、本人の強

い希望も考慮され、妻眞琴に一切知らされなかった。永井剛一郎の第一回目の心臓発作の状況であった。掃除のおばさんが、部屋内の異常に気付かなかつたら、永井剛一郎は、密室の中一度目の心臓発作で不帰の客となっていたらどう。というのも、何時もヨীগアを終わると、九時五分までにはドアの内鍵を外し、掃除のおばさんを迎え入れたからである。掃除のおばさんと楽しく談笑するのが、何時もの日課であったからで、あの日にこやかに開くはずのドアが、その時間になつても閉じられていたからである。

何故こうしたヨীগアの瞑想中に、臨死体験のような夢をみたのか眞琴には不思議であった。なにしるこうしたことは、今迄の眞琴の人生では始めである。本人は束の間の夢と意識していたかもしれないが、この現象は夢ではなく、古代ユダヤの霊能者の魂に導かれた、臨死体験であり、幽体離脱現象と思われた。

妻の眞琴は、本人が整理した名刺のファイル帳を繰って、小さく面談月日の添え字のある一枚の名刺にやっと気付くのである。確かに夫永井剛一郎は、一度イスラエルに、海外出張した。それは、永井剛一郎の出願特許を、イスラエルの某社が、JETRO経由でライセンス供与して欲しいとの申し出があったからであった。次期社長候補の北山富士夫の反対にあつて、最終的にはこの契約は締結できなかったようだ。どうやら、特許ライセンス交渉時のイスラエル旅行体験が、永井剛一郎の臨死体験の夢に加味されていたと思われる。

あの時の観光旅行で、日本の考古学者で比較人類学の研究家に、現地で遭遇した。何でも、社団法人ユダヤ研究会の委託研究費で、

イスラエルに来たといっていた。異国で出会った同じ日本人同士、互いに名刺交換をして、簡単に自己紹介をし合いながら暫く同道し、イスラエルの遺跡を回った。日本人のルーツを人類学的に研究しているというその男は、W大文学部卒で、同大学の先史考古学研究所に所属していると名乗っていたという。

眞琴が心の旅で体験した、フープー鳥の物語、古代の歴史書の翻訳者兼發送人は、この男の気紛れだったに違いないと推測できた。この古代からの祈りの書は読みずりて出会った一邦人宛への贈物として、態々日本の国へ届けられたに違いないとやっと思当を付けた。フランスの生理学者のシャルル・リシェの造語で「眞性異言(ゼノグロシー Xenoglossy)」という言葉がある。本人が習ったことのない言葉を話す現象のことである。特定の文章または語句を繰り返すものを「朗唱型眞性異言」と言い、意味の有る会話ができるものを「応答型眞性異言」と呼ぶ。

長男剛志が、催眠治療のベッドの上で、喋った脈絡のない言葉等は、差し詰め「朗唱型眞性異言」だったのではあるまいか。(「催眠治療の部屋」の項参照)

ついでに、あの項で剛志の喋った言葉はヘブライ語(ヘブル語)で解説できる由。

「アバ」父、「ナラ」川 奈良、「ヤフェダ」ユダヤ 八幡、「アッコ」イスラエルの港の名 赤穂、「キネレテ」琵琶、「マフラー」優れた良いまほろば、「ミコダシ」聖所 御輿「ハルク」歩く、「マガル」円」等である。

「日本ユダヤ同祖論」という言葉がある。

日本人とユダヤ人の祖先は同じ、もしくは先祖において、何らかのつながりを有している可能性があるという説のことである。

父親の永井剛や祖父永井剛造はこの説を信じていた節がある。が技術屋永井剛一朗本人は、冷静な頭でこの仮説を否定していた。

失われたイスラエルの十支族の子孫がシルクロード付近に集中して、現在もその子孫が住んでいるという説、これは有る程度納得できる。例えば、アフガニスタン、カシミール、インド及びミャンマー、中国である。がシルクロードの最終地点の日本にまで、十支族の末裔の一部が渡来したとする見方は早計に過ぎるといふ否定説、いや現にその証拠は、篤胤が復活せんとした旧神道である一神教の神道等、儀式や神社名に残存しているとする肯定説もある。

ラビ・トケイヤーは、その著書の中で二十年前に「ユダヤと日本・謎の古代史」や最新刊「日本・ユダヤ封印の古代史」(徳間書店)で様々な角度から、古代日本と古代イスラエルの類似点を指摘している。

「神道ユダヤ同祖論」については、前段の国学者平田篤胤の例やラビ・トケイヤーの著作にもあるとおり、生贄の儀式や祭神の神具、汚れや襖(あはせ)の風習に古い神道とユダヤ教に類似点が多いという説等は、有る程度耳を傾けても良いかな。そんな気がしてくる。

今でも「神道ユダヤ同祖論」は、強力な信奉者が両国、両民族に存在し、数多の著作類があるのも事実である。その内容も興味深く、一部は如何にも信憑性があるが如く記されている。日本人は、自分のルーツを外に探りたがる。

ユダヤ人の世界では、同胞が世界の何処に離散していったかを知りたがる。ユダヤの歴史は、祖国のないまま、千八百年余り続いたディアスポラ(離散)ギリシャ語 あまねく散るの意の歴史であるからである。日本人がルーツ探しなら、ユダヤ人は末裔探しである所以である。

永田家の先祖は群馬・栃木に暮らした。ご存知、両国とも古くは、「毛野国」といわれた地域である。国名のいわれは「毛人の国」という意味で、弥生時代に早くも渡来人が、特に朝鮮半島から日本列島を東進しこの地に定住した。「毛野国」はその後、五世紀に、上毛野・下毛野の二国、即ち今の群馬県、栃木県に分かれたのである。

群馬県の多野郡吉井町神保に、辛科神社(創建七〇一〜七〇三という古い神社がある。

この神社は、日本三大石碑の一つであつた「羊に給して郡となす」と刻字された多胡碑のある多胡郡の総鎮守なのである。

多胡碑は、和銅四年(711年)三月に多胡郡が設置され、その記念に建てられた石碑であるという。地元の人々は多胡碑を「ひつじさま」と呼んで祀り、当地には羊太夫伝説が残っている。今日伝えられる羊太夫の筆録の大部分は、江戸時代以降とされていて、吉井町や甘楽町を中心に各地に残されているという。八束羊太夫実録、羊太夫栄古記、羊太夫一代記、小幡羊太夫宗勝縁起、八束山千手観音略縁起等、作者名の記述は無く、年号は寛永、寛保、嘉永の文字が三点に記録されているという。

碑文は、六行八十字が和漢混淆文で記されている。刻まれた文字は、朝鮮半島の石碑の字風にも似ており、中国の渡来の仏教や古代文化に

も通じる点があるとされて、書道史や古代文字研究面からも貴重なものとされている。

内容は太政官(朝廷)からの命令書を毛基に、新郡の成立された経緯が示されている。石は吉井町南部の第三紀層から産出された砂岩であり、土地では天引石、又は多胡石と呼ばれる。牛伏砂岩という硬質の砂岩を切り出して作られた石碑は、四角形の碑の上に平らな笠石が乗っていたため、長年の風雨に絶えて八十字の刻字が今でも鮮やかに読み取れる。因みに、日本三大古碑の他二つの場所は、宮城県多賀城市の多賀城碑、栃木県那須郡湯津上村にある笠石神社境内の那須国造碑である。

この格式ある辛科神社で永井家の先祖は、宮司の修行をしている。ここから各地に散った禰宜が、永井家本来のルーツである。祖父の永井剛造から、孫の永井剛はこの事実を聞いていたに違いない。自ら当時、技術専門学校としては、エリート校だった蔵前高等工業専門学校を卒業しながら、何故群馬の藤岡女学校の都落ち赴任を選んだのか?平田篤胤を熱く信奉し、多胡碑や古い神社の辛科神社の存在を、もし永井剛が聞かされていたなら、そしてこれを現地で調査しようとしていたとするなら、この奇妙な赴任も納得できるのである。

祖父の永井剛造の心や霊能力から、その理由が推察できる。だから、代々永井家の本来の宗派を問われれば、日本神道と言われる多神教神道でなく、古代一神教神道にある所以はここから発していたのであった。

辛科の「辛」は「韓」または「伽羅」と同義で、この神社が、古代に朝鮮半島からの渡来人によって祭られた神社であることが分か

る。「科」は「谷あいの地」とか「尾根と谷が入り組んだ窪地」の意である。

昔は韓科郷と言われていたが、この地域の古くは甘楽郡と称し、奈良時代の七百十一年に分かれて多胡郡となった。多胡郡の「胡」の本来の字義は「中国の西方の異民族」であるが、日本においては簡単に「西の大陸から来た人」となっており、手近な朝鮮半島を意味したものであろう。多胡郡とは「渡来人が多く住む場所」を意味している。

ここで、もし仮に「中国の西方の異民族」を、中東のイスラエルを追われ中国に流れてきた、前述の十支族末裔を先祖に持つ人々と仮定してみると、次の多胡碑の文字の『給羊』の意味が自ずと臆気ながらであるが推測できる。旧約聖書に現われる、羊飼いや羊の話とユダヤ教が結び付くからである。

文字の解釈は、種々説があるが、最近では「羊」を人名と考える説が有力の由である。「羊に給す」と読み下して、羊という人物を郡司として、新しくできた多胡郡を束ねたと解するのが定説となっている。しかし人物ではなく、祥や養の略字と見る説も存在する。ここ吉井町一体が、渡来文化の色濃い地域であったことは間違いないとされている。定説では朝鮮半島の渡来人説が有力であるが、この地域の伝説「羊太夫」なる人物を、前述の実録の中に、羊の日・羊の刻に生れたとされ、身の丈二メートルを超す大男という記述や、大和朝廷の奈良の都に一日で駆ける馬(権田栗毛)、まるで神話の天馬ベガサスにも似た馬を所有していたところから、紅毛人だったという説が浮上する。例えばその紅毛人は、

イスラエルの十支族の子孫と解する説が浮上しているのである。

多胡碑は辛科神社と同じ吉井町の御門にあるが、最初から現在の場所だったかは定かではなく、移設された形跡もある。なお御門という地名は、首長の邸宅や役所を意味し、後世天皇のことを帝と呼ぶようになったのもこの語が転じたとされている。

名古屋市北区辻町に羊神社がある。御祭神は天照大神と火之迦具土神である。

この神社は名前の通り、多胡碑の羊太夫と大いに関係がある。羊太夫が奈良の都に上がる時に立寄った場所という説と、多胡郡の羊一族が落延びてこの地に来たという説がある。

この地の縁起に「多胡羊太夫由来記」があつて、多胡新田を開発した祖神の多胡羊太夫藤原宗勝公を祀り、享和二年(一八〇二年)、正式に多胡羊霊を祀っている。縁起によれば、七〇七年秩父で銅が発見された。朝廷は、秩父に銅銭「和同開珎」鑄造のために工場を作らせた。この仕事に従事したのが羊一族で、技術長官が羊太夫であつたと言われている。

秩父鑄造の銅は、平城京の建設にも使われ、この功績が認められて毛野国多胡郡の領主になつたとされる。また貨幣鑄造に尽力したが故に、火之迦具土神として祀られたものと推察される。羊太夫は、また優れた養蚕技術や冶金技術を有していたとも伝えられ、鉄製の農機具を創つたとも言われているのである。

鎮座地の辻町は、尾張志に「今、村の名を辻といえるは、羊の省かりたるやとぞ」「尾張国地名に住昔、火辻村といひしを、後世火の字を忌て単に辻村と書といふ」「里の名を辻という

も、御社の羊の名にし負えんとぞ聞く」と記されている。さすれば、羊太夫は伝説の人物でなく、実在の人物という推察もできる。

現に秩父地方にも、羊太夫の伝説が残っている。秩父市野上の自宅界隈の羊山公園は、実に技術長官羊太夫が銅銭「和同開珎」鑄造にちなんだ場所という仮説も成立つのであるまいか？銅鑄造場所も史実に基づき明確である。

秩父市黒谷地内(秩父鉄道黒谷駅)とされ、秩父古成層と第三紀層の合わさり目で、たまたま自然銅が地上に露出されていたのを里人が発見、精錬技術を有する帰化人(羊太夫等?)よって、日本最古の銅鉱脈発見と精錬がなされ西暦七〇八年、秩父から銅が朝廷に献上され、銅銭「和同開珎」が鑄造された。付近には自然銅を「ご神体とする聖神社や露大掘跡や銅洗掘跡が発見され、また地名としても残っている。この和銅奉獻により朝廷は、年号を和銅と改元した。

秩父郡小鹿野町には、羊太夫が住んでいて写経をしたという伝説が残り、「お塚」の古墳はその墓だという説もある。俗に「お舟観音」と呼ばれる札所32番法性寺には、羊太夫が納めた大般若経あつたとされ、札所一番の四萬部寺の経塚は、羊太夫が納経したとも言われる。

群馬県安中市にも同名の羊神社がある。多胡碑のある吉井町から、十数キロメートル西方である。境内には多胡碑と同じ文面を新たに刻んだ碑がある。境内の奉納誌によると、氏子には多胡の苗字がかなり多い。この安中の羊神社も、江戸時代の初めに「多胡羊霊」の名で創祀されたという。

羊太夫が紅毛帰化人説は、富岡地方の絹紡績産業・養蚕業の姿を、古代に投影したもの

ではないかという見方もある。群馬大学名誉教授の故尾崎喜左雄氏は「帰化人が多かったはずなのに、吉井町付近にそれを思わせる大きな古墳が存在しないのは不思議だ」と述べている。代りに全国的にも珍しい吉井町から高崎市山名に掛けて、同時代の上野三碑があり、古墳文化とは別の異種文化が栄えていたのかも知れないとも言われている。

また別説に寄れば、羊神社のある安中から、富岡に掛けては、貫前神社を始め、磯部、丹生、鷲宮等物部氏縁の地名が多いことを考慮すると、羊の名は、あるいは物部氏の祖神の名「経津主」が訛って転化したと主張する人もいて、真偽のほどは未だ不明である。

吉井町多胡碑の隣接地、群馬藤岡市の七輿山古墳には、出土した石棺が露出している。

この石棺の内容物にユダヤ、もしくはイスラエルを想起させる出土品が現存するならこの「神道ユダヤ同祖論」説も有力視される。

吉井町隣地、父永井剛の奉職していた旧藤岡女学校の近傍、藤岡市上落合に七輿山古墳がある。全長百四十五メートル、三段構成の古墳で、六世紀代の前方後円墳としては、東日本最大級のものである。七輿山の由来は、多胡碑と関係有る羊太夫の伝説にあるから、恐らく多胡碑は、この古墳近傍に在ったに違いない。

大和朝廷が、羊太夫が謀反を図っているとして、討伐軍を派遣して滅ぼした。八束城を追われて一族が落ち合った場所が「落合」という地名となり、羊太夫の女房等七人がこの地で自害、夫々輿に乗せて葬ったので、「七輿山」の名前があったという。

露出している石棺の出土品から、現存して

はいないが、「神道ユダヤ同祖論」説を有力視する証拠の記述がある。それは、十字架と「J N R I」と印字した銅板が発見されたという話で、江戸時代の随筆集松浦静山著「甲子夜話」という書物に記載されているという。残念ながら記述だけで実物は無い。これも本当は現存したが、明治時代に神社令が布告された時に、当時の憲兵が何処かに、持ち去ってしまったと言つて説まである。

松浦清号は静山、一七六〇(一八四一)は、松浦家三十四代当主で、安永四年(一七七五年)肥前(長崎)平戸九代藩主となり、稀代の名君と誉れ高い人物、「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という格言を残し、本名清よりも号の静山として知られた。

「甲子夜話」は、文政四年(一八二二年)十一月十七日、「甲子の日」に書き始めたことになんでそう呼ばれ、実に二百七十八巻にも及ぶ随筆集である。余談だが巷間、八十二歳で逝去するまでに男十七、女十六計三十三人の子女という子宝にも恵まれたと言つから、中々の色好みだったようだ。現在の少子化を憂う、世が世なれば隔世の感、まさに表鏡ものである。

十一女の愛子が大納言中山忠能に嫁ぎ、生れた慶子は孝明天皇に嫁いだ由だから、明治天皇の曾祖父ということになる。このトリビア(Trivial Knowledge)雑学。生きて行く上で全く必要なイムダな知識の意)を地でいくような、松浦静山の随筆集には、戦国時代から江戸末期までの人物評論・諸国に珍しい話や噂話・風俗習慣等が多岐に渡つて言及されており、江戸時代の政治・社会・文化の調査研究の手掛りになるとされている。多少と太話も混じって

いとされ、全面的に信用できるかどうかは定かでないが、以下、多少割り引いても、実に面白い話なので此処に紹介したい。

上州多胡郡の碑にある羊は、遣唐の人である。のちに、その墓の中から十字架が発見された。そこで上州の代官が長崎屋の旅舎でオランダ商人イサク・ティツィングにみせたところ、「こんなものを鑑定すると命令されるとは、いったいどういふことでしょう」と不思議がった。平凡社東洋文庫「甲子夜話」4巻63から現代訳

△先年、上野国の多胡羊太夫の碑のかたわらから石槨をほりだしたが、その中から古銅券が出た。その表題の文字が「J N R I」となっている。この蛮文について、ある人がそののち蛮書「コルネーキ」を調べた。すると、イエス処刑の上部に、この4字が書かれているのがわかった。しかし、その意味について蛮学の通じた人に尋ねてみたのだが、よくわからなかった。平凡社東洋文庫「甲子夜話続編」6巻73から現代訳

多胡碑から、イスラエルのユダヤ教由来の十字架と銅板の文字の発見の記述は、本当な考古学上貴重な証言であるに違いない。

「J N R I」(Jesus Nazarus Rex Iudaeorum)ラテン語「ユダヤ人の王ナザレのイエスの意」の略語の「J」文字がしばしば「I」と誤記された。「I N R I」、「インリ」は、類似発音を飛躍させて、Nazarusの「ナ」と読ませると「イナリ」になる。ラテン語で書いても「I N R I」となる。即ち稲荷神社の原祖は、ユダヤ教の礼拝所であり、キリスト教の、果

ては神道の社、万葉仮名記載「伊奈利イナリ」であったという説となるからだ。

多胡碑に建てられたのも和銅四年(711年)、さすれば郡司羊太夫が付近を納めていたこの時代から、イナリ神社が全国に広がっていたという説も成立するかに見える。

更に仮説は続く、全国稻荷神社信仰の頂点に立つ、京都伏見稻荷大社の711年建立者は、ユダヤ人帰化説の秦伊呂貝、即ち秦一族である。羊太夫もまた、八幡神社の創始者秦一族だったという説がある。平安時代の書物に、十字架を指して「はたもの」と表現している。昔の日本語には、十字架と言う言葉は無く、「機物」「磔」の文字を充てた。元来は「秦の物」という意味だったのであるまいか？秦一族は、自らのシンボルとして、当時十字架を使用していたという。

秦氏がユダヤ人だったと言つのは、一つの仮説に過ぎない。古代ユダヤ人の国は、古代ローマ帝国にあった。ローマ帝国のことを中国では「大秦」と呼び、其処から来た人々は「秦」であった。多民族・多国籍人種が寄り集まる中国では、夫々出身地が分かるような名前が付いていた。それは、日本でも同じだった筈で、日本列島には北方系・朝鮮半島・江南、あるいは南方系の民族の雑居状態だった。他国者同士が出会った時、互いに自分の言葉で名乗った筈だ。

全国十万人の内、四万社は八幡神社であるという。八幡神社は「ハチマン神社」でなく、「ヤハタ神社」であり、ヤハタのハタは秦氏のハタである。八幡神はイヤハダ神であり、ユダヤ教の天地創造の絶対神は「ヤハウェ」である。ユダヤはヘブライ語で「イエフダー」、

キリストのアラム語でも「イエフダー」、母音変化して、「ヤフェダ」「イヤハタ」「イエフダ」となった。八幡神社とは即ち「ユダヤ神社」だったという説となるというのである。これ等「イエフダー」「イヤハタ」「ヤフェダ」「イエフダ」「ヤハウェ」に知な

地名、発音上極めて似ている群馬県吉井町多胡郡の中に矢田郷がある。この地名、郡や郷の地名「矢田」が、現在全国各地方々にある。

永井剛一郎の自分史の記述は、其れまでにその述べてきて、最後「日本・ユダヤ同祖論」を巡って父永井剛と対立したと記している。

好事家で自称古代研究家、群馬藤岡に住んでいた父永井剛は、「甲子夜話」の記述に信憑性があると主張したが、合理主義者の息子永井剛一郎は結論が先にあつて、事象を証拠として単に都合良く語呂合わせの「偽史」に過ぎないと父に激しく反駁した。ユダヤ人渡来説の内、同祖説・帰化説の何れも、ユダヤ人の存在を日本人が知つて生れた説で、論理の飛躍が著しいと。

山形県生まれの聖書研究家酒井勝軍は、大正昭和初期に掛けて、親ユダヤ主義を唱え、昭和二年(一九一四年)「神州天子国」を著している。更に著作「猶太民族の大陰謀」が「日本・猶太同祖論」の古典とされる。次いで、秋田県生まれ、ジンギスカンは義経だという珍説の提唱者、小矢谷全一郎著の昭和四年(一九二六年)

「日本及日本國民之起源」である。二人の共通点は米國遊学し、キリスト教徒だった点である。そうした内外の一連の仮説・傍説を巡って、どうやら親子の確執があつたようだ。インド・ハタヨーガのインストラクター長男剛志なら、

祖父の永井剛側に組したかもしれないと。自分史の中で永井剛一郎はそう結んでいた。

真琴は、「ひきこもり」の長男剛志と対峙した地獄の様な戦いの日々のことを思った。

先ず昭和三十七年、浅草生れの真琴にとつて、嫁いできた白魔の襲う辺境の地、周辺から孤立する雪国、そこで始めて剛志を妊娠した時、とても心細い気持ちと疎外感を抱いて暮らしていた。夫永井剛一郎は、戸建ての社宅に殆ど帰らなかつたからである。独り部屋で寝ていると夢をみて、その夢の中で真琴の魂が何時の間にか、スルリと身体を抜け出し家の窓や入口の戸締りを見回るのである。

あの三八豪雪に剛志が生まれた長岡の地、催眠療部の屋で口走つた奇妙な一連の言葉は、知らぬ間に藤岡の祖父から吹き込まれた言葉だったのであるまいか。真琴は、はたと気付くのである。祖父永井剛は、第二次世界大戦の敗戦により大きなしこりを残し、米國を嫌いになつていた。江戸時代の国学者である平田篤胤を信奉し、ユダヤ人を世界で最も優れた民族として畏敬の眼で眺めた祖父永井剛は、幼い孫の剛志に様々な事を吹聴したに違いない。

例えば、世界に流浪の民となり、米國に存在しているユダヤ人は僅か人口の三%に過ぎない。なのに、米國のノーベル賞受賞者の中で、ユダヤ人は略二十五%を占める。全世界でいえば略二十%の受賞者はユダヤ人である。ドイツや日本民族も優秀だが、この数値にはとても叶わない。またこつも言つたに違いない。歴史的に世界に散らばるユダヤ人は、一千四百万人、スポーツ以外の世界の自然科学、社会科学、政治、芸術、ビジネス、ジャーナリズムに綺羅星の如く

優れた人材を輩出している。世界富豪トップ四千人の十五%はユダヤ人であると。ドイツ人・ナチの行なった、ユダヤ人殺戮の歴史ホロコーストは、血の純潔を維持する名目だったが、ユダヤ民族の優劣性をやっかんた輩行だったと。

「日本・ユダヤ同祖論」の影響で、祖父永井剛から長男剛志は、中東アジア志向を根底に強く植え付けられたに違いない。父親永井剛一朗よりも強くである。いや反発しながら、又本人永井剛一朗も有形無形の影響を受けたに違いない。その証拠が、群馬県藤岡市、吉井町、安中市、埼玉県秩父市周辺の史跡を訪ね、資料を読み自分の記述となったに違いないのだ。

確かに今になってみれば、夫の言ったように「案ずるよりは産むが易し」の感がする。夫は心の動揺を取繕ってそう言ったのか、自信があつたからそう言ったのか分からない。

何時の世でも、父と息子の間で確執の無い親子はいない。でも「息子は親父の背中を觀て育つ」という格言があるではないか。

結果的には、登山家の梅沢紀夫との出会いによつて、夫が予見したように、兎も角も息子は自信を取り戻して生きている。真琴の思い描いた人生、大学だけは卒業し、安定した生活を営む一人前の男になって欲しいという希望は叶えられず、長男剛志に託した夢は全て空振りに終わった。ヨーガ芸人と成り異なる人生に反れてしまったにも拘らず、些か残念でならないが。

生前の永井剛一朗に向つて、エルサレム聖地でユダヤ人のヨーギー達と一緒に、ヨーガのデモを必ずやるんだと豪語していた剛志。あの時「大道芸人のような真似はよせ！神聖な場所が穢れる。第一そんなデモができるのか？」反対

はしたが、父の眼が笑っていた。将来はユダヤ教・イスラム教・キリスト教の各ヨーギー達と、あの聖地で巡礼者達も共感するヨーガデモ共演を見せたい・・・と冗談めかして言っていた剛志。あんなに心配して損したような気分である。

不思議なもので、思い起こせば息子と戦っていた日々の方が余程充実感を感じていて、今こうして、子供達が親離れた後の方が、自分の裡にやり切れない寂しさが残り、空虚な気持ちを抱くのは何故なのか？でも、夫が居ない今の独り身の生活に安堵感こそあれ、左程の寂しさは無い。それは決して瘦せ我慢ではない。

息子剛志の救済者、ヨーガイINSTRAクターの道を切り開く切欠を作ってくれた恩人の登山家梅沢紀夫は、長岡の女性を籍にいれて結婚し松本に居を構え、新たな活動開始を聞いた。永井真琴も田口泰雄と共に安堵したのである。この情報は、久し振りに永井剛一朗の墓に詣でるついでに自宅に寄つた、田口泰雄からもたらされた嬉しいニュースであつた。

障害者の登山が一般化し、障害者が自由に山岳会を選べるような支援活動は不十分であると、自ら隻腕というハンデを負つた梅沢紀夫ならではの着想であつた。精神的障害者引き籠もりや二トの青少年や肉体的障害者が健常者と助け合いながら山登りを愉しめる会を結成、特定非営利法人、「NPO長野アルプ山岳会」の理事として納まって活躍していたからである。隻腕の限界を意識して、八千メートル級ヒマラヤの峰のソコ登攀を諦めて吹っ切つたことで、正義感旺盛な梅沢紀夫をして、こつした活動に向わせたのだと、その便りを聞いて真琴は心からエールを送つたのである。

もちろん、挫折の後長年修行したインド・ヨーガの実演も、人々に見せていたに違いない。

田口泰雄自身も聞けば、高野山東京別院の関東八十八カ所霊場のお砂踏みに参加以後、実際に関東の札所を独りで巡つてみたい。その内に秩父霊場にも姿を見せるのでその時は宜しくと、真琴に挨拶をしたのである。

「マコウ！パバ長く病まなくて幸せだったね」長女慶恵が、葬儀の後で言った言葉はその通りだと思つ。時々浅草の実家に帰つてみると、女友達の何人かは亡くなつていて、可なり歪な余生を辛抱して共に暮す多くの友人達から一様に羨ましがられるからだ。

熟年離婚者が急速に増えただけに、離婚以外でも死別で独り暮らしの熟年も居て、再婚者の数も十年前より二倍増加傾向にあるという。それも、相続トラブルを避けるために「内縁」や「通い婚」の形式をとるといふ。

「旦那さん亡くなったの・・・良いわね。一緒に長生きするのも善し悪しよ。大体年齢的に男性の方が短命だから、それが普通だけど・・・神様は良く創つてくれたのよ。」

「私も自由になつたから、恋でもしようかしら、誰かに愛されていると思うと、寂しさが紛れるから・・・でないといふ心のトンネルの中を、冷たい風が何時も通り過ぎているようで嫌だわ」

「私の友達で、六十五歳から社交ダンスを始めた人がいるのよ・・・然も熱心に新宿のホストクラブに通つてるんですって・・・」

「私も始めようかしら・・・始めるのに遅いといふことはないと言つたじゃない」

「始めるならシーケンスダンスが良いそうよ

(「鹿鳴館時代のO.D. The Dance」)

「男性ホストが相手をしてくれるかしら?」

「まだ子供みたいな男が欲しいの?」

「そつね・再婚でなくともいいわね。痴

熟女の煩惱の焔は、灰になるまでと言う

言葉もあるわね。直木賞作家江國香織の

『東京タワー』という小説を読んだわ」

と軽口を女友達と叩きあって笑って返す

のだが、現実には、もうじき喜寿に近い真

琴は既にそんなエネルギーは失せていた。

夫は、確かに今にして思えば、多忙に過ぎて

息子と話が出来なかつたかもしれない。妻の長

男剛志に対する接し方に、ある種の怒りに堪え

て黙って自分を観ていたのではないかと思う。

悲しさや恐れのお持ちを自分に訴えてくれずに、

怒っていたのではないだろうかと思う。若い真

琴の偏狭や見当違いの我執に、じつと我慢して

いたのかもしれない。だからこそ、捌け口を北

アルプスの嶺々に求めていたのかもしれない。

夫の無言の怒り、迷いや寂しさがこの齢になつ

て理解できるのは、曲りなりにも真琴が古代の

贈物、あの「フープー鳥の賛美歌」の心の旅を

体験した御蔭であるのかもしれないのだ。

人生には本当に何が起るのか判らない。

十一年前に真琴の下に偶然届いた、この古代

からの贈物に、不思議な運命的な啓示を感じて

いた。然も、目次の内、全体を二つの廃丘とい

う項目に挟まれた層15、層1の項目の、先ず

一番最初に層12「フープー鳥の賛美歌」に触

れたことが幸いだつたと思う。苦しみながらも

その層12を読み進み、靈慈に導かれて、初め

ての心の旅に出かけなければ、夫永井剛一朗の

仕事、長男剛志の深層にも無理解な妻や母とし

て一生終わってしまったであろうと思った。

平成十八年二月末、永井真琴は久し振りに

来た娘慶恵と一緒に、秩父鉄道黒谷駅に下車

していた。ハイキング姿の二人の目的地は

「和銅採掘露天掘跡」で、サブザックの中に

夫フープーが残した自分史、分厚い例の歴史

書、それと供養の長岡の地酒が入っていた。

駅前案内板に沿って歩き聖神社に着いた。参

拜後鳥居前の案内板に従って、二十分程で「露

天掘跡」に着いた。和銅沢を右手に見て、少し

歩くと「和銅開採」のモニュメントがあつた。

歴史書と大学ノートに記された夫の自分

史を丁寧に一枚一枚破いては、娘慶恵と二

人で遺品を時間を掛けて燃やした。

夫フープーの遺品を燃やす場所としては、

羊太夫の故事に繋がり、坑道跡もある和銅

の里が最も相応しいと思つたからである。

今となつては、晩年夫が何を思つて自分史を

書き残したかの真偽のほどは闇の中、知る由と

てもないが、二つの遺品が燃え尽きると、二人

は持参の長岡の地酒を掛け、フープーの魂を回

向した。亡夫フープーの心のトンネルの堅穴に

取り付けられた階段を下り、泉の湧く井戸に繋

がる横穴を探り当てながら偲ぶ、自分探しの心

の旅はもはや出来ないと永井真琴は思つていた。

大ヒットとなつたという。特に関西地域では、

初回以外は全て二十%を超え、最終回では、何

と三十%の驚異的な数値を記録している。

定年退職を迎えた日の夜に突然、三十五年

連れ添つた妻から離婚を言い渡されるという

物語である。人気俳優の共演で、この「思わ

ぬ事態」から始まる夫婦の物語に共感した、

多くの熟年女性達が、「一人の自立した女とし

て、私も解放されたい」という台詞に、我が

身をダブらせて視聴した結果に他ならない。

厚生省平成十四年の人口動態調査におけ

る離婚件数は、約二十九万件で、離婚率(人

口千人に対し)二・三、件数共に明治三十二

年以降最高の数値に上つたと発表された。

TVDドラマのように、同居期間二十五年以

上では、ここ十年で二倍以上、三十年以上

では三倍近くの数値となつているという。

「フリーター」「ひきこもり」「ニート」と

いう言葉も、現代の若者の社会現象を現す言

葉として、すっかり定着したかに見える。加

えて、東京秋葉原界隈に発生した、オタク向

けの産業、「萌えビジネス」に至つては、熟

年層の常識を超える社会現象である。

「ニート」は一口で言えば、若年の無就業者、

NEET(Not in Education, Employment or Trainingの略)として、一九九〇年代の英国で社

会問題化して、労働政策に相上り上つた。日本

でも内閣府の研究調査に寄れば、二〇〇二年

時点で、フリーター人口は二百万人、ニート人

口は既に八十五万人に達しており、五十二億円

の対策費が予算化されようとしている。厳密に

は、アルバイトや派遣等で働く「フリーター」と

「ニート」は区別されているという。

エピローグ

平成十七年の十月、暮れに掛けて、毎週木曜

日にテレビ朝日より放映されたTVDドラマに

「熟年離婚」があつた。九回に渡る連ドラ放映

で、何と最高視聴率が二十一・四%を上げ、木

曜テレビ枠の平均視聴率でも十九・二%という

厚生労働省の二〇〇五年調査では、新卒者の入社三年以内の離職率は、大卒で34.7%、高卒で48.6%に上るといふ。厚生労働省は、若年者の就業支援策として新年度予算に三六三億円を計上する。フリーターの就労相談の専任者を新たに二百人配置して、二〇〇六年度末までに、二十五万人の常用雇用化をはかるとされている。

派遣会社等の民間側の支援の動きもある。二〇〇七年の団塊世代の一斉定年退職を睨んで即戦力になるように、接客ノウハウを活かしたコンビニエンスストアのビジネススマナーや基本的なパソコン等の実務研修に力を入れている。

過去重なる家庭内暴力や犯罪を引き起こす「ひきこもり」も、未就業と言つ点では「ニート」と共通で、精神障害者とは考え難いが、何等かの原因で自身喪失し、六ヶ月以上自宅に籠つて社会参加しない状態を漠然と表現している。発端は学校の不登校が主因にあるとされており、学校教育面からの見直しも、文部科学省を中心に進められているという。

「ニート」と「ひきこもり」の線引きは極めて曖昧である。親の「あまやかし」にあるという指摘もある。両者ともに、元は働く意欲を持っていた。働けない人でも、その意義を誰よりも真面目に考えていたはずだ。その真面目さが仇となり、人より優れて専門的な能力や温厚な対人関係が築けなければ生きられないと思ひ込む。「だらしがない」「甘やかされている」というよりも、むしろ不器用で真面目過ぎる人々の群れとでも表現できるのであるまいか。

昨年有る銀行系の調査報告が発表された。

「萌え市場は約九百億円」は、株式市場の投資家の眼を惹いた。その調査対象は、コミックス、DVD・ビデオ、ゲームの三市場だけの推定数値である。「萌え」とは、「アニメキャラクター、もしくはそのキャラクターの類に恋焦がれること」である。その対象は、人間の女性を対象とするのと同じように、そうしたキャラクター人形を恋することだ。ネットの二ちゃんネルというサイトから「電車男」なる小説が生れて、ベストセラーとなり、TVドラマ化もされた。

今結婚できない男性が急増し、結果として萌えの感情が沸き起こる。人間の女性への絶望から始まっている。世の若者の大部分は、決してイケメンでも三高でもなく、特別能力に秀でている訳でもない。今も昔も女性の関心を買おうと努力するのは、色気付いた男性の特徴である。工口写真めがけて射精するのは、空しい青春の特権であるのだが、そうした努力は今全て徒労に終わる。そうした結果が「萌え」である。

秋葉原界隈に出現したメイド喫茶で「ご主人さま」と呼ばれて奉仕される、コスプレ衣装に群がる、フィギュアという人形がショーケースに飾られる、購入するのは、現実の女性を恋することを止めた不幸な男性の若者達である。

これ等の現象を、単に若者の生きる力の低下とみるか、現代社会に咲いた仇花とみるかは自由だが、根底に熟年も含めた男社会が、間違いなく可笑しくなっている兆候と捕えて良さそうである。常に「男らしさ」を主張し、且求められてきた家庭や社会、そして学校や職場環境が変り、従来の権威の基盤が揺らぐことを恐れる男を巡る環境に本質的に抵抗し、いやそれは、蠅螂が交尾後の雄を食い殺すのと同様に、生物学的な雄の宿命で、逆らうことのできない脆さと見做すべきなのであるつか。

日本政府はこのほど、今後十年間で自殺者の数を約八千人減らすための政策を決定した。日本の自殺者の数は、景気悪化の平成九年(一九九七年)2万4391人から翌年には3万2863人に急増。以降年間3万人を越える年が続いている。

政府統計によれば昨年の自殺者数は3万2325人で、人口10万人当たり25.3人の比率となっており、内3分の2以上が男性で、自殺理由のトップは健康問題で次が経済的苦境だといふ。

政府はこのような状態を改善するため、今後十年間で自殺者の数を平成十年(一九九八年)以前の水準まで引き下げるための政策を発表した。学校や職場でのカウンセリングサービス等の充実を図る他、駅のホームに飛び込み自殺防止用のフェンスを増設する。またネット上の自殺サイトへのアクセスを制限するソフトウエアも配布する。国際統計によると、日本は先進国G8の中でロシアに次いで二番目に自殺者が多い国とされる。

株式市場のダウ平均値が上昇し、日本経済の各種経済指標が落着いて、やっと長期低迷を脱する兆候が見え始めたのは、平成十七年の第二四半期以降であると言われている。

平成十七年の十二月二十七日、全国銀行協会が発表した加盟百二十九行の平成十七年九月中旬決算の集計によると、最終利益の合計は何と二兆一千二百四十二億円と、中間期としては平成元年九月のバブル期最盛期の一兆二千六百二十四億円(当時百五十

五行)を十六年ぶりに上回り、過去最高の利益となった。景気回復が企業再生を後押しし、銀行の不良債権処理費用が大幅に減少したためとみられている。

本業の儲けを示す業務利益は三兆六百四十三億円で、前年同期比22.7%減少。投信託や保険商品の窓口販売等が好調で手数料収入が二桁の伸びを示したものの、前年同期は一兆円を超えていた貸倒れ引当金の取り崩しが無くなったことが響いたとされた。

金融庁発表でも、公的資金を投入して救済した十六の銀行・グループについて平成十七年末時点の経営健全化計画の達成状況によれば、最終赤字となった琉球銀行を除く、十五のグループが黒字を確保し、通期では全行が目標を達成する見通しであるとされている。

なのに、郵便局や銀行口座の普通金利は、以前として低利に据え置いたままの状態は、年金生活のシニア層の最大の疑問であったが、平成十八年三月十日、日銀は五年前に始めた景気回復とデフレ脱局を狙った量的緩和策を解消し、従来どおり金利の上げ下げで経済活動を刺激する方式に戻すと発表した。でも当面は、景気動向をみて、当分零金利策を継続することである。

昨今TV・新聞紙上を賑わし、もう一つ腹の立つことがある。それは、官庁天下り職員が引き起こす、贈収賄事件や官製談合である。更に官庁キャリア官僚OBの二重天下りが、防衛庁や農水省を巡って公然と行なわれたという事実、驚くべき無神経振りが報道されている。

中央省庁から、公益法人や特殊法人等の外郭団体の役員として、天下り・出向してい

る国家公務員は、平成十七年四月時点で、三千九百八十七団体に、合計約二万二千人以上にも上ると報じられている。然も、これらの団体への補助金は、年間約五兆五千四百億円で、文部科学省に至っては、省の定員を上回る天下り・出向者がいたとされている。

国家公務員法では、離職後二年間、退職前のポストと密接に係る営業企業に再就職することを原則禁止している。だが、特殊法人等外郭団体への天下りや、外郭団体から民間企業への天下りは規制の対象外で、所謂外郭団体経由の「迂回」が可能となっているという。省庁別では最も天下り・出向役職員が多いのは国土交通省で、全体の四分の一強にあたる五千七百六十二人。ついて厚生労働省の三千五百六十一人。文科省の場合は、二千二百六十人で、省の定員数の二千二百八人を上回った。これ等外郭団体に国から投入されている補助金も、文科省が二兆一千五百八十八億円で突出しているといふ。

近年、シニア層の増加により、福祉、環境、国際協力、村おこし町おこし等の様々な分野で、ボランティア活動を中心にした民間非営利団体による社会貢献活動が活発化している。そこでこれらの自由な社会貢献活動を促進するために、平成十年十二月に簡単な手続きで法人格を付与することを目的とした特定非営利活動促進法(NPO法)が施行され、平成十四年十二月に一部法改正が行なわれ、平成十五年五月一日その施行が行なわれた。所轄官庁は原則として、法人事務所の所在地の都道府県であり、設立書類は知事宛に申請される。

内閣府国民生活局、市民運動促進課によれば

現在約九千団体が、NPO法人として認可され、法人格の付与を受け、税制面の優遇処置も受けて活動しているといふ。

以下十七の活動に対して認可される。

保険、医療又は福祉の増進を図る活動
社会教育の推進を図る活動

まちづくりの推進を図る活動

学術、文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動

環境の保全を図る活動

災害救助活動

地域安全活動

人権の擁護又は平和の推進を図る活動

国際協力の活動

男女共同参画社会の形成を図る活動

子どもの健全育成を図る活動

情報化社会の発展を図る活動

科学技術の振興を図る活動

経済活動の活性化を図る活動

職業能力の開発又は雇用機会の拡充を支援する活動

消費者の保護を図る活動

前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

丁度この物語が語られる八十年代、九十年代に、第十二次国民生活審議会の総合政策部会余暇・生活文化委員会報告書(昭和六十三年十一月、平成二年十一月)の前書き「余暇に対する考え方」の「なぜ余暇を考

えるのか」の中で、十八人の委員会から、

以下答申報告がなされている。

△(前略)実際に我が国の余暇を巡る現状は欧米

に比べて著しく遅れている。年間層労働時間が欧米より著しく長い上(図一)、通勤時間も大都市圏では平均で二時間を超え(図二)、多くの人々にとってその生活はまさに時間貧乏でもいっべき実態にある。生活はともすれば益々職場中心に偏り、個人の営みや、家庭、地域とのつながりの中で自分の生活の質を高めることが困難となっている。とりわけ、中高年層については、多くの人が働きすぎと感じており、家族と接する時間が短く、親子や夫婦の関係が希薄になっていることもあって、経済水準の割りに生活の豊かさを実感できない。

このような状況の中で、近年、余暇に対する国民の関心が急速に高まっている。多くの人が余暇に力を入れた暮らし方をしたいと考えるようになってきている(図三)。これは経済水準が豊になるに連れて、それまで無意識のうちに適合せざるを得なかった社会の歪みが実感されるようになってきたためと考えられる。

人生八十年の日々を人間らしく味わうために、もっと自分のための時間をもち、時間を通して自らの人生と生活を考えると、厚みを深みのある生活文化の創造を図ることの大切を再認識する必要がある。現状のように自らの時間が乏しく、生活文化が貧しい限り、個々人の可能性を最大限に発揮できる社会はやってこない。余暇・生活文化の充実こそ、我が国の将来を真に豊で人間的な社会としていく最大の課題である。v

答申報告の「重点的に進めるべき施策」の中の「余暇の充実のための施策」では三つのポイントを委員会は指摘している。

1. 生涯学習の充実

2. 健康づくりの推進

3. 人材の育成及び活用

こうした答申報告を受け、様々な施策が実施されている。国や自治体、公民館・図書館・カルチャーセンター、民間の通信講座等を通じ、余暇利用施設拡充と、生涯学習や健康づくり支援が実施されている。最近の生甲斐論の中でやはり目立つ意見は、熟年女性パワーに押されて、男性シニアの活力や勢いが減退気味である点である。

特に、男性の文化離れは顕著である。

今や男性専売の手遊びの俳句は、既に女性に席卷され、芝居・演劇・映画においてすら、客席は圧倒的に姦しいおばん達に制圧されている。その内に音楽・文学、絵画・彫刻・工芸等の芸術領域も、女性の手に落ちるのではと心配する。

男性に残されているのは、釣やバイクツーリング、ラジコン模型、収集癖、庭木・盆栽、郷土史・考古学、自分史、スポーツ観戦位であるか? 最近郷土史編纂や考古学の領域に、男性シニアが興味を抱き、海外にまで出かけて遺跡発掘現場で汗水を垂らし、発掘遺物に蘊蓄含蓄、小話小言をぶつけ合いながら、手伝っている姿が見られるのは嬉しい限りである。

従来から好きな政治や経済、果ては技術的な開発や起業に、男性シニア世代が自分の生甲斐をみつつけようと、NPO等様々な活動を志向するの珍しくないが、自分ではどうしようもない社会現象や事件にまで首を突っ込み、関心を寄せて無闇に腹を立てるのも、心疾患等で早死や突然死の元凶だと医師は指摘している。

最後に余談であるが、こうした心臓発作

は、真琴の夫永井剛一朗の例にも有る通り、突然やってくる。心筋梗塞で倒れると約40%は死に至る。過半数は発病後一時間以内に、病院に運び込まれないうちに亡くなる。最近心臓発作を起す危険因子が明らかになり、未然に防ぐ対策が論じられているという。

近年、多くの疫学調査や臨床研究により、内蔵脂肪蓄積と動脈硬化が心臓病の原因となることが明らかになったという。内蔵脂肪はインスリン抵抗性や糖代謝、脂肪代謝、血圧の調整に関する様々な生理活性物質を作りだし、これらの異常が、肥満、糖尿病、高血圧症、高中性脂肪血症等を引き起こすことが、現代医学で証明されているという。これは「死の四十奏」、「内蔵脂肪症候群」と呼ばれていたが、WHO(世界保健機関)が、総称して「代謝症候群」メタボリックシンドロームという名称にした。

動脈硬化を起す、肥満、高血圧、糖尿病、高脂血症(高コレステロール血症)のうち、危険因子を三つ以上持つ人を、メタボリックシンドロームという。この四つの危険因子は、シニア世代死の四重奏と言われ、心臓疾患の発祥リスクは、加えて責任感旺盛で、自分を追い込むA型タイプは危険因子を持たない人に比べて、三十〜五十倍以上とされる。

最近の研究で、脂肪細胞でアデポネクチンという物質が分泌されていることが、大阪大学医学部分子制御内科船橋徹講師等の手で解明された。脂肪細胞は従来エネルギーの貯蔵庫だとされていたが、最近脂肪細胞で、多くの生理活性物質が分泌されていることが明らかになった。これ等は総称して、アデポサイトカインという。この内遺伝子発現量の多い

このアデポネクチンは、抗動脈硬化、抗炎症、抗糖尿病作用を示し、障害を受けた血管修復に寄与していると考えられている。この発見の議論の学問の場で、そんなことはないだろうとコテンパンに叩かれたという逸話がある。

医学の進歩は日進月歩、病気を起す男の場合、圧倒的に内臓脂肪で、中でも最も危険な肥満が内臓脂肪蓄積型の肥満である。痩せているのに、ポコンとお腹が突き出しているタイプに多い。アデポネクチンの量を増やして、シニヤ世代の死の四重奏を防ぐには、兎に角先ず内臓脂肪を減らすことだそう。それには、食事療法と適度な運動療法の両面から健康維持を心がける必要があるという。

糖尿病(耐糖能異常)や高血圧、高コレステロール血症等が同時進行すると、「内臓脂肪症候群」と呼ばれる状態になり、やがて動脈硬化による、脳卒中や心筋梗塞に発展する可能性があるからだ。

肥満指標は、体重(kg)を身長(m)の2乗で割った値=BMI (Body Mass Index) で表される。理想値=22、肥満=26.4以上といわれている。理想値=22から、自らこの指標を使ってチェックしてみる必要がある。

熟女連に、今更對抗心を持つとするのも止めた方がよい。所詮、地球上のどの生物も、雌が雄よりも生命力に優れたDNAが組込まれている。精々晩年になつたら食い物に気を付けて、その事をよくわきまえて暮らすが良い。蟻螂なら交尾後に、食い殺されるのだ。

そうならないだけでも感謝して生きることだ。何故なら、喫煙・飲酒と共に精神的ストレスもまた、こうした疾患に大いに関係しているといわれているからである。だから年金で暮らす熟年男性は、今迄の様なお節介は止めて、怒りをもたらず異常な社会問題にも眼を瞑り、心を穏やかに保ち、脳を活性化するという、パソコンやゲームの本の買い込むよりは、時に花鳥風月に遊び、手遊びの文化活動に親しみ、図書館通いか公民館のカルチャーセンターで、同世代の人間と与太話をする位が、身分相応で丁度良いからである。

熟年シニヤ予備軍の団塊の世代にとつての、現代はそもも言つてられない状況下にある。ふと世の中に眼をやれば、依然として心のトンネル内で葛藤し、ストレスの原因となる危険因子が暗闇に目白押しに待ち構えているからである。曰く「少子高齢化社会」「下流社会」「熟年離婚」「人格障害」「鳥インフルエンザ」「老老介護」「尊属殺人」「年金破綻」「二千年問題」「韓流・嫌韓流」「孤食・孤独死」「デトックス」「官製談合」「コンプライアンス」「ロハス」「M&A」等々、さらに次々と生体不適合『代謝症候群』が、心の旅の更なる余生に転がっているからである。日本の人口ピラミッド構成から考えて、当然これから益々増加するシニアの生き方で重

要なことは、自分にとつて一体何が幸福なのかを見付ける必要があるということである。と言つても凡人には中々難しい命題で、死ぬまでに自分を納得させる幸の源が、一つも見付かれれば良しとせねばなるまい。

東風渡る和銅の里の泣き笑い・踏碁

後編終わり

参考文献

- 「過労自殺」川人博著 岩波新書
 「心の手カラをつける」飯田英晴著 中央労働災害防止協会
 「The SOURCE」高原伸輔訳
 a novel by JAMES A MOENER
 Random House New York
 「ジャパンモデル」田原総一郎著 PH.D 研究所
 「狭心症・心筋梗塞」第二版 小船井良夫著 同文書院
 「ルビキこもり」新井健治 奥山雅久共著 埼玉新聞社
 「前世を記憶する子どもたち」Jan Stevenson 著
 笠原敏雄訳 日本教文社
 「前世の言葉を話す人々」Jan Stevenson 著
 笠原敏雄訳 春秋社
 「あの世」からの帰還 Michael B. Sabom M.D. 著
 笠原敏雄訳 日本教文社
 「日本の中の「サヤ文化」」久保有政著 学研
 「鳥崎藤村とパリ・ミューン」梅本浩志著 社会評論社
 「サヤ人と日本人」Ben-Ari S. Siiony 著
 仲山順一訳 日本公法
 「サヤ五千年の教え」Marvin Tokayer 編著
 加瀬英明訳 実業之日本社
 「文藝春秋 三月特別号」二〇〇六 文藝春秋社
 「雑誌ムー六月号」二〇〇一 学研